

ルヒ)との論争問題の性質上論争と云ふに過ぎぬ事實においては、雙方とも相手につては何等顧慮するところがなかつた——は、畢竟雙方とも當を得て居り、雙方とも當を得て居らぬといふこと、ならびに雙方とも中間の場合を顧慮しなかつたといふことになる¹⁾と云つてゐるのである。

1) Marx, Das Kapital, III, 1, S. 162, Note. (同譯本三の一322頁註)

第五章 直接労働と間接労働

貨物の生産に費されたる労働は如何なる部分から成り立つてゐるかの問題の一つとして、リカアドの價值論に於ては、所謂直接労働と間接労働との問題がある。私は本章に於てこの問題を取扱ひ、この點についての彼れの長所を見ると同時にその缺陷を指摘することにより、資本の正しい概念が彼に於て如何に不足してゐたかを論究して見たいと思ふ。

リカアドに依れば、貨物の交換價值を決定する労働とは、單り最後の生産行程に於て直接に費さるゝところの労働のみならず、それを補助するがために必要な機械、器具、建物などの生産に嘗つて費されたる労働をも含んでゐる。即ち彼れ自身の詞に依れば、『直接貨物に加へられたる労働のみならず、かゝる労働を補助する器具、道具、及び建物に下されたる労働も亦、その價值に影響するのである。』¹⁾先づこの點に關する彼れの主張の大體を彼れ自身の詞につい

1) Ricardo, *ibid.*, p. 17. (同譯本31頁)

て窺うて見よう。彼は云ふ。

一八二

『アダム・スミスが觸れてゐる初期の状態に於ても、獵師をして鳥獸を殺すを得しむるがためには、ある資本——恐らく彼自身に依つて製作され且つ蓄積されたるものであらうが——が必要であらう。何等かの武器がなかつたならば、海狸も鹿も殺され得ないであらう。それゆゑに、これらの動物の價値はたゞに彼等を殺すに必要な時間と労働とに依つてのみならず、獵師の資本、即ちそのもの、助けによつてその殺戮が爲し遂げらるゝ所の武器を用意するに必要な時間と労働とによつても亦、左右さるゝであらう。

『海狸を殺すに必要な武器は、この動物に近づくことがより、困難であり、従つてより、正確に的中することが必要である所から、鹿を殺すに必要なものよりも、非常により、多くの労働を以て製作されたと假定するならば、一匹の海狸は、當然に、二匹の鹿よりもより、多くの價値があらう。當にこの理由により、より、多くの労働が、一般的に、海狸を殺すに必要なものであるであらう。更に又、兩方の武器を製作するに同一量の労働が必要なるも、これらは耐久力を非常に異

にしてゐると假定するならば、耐久力の多い器具からは、その價値の小部分宛が貨物に移るであらうし、耐久力のより、少い器具からは、その生産に貢獻したる所の貨物に、價値の一層より、大なる部分が實現さるゝであらう。』

右は海狸及び鹿を殺すに必要な總ての器具並にこれらのものを殺すに費さるゝ労働が、各々同一人に屬するところの状態に於て、言つたのであるが、前者が一つの階級の人々に屬し、後者が他の階級の人々によつて提供せらるるところの社會状態の下に於ても、右述べたることは同じであつて、海狸及び鹿の比較價値は、資本の形成とこれらの動物の殺戮とに費されたる、實際の労働分量に比例するであらうと、リカードは云ふのである。即ち、資本が労働に比して豊富なる或は稀少なる各異なる事情の下に於ては、即ち人間の生活維持に缺くべからざる食物及び必需品が豊富なる或は稀少なる各異なる事情の下に於ては、同一の資本の價値を一つの職業又は他の職業に提供する人は、得られたる生産物の半分、四分の一、或は八分の一を得、残りは労働を提供したる人々に勞賃として支拂はれるであらう。がこの分割は、これらの貨物の

一八三

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 17—8. (同譯本31—2頁)

相對價值には影響することは出来ない。何故なれば、資本の利潤が多からうと少からうと、即ちそが五〇パーセント、二〇パーセント、或は一〇パーセントであらうと、或は又労働の勞賃が高からうと低からうと、これらは兩方の職業に同様に作用するからである。¹⁾

リカアドに依れば、更に社會の職業の範圍が擴張し、或る者は漁獵に必要な獨木舟及び船具を造り、他の者は農業に用ひらるゝ種子、及び始めての粗末なる機械を造るが如き場合にありても、又一層進歩が行はれ、技術及び商業の繁榮せる社會の状態に於ても、貨物の交換價值は、直接に費されたる直接労働と器具、機械などの生産に費されたる間接労働とにより決定さるゝとの命題は、依然として眞理であらねばならぬ。

アダム・スミスにありては、貨物の價值の構成に與るものとしては、たゞ所謂直接労働のみが選ばれ、所謂間接労働は考慮の外に置かれてゐる。然るにリカアドがかく價值形成労働として、直接労働の外に間接労働をも數ふるに至つたことは、彼にありては原料の労働が除かれてゐると云ふ缺點があるが、²⁾彼

1) Ricardo, *ibid.*, p. 18. (同譯本32—3頁)

2) Marx, *Theorien*, II, 1, S. 13. 参照

が労働價值説をより徹底せしめたことを意味してゐるのであつてリカアド價值論の一功績であると云へよう。彼がその著作に於て特に資本の本質について論ずることなきは、かく彼が資本をたゞ間接又は蓄積労働と見しかも資本の本質を間接労働と直接労働との對抗關係のうちに見出さなかつたことに由るものである。

斯様に資本を労働に還元すること、即ちそれを貯藏労働、蓄積労働(stored-up, hoarded, accumulated, embodied, canned, petrified labour; vergangene, mittelbare, vergegenständlichte, vorgetane, Arbeit.)と看做す立場は、ジェイムズ・ミル、マカロック、クキャンシイ等リカアド學徒の踏襲するところとなり、更にマルクスによつて一層發展せられたものである。マカロックの如きは、交換價值形成に與る労働として、人間の労働、器具、機械によつて爲される労働の外に、動物の労働自然によつて爲される労働といふやうなものをも概念し、數ふるの極端に走つたものである。^(註)

マーシャルはリカアドの價值論を労働價值説として解せず、それを一種の

生産費説(しかも效用説と撞著せざる)として解せんとするのであるが、アシュレーはマーシャルに反對して、この解釋の當らざることを諸々の論據により示さうとした。彼はその最も重要な論據を、このリカードが資本を蓄積労働とせる態度に求め、『それゆゑにリカードの趣意如何に關する困難を解く鍵は明らかにこれである』¹⁾として、このことを詳かに論じてゐるのである。

(註) マカロツクの記事を左に擧げて見よう。

『それゆゑに労働は——人間、下等動物、機械によつて爲されようが、又自然によつて爲されようが——何らかの欲する結果を齎らすところの何らかの種類の行動、作業であると定義してよいやうに見える。』²⁾

リカードはかく労働に直接労働、間接労働の二種別を認め、ともに貨物の交換價値の構成に與かるものとしたるに拘はらず、直接労働が間接労働に相對立する關係の下に於てのみ甫めて資本として浮び上がることに、即ち資本の本質について明らかなる理解がなかつた。詳しく云へば、一方に於て右の二者はそれ〴〵價値形成労働として如何なる意義を有してゐるか、それらは價値形成に對して各々如何に異なる役割を演ずるか、即ち間接労働はたゞ一つ

- 1) Ashley, "The Rehabilitation of Ricardo," The Economic Journal, Vol. I, 1891, p. 480.
- 2) McCulloch's edition of A. Smith's Wealth of Nations, 2nd ed., 1849, notes & dissertations, p. 435.

の貨物より他の新なる貨物にその儘部分的又は全部的に移轉し、何等價値増殖に貢獻するところはないが、直接労働はこれに反し、それ自らを回收する労働即ち支拂労働の外に、餘剩労働即ち不拂労働を造出するものである。にも拘はらず、他方に於て、前者の所有者資本家には、その分量に應じて、利潤が與へられ、後者を支出する労働者にはたゞ支拂労働の回收費、即ち生活資料の價格のみが與へらるゝにすぎない、と云ふことをリカードは明確に理解するところがなかつた。彼が直接労働、間接労働と労働を分別せるのみならず、又勞賃利潤は各々與へられたる總價値額の相分割せられたる二つの部分であることに氣附いてゐるに拘はらず、資本を不變、可變資本に分別することによつて、資本の概念を把捉し、利潤の本質、餘剩價値の發生を瞭にするに至らなかつた所以である。彼に在りては資本、利潤はすでに在るものであつて、その本質、發生原因如何は彼れの學問的興味の外に在つたのである。彼は資本の概念を定義して左の如く言つてゐる。

『資本は一國の富のうち、生産に使用さるゝ所のその部分であつて、食物、衣

服、道具、粗生原料品、機械など、労働を効果あらしむるに必要なものから成り立つてゐる。』

これによつて見るも、リカードが如何に資本の本質を理解し得なかつたかがわかる。彼に在りては、資本はたゞ過去の労働の蓄積であつて、労働を補助する食物、衣服、道具、機械、建築物などの自然物なのである。ところが資本は物ではなく、一定の歴史的社会的生産関係が一つの物に附與する一の社会的歴史的事實在である。即ち『資本なるものは、生産上の一要素に與へられたる、一定の生産方法、即ち社会的生産行程の一定の歴史的姿容に伴ふところの形態であつて、一定の社会的形態と融合し、それによつて表現されるものであり』¹⁾『資本は物ではなく、一定の歴史的社会的形態に屬する一定の社会的生産関係であつて、この生産関係が一の物に依つて表現され、それに特種の社会的性質を附與するのである。資本とは物質的な生産された生産関係の總計を指すものではない。それは寧ろ資本に轉化された生産関係を意味するものであつて、この生産関係はそれ自體に於ては資本にあらざることなほ金銀がそれ自

1) Ricardo, *ibid.*, p. 72. (同譯本141頁)

2) Marx, *Das Kapital*, III, 2, S. 351. (同譯本三の四367頁)

體に於ては貨幣にあらざるが如くである。資本とは社會の一定部分の人々に依つて獨占された生産機關、即ち生きた労働力に對抗して獨立したる、この労働力の生産物と實現條件とを指すものであつて、これらの物はかくの如き對立に依り資本に於て人格化するのである。』¹⁾このことを内容的に詳しく言へば、現今の資本家的生産方法の下に於て、生産手段を所持する資本家が、ただ労働力のみを所持するにすぎない労働者を雇ひ入れ、即ち労働力を買ひ入れ、それを生産行程に於て消費し、餘剩労働、不拂労働を搾取することにより、餘剩價值、利潤を獲得するの事實、資本家が過去の労働の同じ分量と生きたる労働の同じ分量とを交換しない、即ち彼れの獲たる所の生きた労働の分量は、彼が支拂つた所の生きた労働の分量より大である、といふ事實、短言すれば、生きた労働と過去の労働との交換は、商品と商品との交換とは異なる、といふ事實——これらの事實の裡に資本の本質は横はり、隨つて利潤の源泉は見出され得るといふことはリカードの未だ意識し得ざりし所である。要するに彼は資本の表面的、現實的運動および資本の自然的素材としての生産機關の機能

1) Marx, *a. n. O.*, S. 349. (同譯本同冊304頁)

などについて云々するにとゞまり、歴史的社會的生產關係の示現としての資本、即ち資本そのものについて何等の理解をも有してゐなかつたのである。なほこの點についてのリカアドの見解に關しては、後章に於て更に詳しく論ずる所あるであらう。

二

リカアドが總ゆる間接、直接労働を價值造的労働と見たことは、彼れの價值論の一發展を意味するものではあるが、しかしそれに伴うて彼がたゞに貨物の生産行程に於て費されたる労働のみならず、分配、交換行程、即ち流通行程に於て費されたる労働をも價值の構成に與るものとしたことは、彼れの價值概念の未だ至らなかつたことを示す證據の一つである。例へば彼は左の如く言つてゐる。

『更にもつと進歩の行はれ、技術や商業の盛んな社會に就て觀察するも、やはり財の價值はこの原理に従つて高低するを知るであらう。例へば靴下の交換價值を測定するに當り、吾々はその價值が他物との比較的關係に於て、その

製造に、その市場への運搬に、必要なる全労働量の多少に依つて定まることを見るであらう。第一に、生綿を栽培する土地の耕作に必要な労働がある。

第二に、綿を靴下の製造さるべき國に運搬する労働——それにはその綿を運搬する船舶の建造に費された労働の一部が含まれてゐる、さうしてそれは貨物の運賃として課せられる——がある。第三に、紡績工および機械工の労働があり、第四に、靴下の製造を補助する建物および機械を建造したる技師、鍛冶屋及び大工の労働の一部分がある。第五に、小賣商人その他これ以上一々擧げる必要のない多くの人々の労働がある。これら各種の労働の總計がこれらの靴下が交換さるゝ所の他物の分量を決定すると同時に、これら他物に費されたる労働の種々なる分量に關する同一の考へが、これらの物の如何なる分量が靴下と交換して與へらるべきかを、同様に支配するであらう。』

ところがマルクスにありては、その謂ふ所の價值生産的労働とは、商品の生産、行程に於て費されたる平均労働を意味するのであつて、商品の流通行程に於て費されたる労働は、價值構成に與からぬものとして、價值生産的労働よ

1) Ricardo, *ibid.*, p. 18-9. (同譯本34-5頁) なほ商業、運輸の商品價值増加に關する問題についてセイの見解を駁せるリカアドの所説參照 Ricardo, *ibid.*, pp. 249-10. (同譯本249-50頁)

り除外されてゐる。この商品の流通行程に於て費さるゝ労働例へば賣買取引簿記などに費さるゝ活労働貨幣その他の流通手段に費さるゝ死労働に對する報酬は、マルクスに従へば、商品の生産費を成して、その生産價格の一部を形成するものではあるが、それは商品の生産に依つて發現したるところの價値の分配に與かるにすぎない。それは價値よりの控除(Abzug)なのであつて價値の構成に與るものではない。尤も流通行程に於ても、かゝる價値轉形に即ち觀念的に考察せる流通に、本づく流通費用でなしに、流通形態からその生産的性質を隠蔽されてゐる所の流通部に繼續さるゝに過ぎない生産行程——運輸或る場合に於ける商品貯藏に費される労働は、價値造出的労働として數へらるべきではあるが。

リカードがかく商品の生産、交換、分配行程に於て費される總ゆる労働を漏れなく全部價値生産的労働であるとしたことは、彼が價値を生産行程に於て見ずして、流通行程に於て見、隨つて價値を生産關係の示現として理解しなかつたことに由るのであつて、彼が價値と生産價格とを混淆したることも亦

この事情と密接なる關係があると云へる。(註)

(註) マルクスが流通行程に於て費されたる労働は價値を形成するものではなく、隨つてその費用は價値からの控除であるとする文字の一二を左に擧げて置く。『商品取引は、資本家の手によつて廣大なる範圍を占むるものであるが、かゝる原因によつて、この價値を造り出すことなく、單に價値の形成轉化を媒介するにすぎない労働が、價値造出的の労働に轉化し得るものでないことは云ふ迄もない。』『この場合、流通費用の有らゆる細目(例へば荷造、品別などの如き)について述べる必要はない。普遍律たるの事實は、商品の轉形にのみ基く一切の流通費用は、商品に何等の價値をも附加するものではないといふことである。かくの如き流通費用は、價値の實現又は一つの形態より他の形態への價値移轉に伴ふ費用にすぎないのである。この費用に投ぜらるゝ資本(それによつて支配せらるゝ労働をも含む)は、資本制生産方法に伴ふ、失費の範圍に屬すものである。かゝる費用は、餘利價値の中から回收されねばならぬものであつて、資本家的階級全體の立場から見れば、餘利價値又は餘利生産物からの控除を意味する。』

1) Marx, Das Kapital, II, S. 101. (同譯本三の一—218頁)
2) Marx, a. a. O., S. 120. (同譯本同冊257—8頁)

第六章 相對價值と眞實(絕對)價值

リカアドは交換價值||相對價值を取扱つたものであると一般に云はれる。彼が謂ふ所の相對價值とは一體何を意味するか? それに對する彼れの理解の程度は、彼れが價值の單位、品質についての考察の缺けてゐること、相俟つて、如何なる影響を、價值、交換價值、および貨幣などの概念並びにそれら相互の關係を正當に理解することに對して齎らしたであらうか? 私は本章に於てこの問題を吟味して見たいと思ふ。

リカアドが謂ふ所の交換價值、即ち相對價值には、彼れの無意識のうち、二つの意義が混淆して意味されてゐる。その一つは、勞働時間に依つて決定されるゝところの交換價值であつて、後に述ぶるものに對してこれは絕對價值若くは眞實價值と云はるゝところのものである。他の一つは、一つの貨物の交換價值が他の貨物の使用價值で言ひ現はされたるものであつて、これは狹義に於ける相對價值若くは彼が時として比較價值と云ふところのものである。

リカアドは、彼れの所謂相對價值に意味せられたるこの二つの意義を明白に識別することができずして、主として、ともに相對價值と呼んだ。さうして彼は、暗黙の裡に、若くは時折明白に、前に意味する相對價值の存在を意識しつゝ、主として後に意味する相對價值をその主なる研究の對象としようとしたのである。

以下私は、先づ(一)狹義に於ける相對價值即ち比較價值の如何なるものなるかを見、次に(二)絕對的意義に於ける相對價值即ち絕對若くは眞實價值を吟味し、(三)に於て、ベイリーのこのリカアドの態度に對する非難を検討したる後、最後に於て(四)リカアドのこの點についての態度を總括的に批評することにより、如何に彼が價值、交換價值、貨幣などの概念について曖昧、不十分なる態度を持してゐたか、さうしてそれは、彼れの價值論が多く、理解のない批評家の非難の對象となりしに拘はらず、彼れおよびその學徒がそれに對して、十分に答ふることができなかつた原因を成してゐる、ことを瞭にするであらう。(註)

(註) リカアドが交換價值(相對價值)と絕對價值(眞實、實證價值)とを、意識的に、しかし

不十分ながら、區別し若くは更にそれを關係づけたと憶しき文句は、彼れの著作に於て散見するところであるが、こゝには彼れの書簡集から一二を引用する。

トロワ宛(一八二一、七、四)「私は、貨物に費されたる労働がその交換価値の尺度であるとは云はない、その實證価値の尺度である」と云ふのである。更に私は、交換価値は實證価値に左右さるゝが故に、それは費されたる労働に左右さるゝことを附け加へて置く。¹⁾

トロワ宛(一八二一、一〇、四)「『眞實価値』と『交換価値』との問題について、貴下は何故にこれら二つの觀念が、全く明瞭に、分別せられ、別々の言葉にて云ひ現はさるべきでないかを尋ねられる。なぜ一體それらはさうあつてはいけないのか？ 私はそれに答へる——しかし私は自分の方で、それら二つの觀念は、一方に『眞實』なる詞、他方に『交換』なる詞を先頭に附けることにより、識別せられてゐないかどうかを尋ねたい。²⁾」

リカードが研究の對象としたる交換価値は、本來の意義若くは狹義に於ける相對価値であることを、彼は屢々斷つてゐる。例へば、彼は、さきにも述べた置いたやうに、労働の質的評價單位について若干顧みるところがないでも

なかつたに拘はらず、それが立ち入つた研究をしなかつたのは、その評價の段階は一度定まつたならば殆んど變動することなきが故に、相交換される二貨物間のたゞ相對的比例のみを問題としようとした彼に在りては、かゝる研究は何等彼れの目指す所に關係するものではないと思惟したるに因るのである。この問題を取扱へる價值論の第二節に於て、彼はこのことについて左の如く言つてゐる。

『私が讀者の注意を惹かうとする研究は、貨物の相對価値の變動の結果に關するものであつて、その絕對価値のそれに關するものでないから、各異なる種類の人間労働を評價して、その比較的段階を研究することは、餘り重要ではないであらう。吾々は次の如く結論してよいであらう、——本來各種類の労働の間に如何に不平等があり、又或る種の手工的技術を會得するに、他の種のものよりも、如何により多くの才能、熟練、又は時間を必要とするも、その間の關係は、一時代より次の時代に移つても、殆んど同様であり、或は尠くとも、その變動は、年々極めて些少のものであるから、短期間の内に於て

1) Letters of Ricardo to Trower, 1899, p. 151.

2) ibid., p. 162.

は、それは貨物の相對價值に殆んど影響を及ぼすことがない、と。¹⁾』
 なほ他の個所に於て次のやうな詞も見出される。

『猶ほ云つて置かねばならぬことは、一つの貨物はそれに一〇〇〇磅となるだけの労働が費され、さうして他の貨物はそれに二〇〇〇磅となるだけの労働が費されてゐるが故に、一は一〇〇〇磅の價值を有つであらうし、他は二〇〇〇磅の價值を有つであらう、と私は云つたのではなくして、私は、これらのもの、價值は相互の關係に於て、一に對する二であり、そしてこの比例にてそれらは交換さるゝであらう、と云つたのである、といふことである。これらの貨物の一が一〇〇〇磅で賣れ、他が二二〇〇磅で賣れよう、或は一が一五〇〇磅に、他が二〇〇〇磅に賣れよう、それはこの學說の眞理にとつては重要ではない。この問題はいま研究しない。私は、たゞ、これらのもの、相對價值は、その生産に費されたる労働の相對的分量によつて支配さるゝであらうといふことを肯定するのみである。²⁾』
 リカアドが貨物の相對的比例關係のみを問題としたることは、その他なほ

1) Ricardo, *ibid.*, p. 16. (同譯本29—30頁)

2) Ricardo, *ibid.*, p. 39. (同譯本76—77頁)

多くの個所に於ても、見受けらるゝところである。勞賃および利潤の變動が交換價值に變動を及ぼすことがないのは、彼に在りては『資本の利潤が多からうと、或は少からうと、即ちそが五〇パーセント、二〇パーセント、或は一〇パーセントであらうと、或は又勞賃が高からうと低からうと、これらは兩方の職業に同様に作用するからである。¹⁾』

これらの言葉によつて見れば、リカアドがこゝに意義する相對價值は、その實例へば、B商品の使用價值に表章さるゝところのA商品の價值に外ならぬ。このことを詳しく言へば、A・B商品の雙方に或る等一なる内容實體たる何等かゞ(さうしてそれは人間労働)等量に含まれてゐるがゆゑに、A商品の價值はそれとは使用價值の異なつたB商品によつて表章され得るのである。しかしリカアドは彼れのこゝに謂ふ所の相對價值を、かゝる正常なる意義に於て解し得なかつたことは申す迄もない。彼にありては、A商品に投ぜられたる労働の分量が、B商品に投ぜられたる労働の分量に立つ相對的關係が、單なる二者の比率が、多くの場合に於て、所謂相對價值とせられ、それ以上立ち入

1) Ricardo, *ibid.*, p. 18. (同譯本33頁)

つて二者のこの関係を解剖しようとしなかつたのである。

惟ふに交換価値をかくの如く純相對的(但し不十分に)に意義することは、正統學派一般に通ずるところであつて、アダム・スミスが『その物の所有が齎らるところの他の財を購買する力』と云ひ、リカードが『その貨物と交換せらるゝ或る他の貨物の分量』などと云へるは、等しくこの意義に於ける交換価値に外ならない。さうしてこの交換価値の定義は今猶ほ多くの學者により承認、採用せられてゐる所のものである。

二

リカードは右述べたるが如く、一方に於て、A商品の交換価値を、A商品のB商品に對する單なる相對的比率若くは關係としたると同時に、他方に於て、その關係と離れて、若くはそれが前提をなすものとして、存在すと考へらるべき絕對的意義に於ける交換価値、即ち眞實価値を説き、それら二者それ〴〵の本質および相互の關係を明確に把握することなくして、ともに相對價值時として後者を絕對價值、眞實価値と呼んだ¹⁾と呼んだことは、左の文章に依つて知る

ことができる。

『若し貨物に實現せられたる労働の分量が、その交換価値を左右するものとせば、労働の分量の各増加は、それに労働が加へらるゝ所のその貨物の價值を増加し、その各減少はそれを低落せしめなければならぬ。』

『……貨物の現在又は過去の相對價值を決定するものは、労働が生産するであらう所の貨物の比較的分量であつて、労働者に彼れの労働と交換して與へらるゝ貨物の比較的分量ではない、と云ふのは正しい。』

これらの詞は、彼が所謂絕對價值に就て云つて居ることを示すものであるが、なほ彼が『價值の不變の尺度』に就て云爲してゐることは、彼が交換価値によつて二物の相對的關係以外の或るものを意義してゐたことを語るものであり、且つ又『原理』第二十章『價值と富、それらの特性』に於て見出される彼れの價值概念は、徹頭徹尾絕對的意義に於けるそれであることは疑ふべくもない。例へば彼は云ふ。

『しからば、價值は本質的に富とは異なつてゐる。何故なれば、價值は、生産の

1) Ricardo, *ibid.*, p. 8. (同譯本14頁)
2) Ricardo, *ibid.*, p. 11. (同譯本20頁)

豊富に依つて定まるものではなくして、その難易に依つて定まるものであるから。製造業に於ける一百万人の労働は、常に同一の価値を生産すべしと雖も、必らずしも同一の富を生産するとは限らない。機械の發明に依り、技術の改良により、分業の改善により、或はより有利なる交易の行はれ得べき新市場の發見によつて、一百万の人は、一の社會狀態に於て、他の社會狀態に於て生産することができる所の富、即ち、必要品、便利品、及び娛樂品の分量の二倍或は三倍を生産することができるかも知れない。しかしそれだからとて、彼等は價值には何物をも附加しないであらう。何故なれば、各々の物の價值は、それを生産するの容易または困難に比例して、言葉を換へて言へば、その生産に使用さるゝ労働の分量に比例して、騰貴したり又は下落したりするものであるから。¹⁾

リカードは、かく一方に於いて、相對價值を説くと同時に、他方に於て、絶對價值を云ふのであるが、この二者の關係は彼に於て如何に取扱はれたであらうか？彼がこの二者を關係附けたと思はるゝ所を窺うて見んに、彼に依れば「二つの貨物がその相對價值に於て變動を來たしたるとき、吾々は、その孰れに於てこの變動が實際起つたのであるかを知らうとする。先づ第一に、その中の一つの現在の價值を靴、靴下、帽子、鐵、砂糖、及びその他の貨物と比較するならば、吾々は、それが總て以前と同じやうに、これらのものゝ同量と正確に交換さるゝであらうことを發見する。さらに吾々が、今一つのものを前と同一の諸々の貨物と比較するならば、吾々は、それがこれらのものゝ總てに關して變動してゐるのを發見する。然る時、吾々は、變動はこの貨物に由るのであつて、それと比較したる諸々の貨物にあるのではないといふことを、十中八九迄推測することができらう。若し、更にもつと詳細にこれら各種の貨物の生産に關聯する總ての事情を調査せる結果、吾々が、靴、靴下、帽子、鐵、砂糖等の生産に就ては、以前と正確に同一量の労働及び資本が必要であることを發見するに反し、その相對價值が變化したる所のその一個の貨物の生産には、以前と同一量の労働が不必要になつたといふことを發見するならば、蓋然性は確實性に變じ、さうして吾々は該變動がその一個の貨物にあることを確知する、かくて吾々

1) Ricardo *ibid.*, p. 258. (同譯本265—6頁)

はその變動の原因を見出すのである。¹⁾『諸々の貨物が相對價值に於て變動したる場合には、何れの貨物が眞實價值に於て下落し、何れが騰貴したのであるかを定むるところの手段を有つことは望ましいであらう。さうしてこのことは、これらのものを順次に、或る不變的な價值の標準尺度——それ自身他の諸々の貨物が蒙むるが如き變動の何れにも影響せらるゝことのないところのもの——に依つて比較することにより成し遂げらるゝの外はない。』

これらの文字に於て、リカアドは絶対價值、眞實價值の相對價值に對する關係を説き、前者の多少は後者に變動を及ぼすものなることを云ふのであるが、しかし既に述べたるが如く、彼は勞働の質的等一性、單位について何等語るところなく、たゞ勞働の大いさのみを取扱つたのであるから、この二者の關係、隨つて又相對價值の本質についての彼れの理解は極めて不十分なるものであつた。

要する所彼は眞實價值と相對價值とを正當に關係附けることができなかつたのみならず、彼れの意味する交換價值がその孰れであるかについても、可

1) Ricardo, *ibid.*, p. 12. (同譯本21—2頁)
2) Ricardo, *ibid.*, p. 36. (同譯本69—70頁)

成り曖昧である。果してこのリカアドの不分明なる態度は、ベイリーをしてリカアドが屢々相對價值こそその研究の主要題目であるとせざるに拘はらず、その實、絶対價值を頻りに云ふが如きは、所謂相對價值を二重に意義するものであるとして、彼を難ぜしむる所以となつたものである。このベイリーのリカアド非難は當時論壇の興味の中心となつたものである。私は次にこのベイリーの批評を吟味することにより、彼がよくリカアドのこの點に於ての缺陷を指摘せるを見ると同時に、半面に於てベイリーが如何にリカアドの根本的立場を理解するところがなかつたかを瞭にして見たいと思ふ。

三

ベイリーのリカアドの價值論に對する非難は、その當時可成有名になつた所の一書——*A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; chiefly in reference to the Writings of Mr. Ricardo and his Followers, by the Author of Essays on the Formation and Publication of Opinions, &c. &c.*——に於て詳々に述べられてゐる。私はこれに依つてベイリーのリカアド批評を窺うて見たいと思ふ。

ベイヤールに依るに、貨物の價值とはアダム・スミスの言へる如く「その物の所有が齎らす所の他物を購買する力」を表はすものである。だから價值には比較され得る二つの物がなければならぬ。他のものに關係なく一物に就てのみ價值を云々するは不可能である。物の價值が他物購買力であるならば何らかの購買すべきものがあらねばならぬ。要するに價值は、眞實の固有の何物をも示すものではなく、たゞ單に二つの物が相互に交換せらるべき貨物として對立するその關係を示すものに過ぎない。

かく價值を二物の關係と見て來ると、價值は比較される二物の一物に就ては變動するが、その他物に就ては變動しない、とは云ひ得られない。AのBに對する價值は變動するが、BのAに對する價值は變動しない、若くはAはBに對する價值に於て上るが、BはAに對する價值に於て動かぬ、など、考へるの是不合理極まる。それは地球の太陽からの距離は變はり得るが、太陽の地球からの距離は從前と同じである、と考ふるに等しく、實に馬鹿氣た話である。例へばA B二つの商品があつて、その價值は同じであるとする。ところが何

かの事情にて、Aの生産に以前の二倍の労働量が必要となるに、Bの生産には依然として同じ丈の労働量しか要せないとするならば、AのBに對する價值は二倍となるであらう、換言すれば、Aは二Bと交換され得るであらう。併しBは假令以前と同じ労働にて生産せらるゝにしても、以前と同じ價值を保つてはゐない、それも變化する。何故なればBはAの半分としか交換されないから。

この價值の相對的性質の説明に反對するものは云ふ、——Aの價值がBの價值に同じであると云ふ時には、この言ひ現はし方は、各々貨物に於ける固有の、絶對的の性質を意味してゐるのである、然らざれば如何にして吾人は一つの平等がこれら二つの價值の間に存在してゐると確言することができであらうかと。しかしベイヤールに依れば、Aの價值がBの價值に同じと云ふは、AがBと交換されると云ふことを示すにすぎないのであつて、それはあく迄も單なる二者の關係たるに外ならない。この命題は、その實、この二つの貨物が他の第三の貨物——多くの場合貨幣——に對する關係を考慮した上での

命題である。即ちそれはA Bは第三者のCに對する關係が同じであると云ふことを示す。吾々が二つの貨物の關係を云ふ時に、固有の、絶對的の、何らかを示してゐるものとしての價値の觀念が起るのは、常に他の貨物若くは貨幣に關係することの事情に由るものである。かくてベイヤールは云ふ。

『吾々が互に交換せらるべき貨物として物を比較するときには、二つの關係——そのもの、相互の關係及びそれらのもの、他の物に對する關係——が必らず吾々の比較に入り混じつてゐる。絶對價値が存在するが如く思はれるのは、この後の關係に由るものである。それらは吾々の直接の目的物である前者から全く獨立してゐるやうに見えるからである。いかにも吾々が畢竟比較せんとする二つの貨物の相互の關係を確めることができるのは、一般的に彼等の第三の貨物に對する關係によつてである。若し吾々が、A Bの價値が同じであるか否かを知らうとするならば、多くの場合、Cに於けるそれら各々の價値を見出す必要に迫らるゝであらう。而してAの價値はBの價値に等しいと云ふことを確言する時には、吾々はたゞAのCに對する比率がB

のCに對する比率に等しい、と云ふことを意味するに過ぎない。』

かくの如くベイヤールは、價値を定義して、さてリカアドの價値概念に對する曖昧の態度を非難する。リカアドは一方に於てアダム・スミスの價値の定義——他物購買力——に同意し乍ら、他方に於て、それを生産するに常に正確に同じ勞働分量を必要とするが如き何らかの貨物が見付かるならば、その貨物は不變の價値を有つであらう、と云ふ。併し價値が單に關係を示すものである限り、この命題は眞であり得ない。この貨物は何に對して不變の價値を有つであらうか？ 相關するものは何であるか？ そは他の總ゆる貨物に對して同じ價値を有つのであらうか？ さうであるかも知れない。が不變の勞働分量にて生産せらるゝがゆゑにさうではない。何故と云ふにこの場合勞働は依然として或る一定の量であるのに、若し他の貨物の勞働が増加したり減少したりするならば、この貨物と他の總ての貨物との價値關係はリカアド自身の原理によれば、直ちに變動するであらうからである。例へば穀物はその生産に常に正確に同じ勞働の分量を必要とするが、他の總ゆる貨物は以

1) Bailey, A Critical Dissertation, pp. 8-9.

前それらに費されたる労働分量の半分にて生産せられるやうになるならば、穀物の價值は決して依然として同じであるとは云はれない。この場合價值に於て變動したのは穀物でなくして、他の貨物であると云ふかも知れないが、價值が眞實の個有の性質でない限り、それは眞ではない。

かくてベイリーに依れば「價值は二物の關係を示すものであるから、價值は、その物の一つのみに影響する所の原因が生ずることはできないので、二つの原因から、即ちこの關係が其間に存在する所の物にそれ／＼働く二組の原因から、起らねばならぬ」と云ふことは、論ずる迄もなく明らかである。¹⁾リカードが價值の不變の尺度を云ふ時には常にこの事情を忘却せるものである。このことは單りリカードのみならず、マルクス、ディクキンシー等の同様に誤り冒したところである、とベイリーは云ふ。

ベイリーは相對價值に就ての彼れの考へを左の如く要約してゐる。

(一) 價值なる言葉が二物の間の關係を示すものなる以上、一貨物が、或る他の貨物に對する明らかかな、若くは暗黙なる、關係なくして、價值を有ち、或は價值

1) Bailey, *ibid.*, p. 16.

に於て變動するとは云はれ得ない。その價值は何らかに於ける價值、若くは何らかに對する關係に於ける價值であらねばならぬ。

(二) 二物のこの關係は、他の一物に關して變動することなしに、この一物に關して變動することはあり得ない。若しAがBに對する關係に於て上るならば、Bは固定的なるを得ずして、Aに對する關係に於て下らざるを得ない。

(三) 一貨物の價值はたゞ貨物或る他の物の分量によつてのみ言ひ現はされ得るに過ぎない。

(四) A貨物の價值が上ると云ふことは、この貨物の同じ分量が、以前よりはそれとの關係に於てA貨物の價值が上ると云はるゝ所のB貨物のより大なる分量と交換されることを意味する。

(五) Aの價值が下ると云ふことは、その同じ分量がBのより、少い分量と交換されることを意味する。

かくの如き觀點からして、ベイリーはリカードを初めスミス、マルサス等の用ゆるところの眞實價值及び名目價值の名稱を排する。彼は、一貨物の價值

は貨幣價值、穀物價值、布價值などと、それと比較される貨物に従つて、數限りなくあるものであつて、それらは何れも等しく眞實價值であり名目價值であると云ふ。

更にベイリーは、異なる時期に於ける貨物を相比較することは、價値の相對的性質なるよりして、不可能である、として次の如く云ふ。

『價値は同時代の貨物間の關係である。何故なれば斯くの如きものゝみが相互に交換され得るものであるからである。而して若し吾々が一時代に於ける貨物の價値と他の時代に於けるその價値とを比較するならば、それはこれら異なる時代に於て、その貨物が或る他の貨物に立つ關係の比較たるに過ぎない。それは一時代に於ける何らか個有の、獨立の性質と他の時代に於ける同じ性質との比較ではない。それは貨物が二つの異なる時代に於て互に交換される所の比率若くは相對的分量の比較たるに過ぎぬ。』

ベイリーは、リカードがその『原理』第一章『價値に就て』の劈頭に掲げるところの有名な見出し——一貨物の價値は、言ひ換へればその貨物と交換さ

1) Bailey, *ibid.*, pp. 72—3.

る、或る他の貨物の分量は、その生産に必要な労働の相對的分量に依つて定まり、その労働に對して支拂はるゝ報酬の大小に依つては定まらない——を挙げ、この前半に於ては、リカードは同時代の貨物に就て語つて居るのであるが、その後半に於ては、異なる貨物に就て言つてゐるのであつて、それは前者に對する論理的符合を成すものではない、と云ふのである。(註)

(註) ベイリーは、右の書に於て、この立場から、右述べたる以外に、價値の尺度及び原因、價値と富との區別、などに就て、リカードを初めスミス、マルサスなどを非難してゐる。

因にベイリーのこの非難に對しては、マルサスが其著『Definitions of Political Economy, 1837, pp. 125—202』に於て、'テイ・クンシイはその著『The Logic of Political Economy, 1844』に於てそれ〴〵論駁してゐる。

ベイリーは右に於て紹介したるが如く、アダム・スミスの交換價値の定義——'The power of purchasing other goods which the possession of that object conveys. ——を一物の他の一物に對する純相對的關係を意義せるものであると解し、リカードも亦、この意義に於て、この定義を採用したのであるとしてゐるが、マルサスはベイリーに反對して、この一句は特定の他物購買力ではなくして、一般他物購買力を意味してゐる、と解す

1) Ricardo, *ibid.*, p. 5.

2) Bailey, *ibid.*, pp. 4—9.

べきである¹⁾。この解釋はマルサスの方が正しいであらう。ガスマイスが交換價值を他物購買力とする限り、それは相對的觀念たるを免れぬ。

且又ベイリーが引用し²⁾、マルサスが再びとつて言及したる所のタランスが所謂交換價值³⁾は、マルサスの云ふが如く⁴⁾、一般貨物購買力(價格—特定貨物購買力)を云ひ現はすものであるが、決して相對的意義でないとは云はれぬ。

洵にリカアドは、一方に於て、價值を比較される二物の單なる關係又は比率なりとして、價值を純相對的に意義し乍ら、他方に於て、價值を一物に内在固有なるものと解したのである。さうしてこの二者を正當に關係附けることができずして、交換價值を意義するに、或時には前者を以てし、又他の時には後者を以てしたのであるから、さうしてリカアド自身は屢々交換價值を前者の意義に限定することを明言してゐるのであるから、ベイリーのこのリカアドの曖昧なる態度を指摘する限り、一應彼れの非難は正しいと云はねばならぬ。しかし乍らベイリーは寧ろ何故にリカアドが、無意識の裡に、已むを得ず、二つの價值概念を問題とせざるを得なかつたことを顧みるべきである。ベイリーは相交換される二物の相對的關係を價值なりと見、相對價值と眞實若くは

1) Malthus, Definitions, pp. 132—3.

2) Bailey, *ibid.*, pp. 32—3.

3) Torrens, An Essay on the Production of Wealth, 1821, pp. 48—9, 56—7

4) Malthus, *ibid.*, pp. 135—7.

絕對價值とを共に主張するは誤りであるといふ。しかしこの態度は、交換價值をたゞ外見的個然的個々の相對性のもとと見、一の社會的關係およびその表現形態と見ざることによつて、價值の本質を把握することから甚だしく隔つてゐる。リカアドの價值概念は、實質上、ベイリーの價值概念よりより複雑である¹⁾。そこには眞實價值とそれを相對的に表章する交換價值との二つの概念が不十分乍ら存在してゐるのであつて、それ故に彼れの價值論は不十分乍ら一の勞働價值論として全一體を成してゐるのであるが、リカアドはこのことを完全に關係せしむることが出來ず、ベイリーはたゞその相對價值のみを問題としたにすぎなかつたのである。たゞ單に價值の分量的比例關係のみを云爲せる限り、どうしても價值、交換價值、貨幣の本體を理解すべくもない。「エス・ベイリーの如く、價值形態の分解に従事したる少數の經濟學者は、第一、價值形態と價值とを混同したるがため、第二、實際的ブルジョアの粗硬なる影響を受け、初めから量的定性にのみ着眼したるがため、遂に何等の結果にも到達することができなかつた。「量の支配が……價值を構成する」(Bailey, "Money

1) ベイリーが相對價值を主觀的に定義してゐることも、リカアドと根本的に分たれる所である。

and its Vicissitudes," London, 1837, p. 11.)

ベイリーのリカアド批評が當らなかつたと同時に、リカアドの學徒がその非難に十分答ふることが出来なかつたことを指摘して、マルクスは左の如く言つてゐるのである。

「前記諸觀察の著者およびエス・ベイリーは、リカアドを非難して、彼は交換價値を單なる相對的のものから、絶對的のものに變へたと云つてゐる。しかし事實はその反對で、彼れはこれらのもの例へばダイヤモンドや眞珠などが交換價値として有する所の外見的相對性をば、その外見の背後に伏在する眞實の關係に、即ち人間労働の單なる表章としてのその相對性に約元したのである。リカアド學徒がベイリーに對して放膽的に答へたが、正鵠に當らなかつたのは、畢竟彼等がリカアドその人に於て、價値と價値形態(若くは交換價値)との間の内部的關係に就て、何等の解釋をも發見しなかつたからに外ならぬ。」

四

以上述べたる所により明らかなるが如く、リカアドは相對價値と絶對價値

1) Marx, Das Kapital, I. Volksausg. S. 16, Note. (同譯本一の—32頁註)

2) Marx, a. n. O., S. 47, Note. (同譯本同冊103頁註)

とを、その間の關係を瞭にすることなくして、相錯交して説いたのであるがこの二者の關係は、古典學派の諸學者に於て、各々意識的無意識的に論ぜられたるところのものである。しかしいづれもこの關係について充分満足なる答解を與へることができなかつた。しかるにマルクス出づるに及び、これら二者各々の本質および相互の關係が瞭にせられたのであつて、この點についての諸々の見解および論争は、マルクスに至つて行きついたものであると云つて不可はない。

リカアドの狹義に於ける相對價値即ち比較價値は、マルクスに在りては、價値にあらずして、それが表現形態たる價値形態即ち交換價値である。リカアドの眞實價値固有價値は、マルクスに在りては、單に價値即ち純然たる社會的實體——抽象的人間労働であるといふよりは、寧ろその大いさである(リカアドは價値労働の品質は顧慮の外に置き、たゞその分量のみを見たのであるから)。リカアドに於ては、この比較價値と眞實價値とが、たとひ彼れの意識の如何に拘はらず、相共に述べられ、彼れの價値論に織り込まれてゐるのであるが、

この二者の關係は頗る曖昧である。彼は價値の表現形態たる彼れの所謂比較價値を價値論の中心問題とせんとしたのであるが(その實必らずしも然らず)彼れが眞實價値の品質價値の單位について殆んど顧みるところがなかつたがため、それが本質は到底満足に分解せらるゝことがなかつたのである。現象形態はその内容實體をたゞ外部的に表章するのみ。それが本質——結局貨幣の本質を瞭にするがためには、どうしても價値、その内容實體たる労働そのもの、分析に迄遡らなければならぬ。

價値形態即ち交換價値は、一般に價値を表章するのみならず、又量的に限定せられたる價値即ち價値の大小を表章するものである。詳しく言へば、『商品Aの價値は、商品Bが商品Aと直接交換され得ることによつて、質的に表章される。この價値は、商品Bの一定量が商品Aの一定量と交換され得ることに依つて、量的に表章される。換言すれば、一商品の價値は、『交換價値』としてのその表現によつて、獨立的に表章されるものである。』¹⁾ところがリカアドの價値形態分析の不十分なることは、彼が單に價値の量的關係のみを考慮したるに

1) Marx, a. a. O., S. 26. (同譯本同冊55頁)

過ぎずして、その質的關係を殆んど顧みるところがなかつたことにある。

抑々一定の交換價値の成立は、必然的に、そこに互に通約し得る容積として、互に關係せしめらるゝ所の或る質的等一性の存在を前提とするものである。マルクスの言葉を借りて言へば、『一商品の單純なる價値表章が、如何やうに二商品間の價値關係内に伏在するかを見出すためには、先づ量的方面から全く切り離してこの價値關係を観察しなければならぬ。然るに大抵の人は、それと正反對の方法をとつて、價値關係の中に二種類の商品の定量が互に等位に置かれる比例のみを見、互に異なつた物の大小は、それを同一の單位に約元して見て始めて量的に比較し得ることを看過する。たゞ同一單位の表章としてこそ、これらは同名的、従つて互測的大さたるのである。』¹⁾リカアドは價値形態を考察する限り、彼は何らかの兩者に質的に共通なる等一物を、臆げながらも意識してゐたのでなければならぬ。而して彼は漫然それを労働を以てしたのであるが、彼に在りては、未だ労働の二重性が瞭にせられてゐなかつたがため、そこに考へられたる労働は抽象的人間労働たるが如きものではあり得

1) Marx, a. a. O., S. 16. (同譯本同冊32頁)

なかつた。こゝに彼れの價值論隨つて又等價形態貨幣分析の根本的缺陷が伏在してゐるのである。このことは既に第四章第一節に於て私の若干論じて置いた所である。要するにリカードは労働の質的考察を怠つたがために、労働と貨幣との關係或は労働が貨幣として表現されざるを得ないことを了解してゐない。詳しく言へば、彼は商品の交換價值が労働時間により決定せらるゝこと、商品の貨幣となる必然性との關係を理解せず、結局彼れの比較價值から貨幣の本質を導き出すことが出来なかつたのである。マルクスはこのことを指摘し、さうしてそれが何故にさうであつたかを説明するに、左の詞を以てしてゐる。

『商品特に商品價值の分析から、價值を交換價值たらしむる價值の形態を見するに成功しなかつたことは、古典學派經濟學の根本的缺陷の一つである。アダム・スミスやリカードの如き古典學派の最良代表者達でさへも、價值形態を、全くどうでもよいものとして、或は商品の性質そのもの、以外にあるものとして、取扱つてゐる。その理由は、單に價值の大小の分解が彼等の全注意を

吸収し去つてしまつたといふことのみではなくもつと深い所に存してゐる。労働生産物の價值形態は、ブルジョアの生産方法の最も抽象的な、しかし又最も一般的な形態であつて、この生産方法はこれにより社會的生產の特別なる一種として同時に又歴史的に特徴づけられる。さればこの生産方法を社會的生產の永久の自然形態と見るときは、必然的に又價值形態隨つて商品形態の進んでは更に貨幣形態、資本形態などの特殊性を看過することになる。だから労働時間が價值の大小の尺度であるといふ主張に於て全然一致する經濟學者等が、貨幣即ち普遍等價の完成形態について雜駁矛盾を極めた見解を抱いてゐるのを見出すのである。これは例へば彼等が銀行事業を取扱ふ場合に於てこの取扱に於ては貨幣の平凡な定義ではもはや充分ではない著しく現はれて來る。これ古典派經濟學に對抗して、價值の中にたゞ社會的形態或は寧ろその形態の實體なき外觀のみを認むる復活的マーカンチリズム(ガニールその他)が起つた所以である。』

かのベイリーはリカードが價值を何か眞實なるもの、絶對的なるものと看

1) Marx, n. n. O., S. 44—5, Note. (同譯本同冊96—7頁註)

做したとして、彼を非難したが、このことは亦リカアドが價值の大小のみを取扱ひて、その性質を深く研究するところがなかつたことにも由るのである。即ちマルクスに依れば、『この最後の非難(右の非難—森)はリカアドの不満足なる説明に由来してゐる。何故なれば、リカアドは價值の形式——労働が價值の實體としてとるところの或る一定の形式——を全く研究せず、たゞ價值の大小のみを、即ち抽象的一般的の、且つこの形式に於ける社會的の労働の分量——それは商品の價值大小の差別を惹起すところのものである——のみを研究したにすぎなかつたからである。若しさうでなかつたならば、ベイリッは次のことを見ただであらう——價值概念の相對性は、總ゆる商品は、それが交換價值である限り、たゞ社會的労働時間の相對的表現であるといふ理由で以て廢さるものではない、それら商品の相對性なるものは決して、それが互に交換さるゝところの關係に於てのみ存在するものにあらずして、總ゆるこれら商品の、それらの實體としてのこれら社會的労働時間に對する關係に於て存在するものである。』¹⁾

1) Marx, Theorien, II, 1, S. 12.

之を要するに、價值、交換價值についてのリカアドの理解は、從來の諸々の労働價值論に於けるよりは、數段と進めるものであることは否むを得ないが、猶ほ左の如き不十分、缺陷を藏してゐた。さうしてこのことは、彼が労働價值の本質をよく把握するを得ず、その價值論を最後迄支持することができずして、價值と生産價格とを、剩餘價值と平均利潤とを、混同し、遂にその労働價值論に一種の修正を加ふるを得ざることゝなり、現今の生産關係の本質を瞭にすることから遠ざかるに至つた原因を成すものである。

(一) リカアドは價值の大小のみを主として取扱ひ、價值の量的比較の前提を成すところの價值の單位性質を深く考察するところがなかつた。

(二) それゆゑに又(眞實)價值とそれが表現形態たる價值形態、交換價值との關係を瞭にすることがなかつた。彼が比較價值と絶對價值とを十分に識別し得ざりし所以である。

(三) 随つて價值形態の分析は極めて不十分なるものとして残ることゝなり、結局彼の貨幣資本の研究は到底満足なるものたるを得なかつたのである。

第七章 價値の實體と尺度

——價値の内在的尺度と外在的尺度——

前章に於て吟味したる所の、リカアドが所謂交換價値は相對價値であるか、絶對價値であるかの問題と關聯して、彼が價値論即ち勞働價値論は價値原因の説明であるか、或は價値尺度の説明であるか、の問題がある。詳しく言へば、一物の交換價値はそれが生産に費されたるところの勞働の相對的分量に依るとの、リカアドの勞働價値論の根本的命題に於て、彼は價値の尺度を説明せんとしたのであるか、價値の原因を説明せんとしたのであるか、或は價値の原因と尺度とを相混淆し説明したのであるか、或は又それら二者を正しく相俱に説明したのであるか、そのいづれであるかの問題これである。この問題は、アダム・スミスの價値論における同じ問題についてとともに、リカアド、マルサスの後、デヴィムズ・ミル、トマス・デイ・クンシー、サムニエル・ベイリーなどをはじめとして、今日に至る迄、多くの學者、批評家に依つて論議せられたるところ

のものであるが、いまだ一致したる見解に達するに至らないのである。

惟ふにこの問題についての多くの批評家はともに、價値の原因と尺度とを區別すべしとなし、スミス、リカアドの價値論に於て見出される曖昧と混亂とは、主としてこの二つの概念を混同することに由來すと云ふ。例へばベイリーは『經濟學の諸部門に於て、目的の不確なること、詞の曖昧なること、から惱まされてゐるのは、價値の尺度と原因とを研究する部門より甚だしきはない。一見したるところ、價値の尺度および原因の思想は、十分明らかに、相混同せらるゝ總ゆる危険から逃れてゐるが如く見えるが、その思想それ自ら、およびそれらが言ひ現はされる言葉は、ともに、混同せられ、相錯交せられ、相代位せられてゐて、その間に横はる差異が明に全く意識せられてゐない、ことは明らかである』¹⁾と云ひ、又ジョン・ステュアート・ミルは、その『經濟學原理』に於て、左の如く言つてゐるのである。

『價値の尺度の思想と、價値の規制者若くはその決定原則との思想を混同してはならない。一物の價値が勞働分量によつて規制せらるゝ、とリカアドお

1) Bailey, *ibid.*, pp. 170—1.

よびその他のものがいふ時には、彼等はその物が交換するであらうところの労働分量を意味してゐるのではなくして、それを生産するに要する労働分量を意味してゐる。この労働の分量がその価値を決定する。即ちそれがこの物をしてその価値を有せしめて、他の価値を有せしめない、と云ふことを、彼等は確めようとするのである。しかるにアダム・スミスやマルサスが労働は価値の尺度であると云ふ時には、彼等は、それに依つてその物が造られた若くは造られ得る労働を意味してゐるのではなく、それが交換若くは購買するであらう所の労働の分量、換言すれば、労働に依つて評價される所のものゝ価値を意味してゐる。さうして彼等は、これがそのものゝ一般的交換価値を規制するとか、若くはこれがその価値が何であるかを決定するに影響を及ぼすとか、を云はんとするのではなくして、それは何であるか、それは時と所により變化するかどうか、また、如何に變化するか、を確めようとするのである。この二つの思想を混同することは、ちやうど寒暖計と熱との差異を看逃すことに等しいであらう。』

1) Mill, J. S., Principles of Political Economy, Ashley's ed., p. 568. (傍點—森)

私は本章に於て、この問題を吟味し、果して彼等多くの批評家はリカード価値論の本質を闡明せるものであるかどうか、即ち彼等が云ふが如き意味にて価値の尺度と原因とを分別して、リカードの価値論を解釋、批判することは、果して如何なる意義があるかを検討し、結局彼等の解釋は未だリカードのこの問題についての態度をよく捕捉せるものでないことを瞭にするであらう。先づ初めに、(一)この問題に關聯せるリカード自身の言葉の若干を挙げ、次に(二)諸々の解釋をその代表的なるものについて紹介し、然る後(三)に於て、特にリカードが謂ふ所の価値の不變尺度に就て考察を加へ、最後に(四)この問題に就て若干の私見を開陳してこの章を結びたいと思ふ。

一

この問題についてのリカードの言葉は、殆んどその大部分が、『原理』に於て見出される。原文その儘を引用する。

1) “.....the exchangeable value of these commodities, or the rule which determines how much of one shall be given in exchange for another, depends almost exclusively

on the comparative quantity of labour expended on each.”

- 2) “If the quantity of labour realized in commodities, regulate their exchangeable value, every increase of the quantity of labour must argument the value of that commodity on which it is exercised, as every diminution must lower it.”
- 3) “Adam Smith, who so accurately defined the original source of exchangeable value,..... has himself erected another standard measure of value,.....”
- 4) “.....or in other words, that it is the comparative quantity of commodities which labour will produce, that determines their present or past relative value, and not the comparative quantities of commodities, which are given to the labourer in exchange for his labour.”
- 5) “In speaking, however, of labour, as being the foundation of all value, and the relative quantity of labour as almost exclusively determining the relative value of commodities,....”
- 6) “In making labour the foundation of the value of commodities, and the comparative

1) Ricardo, *ibid.*, p. 7.
 2) *ibid.*, p. 8.
 3) *ibid.*, p. 8.
 4) *ibid.*, p. 11.
 5) *ibid.*, p. 15.

quantity of labour which is necessary to their production, the rule which determines the respective quantities of goods which shall be given in exchange for each other, we must not be supposed to deny the accidental and temporary deviations of the actual or market price of commodities from this, their primary and natural price.”

7) “A franc is not a measure of value for anything, but for a quantity of the same metal of which francs are made, unless francs, and the thing to be measured, can be referred to some other measure which is common to both. This, I think, they can be, for they are both the result of labour; and, therefore, labour is a common measure, by which their real as well as their relative value may be estimated.” (註)

(註) ならば右に引用したるもの外左の如きものなきを。
 “.....but they are not equal; the first (the quantity of labour bestowed on a commodity) is under many circumstances an invariable standard, indicating correctly the variations of other things;”

“.....but it is correct to say, as Adam Smith had previously said, that the proportion between the quantities of labour necessary for acquiring different objects seems to be the only circumstance which can afford any rule for exchanging them for one another;”

1) *ibid.*, p. 65.
 2) *ibid.*, pp. 268—9.
 3) *ibid.*, p. 9.
 4) *ibid.*, p. 11.

“.....yet this division could not affect the relative value of these commodities.....”¹⁾
 “.....still the same principle would hold true, that the exchangeable value of the commodities produced would be in *proportion* to the labour bestowed on their production, not on their immediate production only. But on all these implements or machines required to give effect to the particular labour to which they are applied.”²⁾

“The exchangeable value of commodities,is always regulated not by the less quantity of labour..... but by the greater quantity of labour.”³⁾

“We have seen that the price of corn is regulated by the quantity of labour necessary to produce it, with that portion of capital which pays no rent. We have seen, too, that all manufactured commodities rise and fall in price, in *proportion* as more or less labour becomes necessary to their production.”⁴⁾

“.....the difficulty or facility of their production will ultimately regulate their exchangeable value.”⁵⁾

これらの言葉によつて明らかなるが如く、リカードに依れば、貨物の交換価値は費されたる労働分量に depend on であり、in proportion to (as) である。若くは労働分量は交換価値を regulate し、determine する。若くは労働分量は交換価値の source であり、measure であり、standard measure であり、foundation である。更に若くは労働分量は交換価値決定の only circumstance なのである。

1) *ibid.*, p. 18.2) *ibid.*, p. 18.3) *ibid.*, p. 50.4) *ibid.*, p. 87.5) Ricardo, *An Essay of the Influence of Low Price of Corn on the Profits of Stock*, Works, p. 377

リカードは、これらの章句に依つて、価値の原因及び尺度に關し、如何なる見解をいだいてゐたのであらうか？ 私はこの點に就ての諸々の解釋を先づ第一に見なければならぬ。

二

この問題に關する諸家の解釋は、大體左の四つに敢て分類することが出来るかと思はれる。

- (イ) リカードは価値の尺度を説明せんとしたるものであるとするもの
- (ロ) 彼は価値の原因を説明せんとしたるものであるとするもの
- (ハ) 彼は価値の原因と尺度とを相混淆し説明したものであるとするもの
- (ニ) 彼は価値の原因と尺度とをともに説明せんとしたるものであるとするもの

(イ) リカードは費されたる労働を以て価値の尺度を説明せんとしたるものにすぎないので、価値の原因を説明せんとしたるものではない、とするものにゴ

1) これらの諸批評の對象は(一)のリカードの所説のみならず、(二)の価値の不変尺度についての彼れの主張をも含むと見るべきである。

ナアがある。彼に依れば「もちろんリカアドは屢々労働を以て交換価値の基礎であるとして語る傾があるが、それは極めて非難すべき不注意なる言ひ方に由るのであつて、彼れの著書をあらたに勉強すれば、吾々は、たゞかくの如きは彼がそれに意味する真意でないことを一層よく確めるのみである。彼れの確めようとする所のものは、貨物の生産に費されたる努力の分量とその交換価値との間には、一の確固たる関係が存在すること、換言すればそれらはともに變動するといふことに外ならない。」(註)

ゴナアはあく迄もリカアドが労働を価値の源泉であるとすることを否定せんとするのであるが、このことは餘りに彼れの価値論の真意を了解することから遠ざかれるものであると云はざるを得ない。まことにドウニースの云へる如く「疑もなく因果関係の代りにこの共存関係を考へることはできる。だが如何なる代價を以てあるか? それがためには、單りリカアドとロイドベルタス、ダムスン、ブルードン、およびマルクスとを結びつける関係が打ち壊はされねばならぬのみならず、初期の門下生であつたところのチェイムズ・

1) Gonner, Introductory Essay, xli.

ミル、およびマカロツクとの関係も亦打ち壊されねばならないのである。」¹⁾ゴナアは価値の實體(原因)を離れてなほ価値の尺度の存在を考へようとするものである。²⁾

(註) リカアドは主として価値の測定の問題を考へたるものであるとするものに我が山口茂學士がある。學士に依るに、『第一章第二節第四章に於て彼(リカアド)は労働を貨物の交換価値の formation としたるより見れば恰も交換価値の創造原因なる如く解せらるべきも、リカアドの価値論全體より見て又經濟原論中他の章との關係を考ふる時は彼の労働価値説は主として交換価値測定の問題を取扱へるものと解せざるを得ない。勿論交換価値測定がその貨物を生産するに要する労働量なる點より同時に交換価値起源なりとの考が共存すると解し得るも少くとも彼の論ずる価値論の主點は価値測定の問題にして紙面より直接讀取るべきは前者なりと解する。³⁾』

(ロ) リカアドは、その労働価値説によりて、価値の原因を説明せんとしたるものであつて、価値の尺度標準を見出さんとしたるものではない、とするものはトマス・デイ・キンシーである。

彼は価値原因の概念と価値標準の概念とを混淆してはならないことを説

1) Denis, op. cit., p. 156.

2) この解釋をとるものは可成り多い。ホランダアもその一人である。 David Ricardo, p. 126.

3) 山口茂學士『スミスとリカアドの労働価値説に就て』(商學研究第三卷第三號 873—4頁)

ける最初の一人である、と云はれる。彼は價值の原因(ground)と價值の標準(criteria)とを區別し、リカードは前者のみを説明せんとしたのであつて、後者を瞭にすることは彼れの意圖ではなかつたと云ふ。クキンシイの云ふ所に依るに、

『決定すると云ふ詞は、主觀的には、Xを吾人の知識に對する關係に於て決定する所のものを意味し、客觀的には、Xをそれ自身の關係に於て決定する所のものを意味する。かくて若し私が、競馬場の長さを決定するものは何であるかと問ひ、さうしてその答が、それは、より大なる距離に於ては馬を見ることができなからう所の觀衆の便宜若くは、應募者の選擇である、と云ふのであるならば、決定せらるゝと云ふ詞によつて、私は、そのものゝ存在に關係して、客觀的に決定せらるゝこと、換言すれば、競馬場をして別の長さたらしめずしてこの長さたらしむる所のものを意味すと解するであらう、ことは明らかである。しかるにその答が、實際の測量これである、と云ふのであるならば、この決定せらるゝと云ふ詞により、私は、主觀的に決定せらるゝ、即ち吾人の知識の關係

に於て決定せらるゝ、ことを意味すると解するであらう、ことは明らかであらう。』¹⁾

クキンシイに依れば、かくの如く、價值の尺度(決定)なるものは、二様の意義を有するものであるが、客觀的意義に於ける價值尺度は、その實價值の原因であつて、主觀的意義に於ける價值尺度は、その實價值の標準に外ならないのである。而してこの二つの概念を混淆したるはマルサスであつて、リカードは價值の原因のみを探究せんとしたるものであり、標準の意義に於ける價值の尺度を求めんとしたるものではない、とクキンシイは云ふのである。(註一)

このクキンシイの解釋はかなり注目するに値すると思はれる。價值の尺度を客觀的なるものと主觀的なるものとに分つことはたとひとらずとするも、さうしてリカードがこの二つを瞭に識別して前者のみを問題としたるものであると解することにはたとひ同ずることが出来ないにしても、兎に角クキンシイが所謂價值尺度に二様の種類あることを云ひ、さうして客觀的價值尺度は同時に價值の原因たるべきものであると云へるは、この問題について

1) De Quincey, "Malthus on the Measure of value," London Magazine, Dec. 1823, p. 588, Works, ed. Munson, Vol. IV, pp. 35-6.

他の諸々の解釋者よりも數段の高きにあると云はねばなるまい。彼は、後に詳しく述ぶるところの價値の外在的尺度と内在的尺度との存在を、不完全ながらも認められたものであると云つてよいであらう。

クキンシイが、リカアドは所謂價値の標準を瞭にせんとしたることなく、ただ單り所謂價値の原因を研究せんとしたるものであると云ふは、若干云ひ過ぎたる嫌がないでもないが、しかしリカアド價値論の主として取扱ふところは、随つて彼が價値の決定を云々するは、クキンシイの所謂價値の原因についてあることは否定することができない。リカアドは、主として、労働は價値の實體(原因)なるが故に、その分量は價値の尺度であるといふことを瞭にせんとしたものと解釋してよいのである。

斯様にリカアドは主として價値の實體(原因)随つて又價値の内在的尺度を問題としたものであるが、しかし彼はそれにとゞまらず、價値の不變尺度を云云してゐることは餘りに明瞭である。さうして彼は價値の不變尺度の到底存在すべからざることを云つてゐるのであるが、この場合、彼はクキンシイの

所謂價値の標準尺度即ち價値の外在的尺度を問題としてゐるのである。だからリカアドが價値の標準尺度を全然取扱はなかつたとは決して云はれ得ない。

クキンシイは價値標準の問題は、經濟學上無用であるとなし、¹⁾そして價値の實體随つて又その内在的尺度のみを問題とするにすぎないのであるが、この態度は、必然的に、價値の外在的尺度若くはそれが一般的表章形態の問題、即ち貨幣の問題を無視するものである、随つて又この本質を捕捉し得ないものである。ベイリーが價値の外在的尺度の問題のみをその内在的尺度の問題と全く切り離して云爲する極端に走れると等しく、このクキンシイの態度は、餘りに價値尺度の問題の他の一方に偏し過ぎたるものであると云はねばならぬ。かくて彼等はともに貨幣の本質の正しい概念を到底持ち得ないのである。

(註二)

要するにクキンシイのリカアドの價値の原因と尺度とに關する解釋は未だ十分でなかつたけれども、それは他の様々の解釋に優りて、この問題につい

1) クキンシイが定義せる價値の標準、リカアドの價値の不變尺度は經濟學上無用であらう。

ての有益なる示唆を吾々に與へるものである。

(註一) クキンシイが、リカアドは價値の尺度と原因とを混同したことがない、彼は價値の原因のみを瞭にせんとしたものである、とするに對し、ベイリーはその然らざることを云ふ。ベイリーのこの點についての詞を左に若干引用して見る。

『こゝに引用せる筆者(クキンシイ)は、しかしリカアド氏がこの點について曖昧でないことを考へてゐるが、それは間違つてゐる。極めてザツと『經濟學及び租税の原理』を調べて見ても、彼が他の經濟學者と同様なる混亂に陥つてゐることがわかるであらう。而して『問答』の著書が、リカアド氏は、彼れの價値原理(即ち勞働の分量)を價値の尺度として提言したのでない、と確言して居るのは、驚くべきことである。事實はかうである——彼は時としてそれを原因として語り、時として尺度として語つたのであつて、このことは彼が二つの考への間の相違を明確に把握することができなかつたことを示してゐる。』

(註二) クキンシイは經濟學上問題となり得べきは單り價値の原因なりとし、價値尺度を無用なりとする。

『若しもそれ(勞働の分量)が價値の尺度として提議せらるゝのであるならば、吾々は當にそれが直ちに且つ容易に適用せらるゝものたるべきことを要求するであらう。だがそれは明にさうでない。何故なればAの生産に投ぜられたる勞働の分量は、多くの場合に於て大なる困難なくして確め得られないからである。多くの

場合それは實際全く確め得られない。しかし實際上適用せられ得ない價値の尺度は價値がない。』

(ハ) リカアドは價値の原因と尺度とを混同し説明したものであるとするものは、次の(ニ)に於て述ぶる所の解釋と共に、等しく、リカアドに於て價値の尺度と原因とが見出されることを説くのであるが、前者はこの二者が彼の無意識の裡に不秩序に相錯交して提言せられてゐると云ひ、さうしてそれを不可であるとなすに反し、後者はその然らざることを云ふの相違がある。

この解釋をとれるものにベイリー、シジウィック²⁾、ノース³⁾などがある。こゝには主としてベイリーの言ふ所を窺つて見る。(註一)

ベイリー³⁾は、前項に於て述べたる如く、クキンシイに反對して、リカアドも亦他の經濟學者と同様に、價値の尺度と原因とを混同したと云ふのである。ベイリーはリカアド自身の詞に就てこのことを證明しようとする。例へばベイリーは『原理』第一章第一節に於て見出される次の詞——『生産に費されたる勞働は、多くの場合に於て、他の物の變動を正しく指示する所の不變の標準尺

1) De Quincey, London Magazine, 1824, May, p. 559. (Bailey, A Critical Dissertation, pp. 176-7 に據る)
2) Sidgwick, H., The Principles of Political Economy, 2nd ed., 1887, Introduction, p. 10.
3) Bailey, ibid., pp. 173-5.

1) Dialogues of Three Templars on Political Economy, chiefly, in relation to the Principles of Mr. Ricardo, (London Magazine, Vol. IX, 1824)
2) Bailey, ibid., pp. 172-3.

度である』及びその他を挙げ、更に第二節に於てリカアドは労働は總ゆる価値の基礎であると云ひたる後、脚註に於て、彼は労働は總ゆる貨物の交換価値の眞の尺度であるとするアダム・スミスの詞を採用してゐるとベイリーは云ふ。

このリカアドの態度が一層明瞭に現はれてゐるのは、『原理』の他の部分に於て、あるとして、ベイリーは左のリカアドの詞——「フランは、フラン貨幣と測定さるべき物とが、雙方に共通なる或る他の尺度に還元され得ざる限り、任意の事物の価値尺度ではなくて、たゞそれにてフラン貨幣が造られてゐる所の同一金屬の分量に對する尺度たるにとゞまる。私はこれら兩者は共通なる或る他の尺度に還元され得ると思ふ、何故なればこれ等は共に労働の結果であるから。だから労働は、それによつて彼等の眞實価値並びに其相對価値が測定せらるゝところの共通尺度である。」¹⁾を引用したる後、左の如く言つてゐる。

『この説を支持するため、彼(リカアド)は、その目的が労働は価値の原因であることを示すにある所のデステット・ド・トラシー氏の章句を引用してゐる。

労働は価値の尺度であると云ふ命題を確むるために、労働は価値の原因であると主張する章句を擧げることより、以上¹⁾に決定的に、この點に就ての思想の混亂を證するものは確かにあり得ない。』

リカアドが価値の尺度と原因とを混同したといふこのベイリーの非難は果してどうであらうか？ 成程彼は価値の原因と尺度(価値の不變尺度にあらず)とを殆んど同視したが、彼れに在りては、費されたる労働は価値の基礎、實體(原因)であるがゆゑに、その分量は、當然に、又その尺度(内在的尺度)たるのであつて、このことは彼れの価値論の當然の歸結であり、さうしてそれゆゑに、彼れの価値論は兎も角一の労働価値論として全一體を保つてゐるのである。この二つの概念を切り離して果してそれら各々の本質を説明することが出来るであらうか？ ベイリーのこの點に就ての解釋は明らかにこの二者の關係を誤解せることに本づく。單り彼れのみならずこの二者をバラ／＼に離して解釋するは、多くの批評家のところの態度である。大なる間違であると云はねばならぬ。しかしリカアドに在りて、この二つの概念を識別する

1) Bailey, *ibid.*, p. 174—5.

1) Ricardo, *Principles*, pp. 268—9. (堀氏譯本 286 頁)

ことが不十分なるものであつたことは否定出来ない。彼が更に不變の價值尺度を問題とすることに依り、これらの關係は一層不明瞭になるに至つたかの觀がある。(註二)

(註一) ノース曰く、

『引用せる章句は、リカアドは丁度スミスと同様に、價值の尺度と價值の原因との間の差異を瞭にすることができなかつた、と云ふことを明にしてゐる。リカアドは明瞭に、たゞ價值の尺度のみを論じてゐるのであるが、屢々労働は價值の尺度であると同時に、その原因であるとの推定に陥つてゐる』と。

(註二) シジウィックがリカアドは價值の原因と尺度とを混同したと云ふことに對して、ゴナアはその編纂にかゝるところのリカアドの『原論』に註して、左の如く云ふ。

『私は思ふに、リカアドは、時として彼に歸せらるゝ所の價值の尺度と原因とを混同したとの誤りに陥らなかつた。彼の詞は時としてかゝる混同を暗示するところがあるけれども。しかし乍らかゝる混同は、高々、交換價值に關してゐるのみであらう。しかしこの關係に於ても、彼は明らかに、效用は交換價值の尺度ではないが、それに絶對的に必要なるものである、と云つてゐる。』

(二) リカアドは労働價值により價值の原因とその尺度とを共に正しく説

1) North, C. C., The Sociological Implications of Ricardo's Economics, p. 36.
2) Gonner, Ricardo's Principles, p. 8, note.

明せんとしたるものであるとするものにドウニース、およびチュルジョンがある。

先づドウニースの解釋する所を見るに、彼に依れば、人は、例へばシジウィックの如きは、リカアドが價值の原因と尺度とを混同したりとして非難する。ゴナアも亦リカアドが曖昧なる詞を用ゆることに依り、尠くともその混同に力を添へたとして、彼を咎めるが、斯くの如きは全く吾人のとる所ではないとしてドウニースは左の如く言つてゐる。

『一般に、リカアドは價值の原因の多數性を認める、即ち效用及び稀少性は或る種類の貨物の價值の原因であり、效用及び労働は或る他の種類の貨物の價值の原因である。さうしてこの後者に對しては、價值の尺度が、同様に又貨物に體化せる労働であるであらう。リカアドはこの二つの詞を極めて明瞭に結びつけたのである。即ち労働は價值の基礎であり、労働の比較的分量は、相互に交換される所の貨物の相對的分量を決定する所の規則である(第四章)。リカアドが他の個所に於ても、労働の分量の變動を、價值の變動の原因たると

同時に、又その尺度であるとして語つてゐることは、恰も大氣の壓力の變化を水銀柱の高さの變化の原因として又その尺度として語るが如くである。¹⁾』

チュルジョンはこのドゥニースの詞を引用し、それに同じで、左の如く言ふ。
『かう言つたなら恐らく皆の賛同を得るであらう——リカアドは決して價値の尺度と根源とを混同するの誤りを冒したるものでなくして、この二つの問題を識別して、労働はそれらの孰れをも決定することができると考へたのである。換言すれば、一貨物の生産に費されたる労働は、その貨物の價値の尺度たり得ると同時に、その決定的基本的原因を成すものであることを、彼は信じたのである。²⁾』

チュルジョンは次にゴナアの價値原因を否認するところの解釋を擧げ、その然らずして却つて價値原因がリカアドの價値論のより、主要部分を占めてゐることを云ふ。即ちチュルジョンに依れば、『要する所、吾々は、リカアドが労働を價値の基礎とするものであることを主張する。この見解の點が、彼れの理論に於て、價値と労働との關係を支配するものであつて、尺度の機能は第二

1) Denis, *ibid.*, p. 14^c-50.
2) Turgeon, *ibid.*, p. 90.

次的のものであるとせられてゐると云はざるを得ないのである。』

更に彼は價値尺度と原因とに就てのアダム・スミスとリカアドとの態度を述べたる後、左の如き詞を以て、この點に就ての彼れの見解を結んでゐる。

『一言にして云へば、先導者たるスミスは、彼が見出さんとせる尺度を趁うて苦心して原因の思想に歸著する。彼にありては、尺度の觀念は第一位を占めてゐる。これに反し、承繼者たるリカアドは、スミスの發展に直接指示せられ、價値の根本的觀念に直接引き寄せられたが、再び尺度の觀念に歸著する。源泉の觀念、構成的要素の觀念は、リカアドの著書に於ては、ハツキリと浮き上つてゐる。然るに尺度の機能は、彼が第二の計畫に於きボンヤリ有つてゐるところの從屬的なる附屬物たるものである。それゆゑにスミスとリカアドとの思想の裡には、労働がアベコベに取扱はれてゐると、吾々は信ずる。前者は、價値の尺度の觀念から基本の觀念に迄至るのであるが、後者は基本の觀念より發して尺度の思想に迄歸著するのである。²⁾』

これらの學者が、リカアドは、費されたる労働を以て、價値の基礎たると同時

1) Turgeon, *ibid.*, p. 92.
2) Turgeon, *ibid.*, p. 94.

に、その尺度であるとしたと解する限り、彼等は正しいと云はねばならぬ。しかるにリカアドはこの意味に於ける價值尺度の概念の外に、價值の不變尺度の存在如何を問題となし、さうしてそれが問題に終生悩んだものであるが、この二つの尺度概念は果して如何なる交渉關係があるであらうか、この問題についてのリカアドの理解如何は、ドゥニース、チュルジョンの少しも觸れてゐないところである。かくしては價值の實體と原因とに就てのリカアドの態度およびその缺點は十分に捕捉するに由がない。私は次に價值の不變尺度についてリカアドの見解を吟味し、且つそれを批評することゝしよう。

三

以上價值の原因と尺度とに就ての諸々の解釋を吟味したのであるが、そこに價值尺度とは勞働は價值の構成要素なるが故に價值の尺度である、との意義に於ける尺度を意味せるものとして、私は主として取扱つて來た。勿論諸々の解釋はリカアドに於ける價值尺度の概念を明確に把握せざるため、かゝる意義に於ける尺度概念のみを取扱つてゐるとは云へないが、ところがリ

カアドは、この意義に於ける價值尺度(私の所謂内在的價值尺度)の外に、不變の價值尺度(私の所謂外在的價值尺度、即ち價值の一般的表章形態)を問題としてゐる。即ちその生産に投ぜられたる所の勞働分量が不變であるがため、それと比較されることにより、他の貨物の價值が正確に測定せられ得るが如き貨物の存在することなきや否やを、彼は問題とした。さうして彼はかゝる貨物の存在せざることを云ふのである。彼れの意識すると否とに係はず、兎に角、事實上、彼はこの二つの價值尺度を取扱つたと云へると思ふ。私は本項に於て特にこの價值尺度に就ての彼れの見解を若干吟味して見度い。

リカアドのこの問題に就ての文章の主要なるものを左に二三引き出して見る。

『諸々の貨物が相對價值に於て變動したる場合に、何れの貨物が眞實の價值に於て下落し、何れが騰貴したのであるか、を定むる所的手段を有つことは望ましいであらう。さうしてこのことは、これらのものを順次に、或る不變的な價值の標準尺度——それ自身他の諸々の貨物が蒙るが如き變動の何れ

にも影響されてはならない所の——に比較することによつてのみなし遂げらるゝの外はない。斯かる尺度は之を得ることが不可能である。何故なれば貨物にして、それ自身、今その価値を定めようとする所の物と同一なる變動を蒙ひらないものは何處にもないからである。¹⁾

即ち彼に依れば、それは(一)その生産により、多い又はより少い労働を必要とするに至ることのない物は、一として存在しないからであり、(二)貨幣の生産に必要な固定資本と他の諸々の貨物を生産するに必要な固定資本との比例が種々異なつてゐるがために、貨幣は、勞賃の騰貴又は下落から生ずる相対的變動を蒙むるであらうからであり、更に(三)貨幣は、その生産に使用さるゝ固定資本とそれと比較さるべき他の諸々の貨物の生産に使用さるゝ固定資本との耐久力の程度が種々異なつてゐるがため、同じく勞賃の變動から影響を蒙むらざるを得ないからである。²⁾

『總ての時に於て、それを生産するに骨折と勞働との同一の犠牲を要する貨物のみが不變なのである。吾々はかゝる貨物の存在を知らない。しかし假

設的に恰も吾々がそれを知つてゐるが如く、吾々はそれに就て議し且つ論ずることを得るであらう、さうしてこれ迄採用され來つたところの總ての標準の適用されることが絶對的に不可能なることを明確に示すことに依つて、斯學に關する吾々の知識を進めることが出来るであらう。』(註)

(註) 彼は『原論』第一版第二版に於て不變の價值尺度を、第一章第一節(但し第二版に於て)に於て、若干論じたが、第三版に至つて、それを削除し、別に第一章第六節『不變の價值尺度に就て』を附加し、そこに同問題を詳しく論じてゐる。左に第一版第二版にのみあつて、第三版以後削除された所の彼れの章句を擧げて見る。(この章句はゴナア版に参考のため特に引用せられてゐる。)

『若し現在及び總ての時に於て、生産に正確に同一の勞働量を要する所の、或る一貨物が發見さるゝならば、その貨物こそは不變の價值を有するものであつて、他の物の(價值)變動を測定する標準として甚だ有用であらう。吾々は斯かる貨物の在るを知らない、隨つて價值の或る標準を選定することは不可能である。併し乍ら、吾々が貨物の相對價值に於ける諸變動の原因を知り得るために、及びそれらの原因が作用する程度を算定するを得るために、標準なる物の本質は如何なるものであるかを確認することは、正しい原理を得るのに甚だ有用なることである。』¹⁾

1) Ricardo, *ibid.*, p. 260. (同譯本296-70頁)
2) Ricardo, *ibid.*, pp. 11-2. (同譯本21頁) 1st ed., pp. 11-12. 2nd ed., pp. 10-11.

1) Ricardo, *ibid.*, p. 36. (同譯本69-70頁)
2) Ricardo, *ibid.*, p. 36-7. (同譯本70-71頁)

なほ價值の不變尺度に就ては『原理』第一章第三節「ナア版二十一、二頁及び二十三頁に見出される文章参照。

かくリカアドが價值の不變尺度を云爲することに對して、ペイリーは、價值論に對する例の立場からして、力強く論難する。

ペイリーに依れば、價值とは同時期に於ける相交換される貨物の相對的關係であるから、異なる時期に於ける貨物の價值を比較することは、それが異なる各々の時期に於て他の何らかの貨物に對する關係を比較することに外ならない。これはペイリーが價值を純相對的に定義することより來る必然の結果である。然るにリカアドが、同じ勞働の分量にて生産せらるゝ貨物は不變の價值を有してゐると云ふ時、彼は一定時期に於ける價值は他の時期に於ける價值と丁度同じであるとするのであつて、それは他の貨物に對する關係に於てさうであるとするのではなく、それ自身の關係に於てさうであるとするのである、とペイリーは解する。かくて彼にありては、かゝる不變の價值尺度たる貨物の存在は物理的に不可能であるのみならず、かゝる貨物を考へ

ることそれ自身がすでに矛盾であらねばならぬ。

次にペイリーはリカアドが謂ふ所の價值尺度なる用語には思想の混亂があるとして、左の如く言ふ。

『彼は斷えず生産勞働の分量の不變と價值の不變とを同一視する。だから彼は、若し吾々がその生産の状態が不變である所の何らかの貨物を見出すことができるならば、それは第一に價值に於て不變であり、第二に、それは他の貨物の價值の變動を指示する、若くは吾々をしてそれを確めしめるであらうことを主張する。』

『かゝる貨物が何を眞に指示するに役立つかを彼が決して明に認めなかつたといふことは、實に不思議である。彼れの主張するが如く、それは貨物の價值の變動を示すに役立つものではなく、その生産の状態の變化を示すに役立つであらう。それは、吾々をして、價值の變動を確めしむることなく、これらの變動が孰れの貨物に原因してゐるかを確めしむるであらう。彼は、實際、全く異なる二つの思想を混同した。即ち彼は、貨物の價值を測定すること、孰

れの貨物に於て、如何なる程度に於て、價值の原因が變化するかを確めることを混同した。¹⁾換言すれば、彼は、労働の不變の分量によつて、二つの若くはより多くの貨物の間に横はれる價值の變化を確めようとしたのでなくして、それらを生産したる所の労働の分量の變動を確めようとしたのである。

かくてベイリーに依れば、『リカアド氏は、明瞭に不變の労働によつて生産せらるゝ貨物を價值の尺度として語るけれども、彼は、その差異を意識することなしに、事實上は、全くその貨物が他の貨物の生産労働の變動を示し得るものとして考察する。彼が述ぶるが如きかゝる貨物は、價值の尺度たらずして、労働の尺度、即ち貨物の生産に必要な労働の異なる分量を確める手段であるであらう。それが何らかの目的物に關聯して用ひられ得る迄に、その目的物の價值、若くはその標準たる貨物に對する關係が與へられねばならぬ。然らばこの論據から推論し得らるゝことの總ては、その生産に投ぜられたる労働の分量であるであらう。²⁾』

このベイリーのリカアドが所謂價值の不變尺度に對しての非難は、ベイリ

1) Bailey, *ibid.*, pp. 121—2.

2) Bailey, *ibid.*, pp. 127—8.

の價值の定義から來る當然の結果である。彼れの批評には諸々の缺陷があるが、それらは彼れの價值論一般に論ずるところのものであるから姑く措く。たゞ彼が、リカアドに反對して、價值測定は同時期に於ける貨物の相對的比較に於てのみ可能であるとして、異なる時期に於ける價值の比較を排し、價值尺度(外部的尺度)としてはたゞ貨幣あるのみとしたことは、たとひ彼が貨幣の本體を十分に把握することより遙かに遠ざかつてゐたにしても、彼れのリカアドに優る點であらねばならぬ。マルクスがこのベイリーの態度に就て左の如く言つてゐるのは尤もであると云はねばならぬ。

『ベイリーの著書は、彼が、貨幣(他の商品を外にしての)一つの商品として)に指示せらるゝ所の「價值尺度」と、價值の固有の尺度並びに實體とを混同することを論難することにより、隙にする限りに於て、一の功績を有つてゐる。しかし彼れ自ら、貨幣を「價值尺度」として、即ち商品の量的尺度とし、のみならず、その質的約數として、分析したのであつたならば、彼自ら價值の正しい分析に到達したであらう。が彼は然かはずして、たゞ外部的「價值尺度」——それは已に

價值を前提してゐる。そしてそれについては何等の考察がない——を表面的に考察するに止まつてゐる。』

惟ふにリカアドは、一貨物の生産に費されたる労働の分量を以て、その價值の(内的)尺度としたのであるが、彼は、その價值の變動を外部的に測定表章せんがために、その生産に不變の労働分量を必要とする所の、随つてそれと比較することに依り前者の價值が測定せらるゝ所の、何らかの貨物が存在することなきや否やを見んとしたのである。そして彼はかゝる貨物の存在せず、随つて貨幣も亦かゝる不變の價值尺度たり能はぬことを論結したのであるが、しかしかゝる尺度の本質如何を確かめることは正しい理論を得るに必要であると思惟したのである。

この場合彼れは、不變の價值尺度により、異なる時期に於ける貨物の價值の變動を測定せんとしたのであるが、この態度はベイヤの非難するが如く、又マルクスが『異なる歴史的時期に就て商品の價值を比較することは、それ自身としては、事實上、何等經濟上の興味たるものではなく、學問的興味たるに

1) Marx, Theorien, III, S. 163.

とゞまる。』と云ふが如く、決して價值尺度の問題を正當に理解せるものであるとは云へない。マルクスの詞に依れば、『商品の價值を測定せんがためには——價值の外部的尺度たるがためには、——それで他の商品が測定せらるゝ所の商品の價值が不變であるを要しない。それは寧ろ可變的であらねばならぬ、と云ふのは價值の尺度それ自身が商品であり、さうして商品であらねばならぬからである。蓋し然らざればそれは他の商品の一般的固有的尺度たり能はぬであらうから。例へば若し貨幣の價值が變動するならば、それは他の總ゆる商品に對して同様に變動する。それらの相對價值は、それ故に、貨幣が不變に止まつて居ると同様にそれに於て表現される。かくて價值の不變尺度を見出さんとするの問題は片附いた』¹⁾ことになるのである。即ち右のリカアドの態度は、彼が價值の外部的尺度若くはその一般的表現形態としての貨幣の本質を十分に把握することができなかつたことに、その根本的原因を見出すべきである、と云ふことに歸著するのである。

このことを詳しく言へば、リカアドは價值の構成内容としての労働の質的

1) Marx, a. a. O., S. 1:7.

考察を怠つたがために、言ひ換へれば、彼は、相交換され得る貨物には、兩者に共通なる或る質的等一性たる抽象的人間労働の存在するによりて、甫めてそれが相交換され得るものである、ことを十分に意識するところがなかつたがために、その結果として、彼は貨幣がこの抽象的人間労働の一般的表章形態であることを、随つてそが總ゆる商品に對して一般的普遍的價值尺度であることとを、氣附かなかつたのである。リカアドが價值の量的問題にのみ終始し、その質的問題を顧みるところがなかつた當然の歸結であると云はねばならぬ。マルクスは、『價值の不變尺度を見出さんとするの問題は、事實上、たゞ價值——その決定それ自身は、決して價值ではなく、随つて又價值としての變動を蒙むらない——の概念、性質を求めんとすることに對する誤りたる表現たるに過ぎない』と云つてゐるが、よくリカアドが所謂價值の不變尺度の正體を瞭にせるものであると云つてよいであらう。(註)

(註) リカアドが不變の價值尺度を見出さんとせることは、價值の内容實體たる労働の概念に就ての不十分なる理解に本づいてゐる、とするマルクスの詞をもう一

1) Marx, a. a. O., S. 159.

つ左に擧げる。

『リカアドは、屢々、恰も労働の分量が「價值の不變尺度」の誤りたる、若くは誤りて理解せられたる、問題の答解たるべきものである、としたる——穀物、貨幣、勞賃その他が斯くの如き祕藥として以前に考察され、提言されたと同じ方法にて——の觀があり、そして事實上屢々かく語つてゐる。この誤れる外觀は、リカアドにありては、價值量の決定が決定的の問題であることから出て來る。それ故に、彼は、労働が價值の要素たる所のその特殊なる形態を捉へることがなかつた、即ち個々の労働は抽象的一般的労働として、又この形態に於ける社會的労働として、示さるべきことを彼は理解しなかつた。その結果彼は、貨幣の形成と價值の本質及び労働時間によるこの價值の決定との關係を、理解する所がなかつたのである。』

四

以上私は、リカアドの價值論における價值の原因と尺度ならびに價值の不變の尺度についての彼れの謂ふところを見、更にこれらの諸點に對する様々の解釋、批評を大體吟味し了へたつもりである。私はこれらの諸々の解釋を紹介せる際に、それらに對する若干の批評を試みることに依り、リカアドのこの點に對する私の解釋および批評の一端をば時折述べて置いたが、以下私の

1) Marx, a. a. O., S. 163.

解釋、批評するところを纏めてこの章を結ぶであらう。

この問題についてさきに挙げたる所の諸々の解釋、批評の殆んど全部は、問題の性質を理解せず、随つて又こゝに問題とする所をよく解明するところがないのであるが、私は、この問題に正しく答ふる所あらんとするには、左の事柄をよく理解した上でなければならぬと思ふ。

(一) リカアドの價值論に於ては、實質上、固有の内在的價值尺度と外在的な一般的普遍的價值尺度との二つの價值尺度の概念が見出される。前者は労働は價值なるがゆゑに、若しくは價值の實體であるがゆゑに、それ自身の分量(労働時間)は價值の尺度であるといふ意義に於ける價值尺度であり、後者はかゝる價值の大きさを一般的に外部的に表章するところの價值尺度、即ち價値の大きさの一般的必然的表章形態である(尤もリカアドに在りては、この意味に於ける價值尺度として、貨幣が選ばれずして、價值の不變的尺度が選ばれたが)。批評家の殆んど全部は、この二つの尺度概念をマルデ混同してゐる。リカアド自身も明確にこの二つの概念を識別することができなかつたが、事

實上明に、この二つの尺度を取扱つてゐる。

(二) 價値の内在的尺度(費消労働時間)とその外在的尺度(貨幣)との問題は、結局價値、眞實價値と相對價値、交換價値、價値の(一般的)表章形態との問題に歸する。ゆゑに前者の問題は後者の問題が瞭にせらるゝによりおのづから解明せらるゝ。

先づ價値の内在的尺度から見んに、リカアドが費消労働により價値の原因を主として問題としたのであるか、或はその尺度を主として問題としたのであるか、は殆んど問題とならない。蓋し労働は價值なるがゆゑに、若しくは價值形成實體なるがゆゑに、その分量(その分量は労働時間にて測られ、その労働時間)はまた時、日等の如き一定の時間部分を標準とする(は、それ自らの價値の尺度であり、又アベコベに、労働分量が價値の尺度たり得るのは、それ自ら價値であり、若しくは價値の形成實體であるからである。それ自身價値でないもの、分量がどうしてその價値の尺度たり得るか? リカアドの價值論に於て價値の實體とかゝる意義にての尺度とが、相並んで離るべからざる關係に於て、

論ぜられてゐるのは自然であると云はねばならぬ。

かくの如く商品の価値の内在的尺度はそれが生産に費されたる労働の分量であるが、しかしかくては外部的に表章せらるゝことがない。それを外部的に表章するものがなければならぬ。甲商品の一定量の価値が乙商品の一定量にて表現さるゝ場合、乙商品は甲商品の外在的価値尺度である。さうして諸々の商品価値を一般的に普遍的に表現するものが即ち貨幣である。リカアドは内在的価値尺度の外にそれを一般的に外部的に表現するがための不変の価値尺度を見出さんとしたのであるが、かゝる場合に於ける価値尺度は、實はこゝに所謂一般的外在的価値尺度に該當するものであつて、それは貨幣であらねばならない。しかし彼は貨幣の本質を分析し瞭らかにすることができなかつたがため、貨幣をかゝる尺度として選擇するに至らなかつたのである。価値の一般的外在的尺度はリカアドに於ては缺けてゐる。リカアド価値論の本質的缺陷を意味する所以である。

この意義に於て、リカアドは価値の原因を説かんとしたのであるか、或は尺度を説かんとしたのであるかの問題に對して、或るものは、彼がかゝる尺度の存在せざることを云ふよりして、原因のみを主として説いたものであると云ひ、或るものは、彼がたとひ存在せずとするも、頻りにかゝる不変の尺度について論ずるよりして、彼は尺度の問題を主として取扱つたものであるといふも、ちろん批評家の多くのものは二つの尺度概念を識別し得ないがため、右の価値の外在的尺度に關聯せしめて、明らかにかく主張するものがあるとは云へないが、しかしリカアドがそのいづれを説かんとしたかを吟味することは、それ自らが誤つてゐると私には思はれる。何故といふに、一般的に、労働価値論に於ては、隨つて又リカアドの価値論に於ては、かゝる価値の外在的尺度と価値それ自身とは、価値の内在的尺度と価値それ自身との關係と同じやうに、極めて密接なる關係に在るものであつて、相ともに當然に、表裏の關係に於て、論ぜらるべきものであり、一を缺いて他を取扱ふことのできないものであるからである。だからリカアドがかゝる意義に於ける価値の一般的外在的尺度を吟味することに成功し得なかつたことは、同時に価値の實體、本質の闡明

に十分成功し得なかつたことを物語つてゐる。價値の普遍的外在的尺度の正しい概念は價値の實體、即ち労働の實體をよく分析することなくして到底捕捉し得られるものではない。この二者を切り離して價値の原因、尺度を云ふことは全く誤れるものと云はねばならぬ。ジョン・ステュアート・ミルは價値の原因と尺度とを熱と寒暖計とに對比し、二者相混同すべからざることを云ふ。勿論この二者は表面上別のものである。併し何故に熱は寒暖計によつて測られるか？ そこには二者共通のもの、即ち熱が存在してゐるがために外ならない。物差が他の物體の長さを測り得るのは、その二者に共通に存在する所の長さを有つてゐるがためである。價値の尺度また價値なくして尺度たり得ないのは當然である。

之を要するに、リカードは價値の原因を論ぜんとしたのであるか、その尺度（内在的ならびに外在的尺度）を論ぜんとしたのであるかは、たとひ多くの批評家と異なり、嚴密に價値の原因および尺度の概念を確定するとするも、否な寧ろそれを確定することにより、畢竟徒勞でなければならぬ。労働は價値の形

成實體であるがゆゑに、その分量は價値の尺度であり、さうしてかゝる價値の必然的一般的現象形態として貨幣が總ゆる商品の價値、労働の分量を、一般的、普遍的に、測定するのである。價値の實體、内在的尺度、外在的尺度は、相合して一體を成してゐるのであつて、相離れて考へることができない。それらは因果の關係に置かれてゐる。たゞリカードに於ては、それらに對する研究の粗笨、未熟があるのみである。

第二篇

第一章 リカアド價值論の修正

緒言

リカアドに在りては、相交換される貨物の相對價值はその各々の生産に費されたるところの労働の比較的分量に依り決定せらるゝものであつて、労働の變動如何により影響せらるゝものでないことは、既に第一篇に於て見て來たところである。即ち彼は、スミスに反對して、貨物の交換價值が支配労働(勞賃)により決定測量せらるゝものでないことを主張し、又資本を蓄積労働に還元して、資本蓄積が決して労働價值法則の作用することを攪亂するものでないことを瞭にしたのである。かくて彼れの詞によれば、『この分割(利潤と

勞賃とに分割されることはこれらの貨物の相對價值には影響することは出來ない、なぜなれば、資本の利潤が多からうと或は少からうと、即ちそれが五〇パーセント、二〇パーセント、或は一〇パーセントであらうと、或は又勞賃が高からうと低からうと、これらは兩方の職業に同様に作用するから¹⁾であり、又『魚と鳥獸との相對價值は、全くその各々に實現せられたる勞働の分量によつて、左右せらるゝのであつて、生産量の大小如何、又は一般勞賃及び利潤の高低如何に關しない』²⁾のであり、或は又、『勞賃に於ける變動は、これらの貨物の相對價值に何等の變動を生ぜしむることは出來ない。何故なれば勞賃が騰貴したと假定するも、これらの職業の或るものに於て、より多くの勞働が必要になつたのではなくて、たゞ勞働がより高い價格で報酬を受けるやうになつたまでのことであるからである。』³⁾

しかし乍らかくの如く貨物の相對價值が、勞賃および利潤の如何に關係なく、その生産に費されたる勞働の相對的分量により決定さるゝと云ふは、リカードに従へば、生産に必要な器具、機械、建物などが、同じ耐久力を有し、同じ勞

1) Ricardo, *ibid.*, p. 18. (同譯本33頁)

2) Ricardo, *ibid.*, p. 20. (同譯本37—8頁)

3) Ricardo, *ibid.*, p. 22. (同譯本41頁)

働分量の結果である、と假定したる上での話である。ところがかくの如きは總ゆる社會に於ける實際の状態ではない。原始社會に於ても、文明社會に於ても、各種の職業に使用せらるゝ道具、器具、建物、及び機械など、彼が所謂固定資本は、悉く耐久力を異にし、従つてそれが生産に異なりたる勞働の分量を必要とする。のみならず勞働を支持するための資本即ち彼が所謂流動資本と、右の如き諸々の固定資本との比例、即ちその組合せも種々雑多である。かく『固定資本の耐久力の程度にこの差異があること、及び二種の資本の組合はさるる比例にこの相違があることは、貨物の相對價值の不同を惹起する原因として、貨物の生産に必要な勞働量の大小と云ふ以外に、他の原因を引き入れる。——この原因とは勞働の價值の騰落を云々』(This difference in the degree of durability of fixed capital, and this variety in the proportions in which the two sorts of capital may be combined, introduce another cause, besides the greater or less quantity of labour necessary to produce commodities, for the variations in their relative value—this cause is the rise or fall in the value of labour.)¹⁾とリカードは云ふのである。リカード價值論の修正と稱さるゝところのもの即ちこれであ

1) Ricardo, *ibid.*, p. 24. (同譯本45頁)

る。

斯様にリカードは、異なる生産部門に使用せらるゝ資本の持続性の段階若くは固定流動兩資本の組合はせ如何の問題に逢著して、その労働價值説の根本的命題に或る種の修正を加ふるに至りたるものであるが、果して彼は如何なる意義に於てこの修正を説かんとするのであるか、それは彼れの價值論に對して如何なる關係を有つてゐるか、それが修正の本質如何、——これ私が本章に於て研究せんとするところのものである。

このリカードの修正の内容は、『恐らく經濟學上の論文に含まれてゐる章句の中で最も難解なるもの』¹⁾と云はれてゐる如く、頗る複雑を極めてゐる。随つて従來のリカード批評家の多くはたゞその輪廓を紹介批評するにとゞまり、深くその内容に立ち入り分析、解剖したるものはマルクスを除いて殆んどないのみならず、それらの單なる紹介は概ねその修正内容の本質を正當に解釋してゐないことは、この問題の検討を困難ならしむると同時に、半面この研究の必要を一層増す所以である。

1) Whitaker, History and Criticism of the Labour Theory of Value, p. 52.

第一節 固定資本と流動資本

リカードによれば、貨物の相對價值が勞賃および利潤により影響せらるゝは、右に述べたる如く、異なる生産部門に於ける、固定資本の持続性若くは固定資本と流動資本との組合はせが相異なる場合に就てあるから、この所謂修正の内容を詳しく吟味するがためには、吾々は先づリカードの固定資本、流動資本に附するところの意義如何を知つて置かねばならぬ。

ところでリカードは、かく異なつた生産部門に於ける固定資本の持続性の差異若くは等額の資本に含まるゝ固定資本と流動資本との種々異なりたる割合が労働價值法則に影響を及ぼす限りに於てのみ、そしてかゝる事情の結果勞賃の増騰若くは低減が、否寧ろ利潤の増騰若くは低減が、如何なる程度迄相對價值に影響を及ぼすかの問題に關係ある限りに於てのみ、固定資本と流動資本との區別を考察したのであるから、この資本の區別は必然的に價值變動に及ぼす影響に關するものでなくてはならない。果して彼は如何なる意

義に於てこの資本の區別を意味附けたであらうか？ 私は本節に於てこの問題を取扱つて見たいと思ふ。

リカアドに依れば、『資本は、速かに消滅し、随つて屢々再生産さるゝことを要するか、或は遅々として消費さるゝものであるかに従つて、流動資本或は固定資本といふ項目の下に種別せられる。高價にして持続的なる建物や機械を有する醸造家は、大なる分量の固定資本を使用すと謂はれ、之に反して、その有する資本が主として労賃——これは建物や機械よりも消滅し易い貨物であるところの食料及び衣服に費さるゝものであるが——の支拂に用ひらるゝ所の靴屋は、彼れの資本の大部分を流動資本として使用すと謂はれる。』

この固定資本と流動資本との區別は決して明確なるものではない。リカアド自身も『この區別は本質的なるものではなく、境界線が正確に引かれ得るところの區別ではない』と云ひ、又他の所にて『流動資本と固定資本との區別が何處にて始まるかを嚴密に定義することは困難である、なぜなれば資本の持続性には殆んど無限の程度があるからである』と云つてゐるのである。

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 24—5. (同譯本46頁)
 2) Ricardo, *ibid.*, p. 24. note. (同譯本43頁)
 3) Ricardo, *ibid.*, p. 131.

一般的に言へば、リカアドは固定資本の耐久力に就ての區別と不變資本及び可變資本に依る資本組成に就ての差異とを、同じものと見る誤謬に陥つてゐる。即ち彼は固定、流動資本の區別と不變、可變資本の區別とを混同してゐる。しかし乍ら不變、可變資本の區別は、餘剩價值産出上の區別を決定するものであつて、資本制生産方法の機構を暴露するところの極めて重要な資本區別であるに反し、固定、流動資本の區別は、價值増殖行程に就て云へば、與へられたる價值が生産機關より生産物に移轉する様式に關係するものであり、流通行程に就て言へば、投下資本の更新さるゝ期間(別の見地よりすれば、投下資本が前貸さるゝ期間、換言すれば生産資本の回轉せらるゝ差異に關係するものであつて、それは第二次的の資本區別である。前者の區別に従へば、

不變資本——労働要具——器具、機械、建物——及び労働材料(たゞその價值がその儘生産物に移轉するに過ぎないもの)

可變資本——労働力(自己の價值を再生産したる上、猶ほ餘剩價值を産出するもの)

であり、後者の區別に従へば、

固定資本——労働要具(その價值が部分的に商品の價值に移轉せられ、従つて部分的に回收されるもの)

流動資本——労働材料及び勞賃(その價值が全部的に商品の價值に移轉せられ、従つて全部的に回收されるもの)

である。

これに依つて見れば、労働材料は、一方では、不變資本に屬して、可變資本即ち勞働力に對立し、他方では、勞賃と共に流動資本に屬して、固定資本に對立してゐる。ところがリカードに在りては、労働材料は何處の項目にも見當らぬ。かくてマルクスの解釋するところに依れば、『だからリカードに在りては労働材料——原料助成材料——に投じた資本部分は、何れの側にも現はれず、全く消え失せてしまつてゐる。この價值部分は、流通様式の上から見れば、労働力に投じた資本部分と全く一致するものであるから、固定資本の側には適合しないのである。がさればと云つて流動資本の側に置くわけにも行かないの

である。』と云ふのは固定資本對流動資本の區別と不變資本對可變資本の區別とを同一視するところのアダム・スミスから承け繼いで暗黙の裡にリカードの見解を一貫してゐる立場が排除されることになるからである。リカードはこの事實を感知せずには餘りに多くの論理的本能を有してゐた。かくして彼れの見解に於ては、この資本部分は全く消滅することになつたのである。¹⁾

かくリカードの如く、この二つの資本の分別を混同する限り、資本制生産の機構即ちその祕密は看破せられず、その現實の運行は到底理解さるべくもない。即ち資本の有機的組成の價值に及ぼす影響の本質は、かゝる態度を以てしては、到底捕捉せらるべくもないのである。たゞかゝる資本主義制生産の機構の内容に觸れんとせず、即ちたゞ平均利潤、生産價格(相對價值)のみを考慮に置き、それらが如何にして發出するかの原因を顧みんとせず、完成したる外的現象のみを問題とする限りに於ては、リカードのこの態度を以てして事足る。なぜなれば、右の二つの資本の區別は、實際上に於ては、一致するからであ

1) Marx, Das Kapital, II, S. 187. (高島氏譯本二の二四頁)

る。即ち、社會的餘剩價值が種々なる營業部門に投ぜられた諸資本の間に配分される際種々異なる資本の前貸期間(例へば固定資本の種々異なる壽命)と種々異なる有機的資本組成(随つて又不變資本及び可變資本の種々異なる流通)とは、一般的利潤率の平均化及び價値の生産價格化に向つて等しく作用するからである。¹⁾

要する所、商品の生産に用ひらるゝ労働要具の價値は、たゞ部分的にその商品の價値に移轉さるゝのみであり、随つてその商品の販賣によりたゞ部分的にのみ回収さるゝに過ぎないが故にのみ、それは固定資本であり、商品の生産に用ひらるゝ労働力及び労働對象(原料その他)の價値は、寧ろ全部的にその商品に移轉せられ、随つてその商品の販賣に依つて全部的に回収さるゝが故にのみ、それらは流動資本であつて、この資本の區別は價値増殖には何等關係するところがないのである。

斯様にリカアドは不變、可變資本の區別と、固定、流動資本の區別とを相混淆し、前者の區別に到達するに至らなかつたのであるが、後者の區別に關する彼

1) Marx, a. a. O., II, S. 186—7. (同譯本同冊3頁)

れの見解も亦極めて不十分なるものであつた。このことに就て左に一言するであらう。

(一) リカアドにありては、労働原料が固定資本、流動資本の孰れにも這入つてゐない。それは看迷がされてゐる。このことは既に述べた。

(二) 彼は、労働要具の固定性の大小は(それが固定資本たるか流動資本たるかといふことは)、その耐久力なる物理的性質如何によりてのみ決定せらるゝものであるとした。即ち彼は、この二つを混同、同視した。

ところが労働要具が固定資本となりその機能を盡すのは、その組成材料の耐久力なる物理的性質にのみ因るのではない。労働要具は特種の様式を以て、即ち部分的に、價値を生産物に移轉する限りに於て、随つて又部分的に價値を回収する限りに於て、固定資本となるのであり、且つ又生産行程が總じて資本制生産行程であり、随つて又生産機關が一般的に資本であり、資本といふ經濟上限定された社會的性質を有する場合に於てのみ、労働要具は固定資本となるのである。例へば金屬製造工場に使用される原料は、金屬製造上に使用

される機械と或部分に於て同等の耐久力を有して居り、そしてその機械の大部分を占めてゐる木材皮革などよりは、ずっと高い耐久力を有してゐることがあり得る。にも拘はらず前者は流動資本であり、後者は固定資本たるのである。要するに同一の物理的耐久力を有してゐる金屬が、一方に於ては、流動資本であり、他方に於ては、固定資本であるのは、その金屬の素材的の物理的性質に因るのではなく、即ちその磨滅程度の大小に因るのではなく、その同一の金屬が生産行程の上に演ずる役割、即ち一方に於ては、それが労働對象として全部的に價值を移轉し、他方に於ては、労働要具として部分的に價值を移轉する、といふ差異に起因するのである。且つそれは資本制生産方法の下に於てのみ固定、若くは流動資本たり得るものである。

斯様に労働要具が固定資本たるのは、その組成材料の耐久性に因るのではないのであるが、しかし労働要具が労働要具として演ずる役割は、それが相對的に耐久力ある材料から成ることを必要ならしめる。即ち『労働要具の素材の耐久性は、労働要具が労働要具として盡す機能の一條件となるものであり、隨

つて又労働要具を固定資本たらしむる流通様式の物質的基礎ともなるのである。他の事情に變化なき限り、労働要具なるものは、その素材の磨滅性の大小に反比例した程度を以て固定性を附與せられる。即ち労働要具の磨滅性はその固定資本たる性質と極めて本質的に結び付けられてゐるのである。』
 (三) 彼は、固定資本と流動資本との差異以外の原因に本づく回轉上の諸差異をば、固定資本と流動資本との差異と同視してゐる。さきにも述べたる如く、この二つの資本が分別せらるゝのは、資本が價值を生産物に移轉するその様式に因るのであるが、彼は資本の回轉の差異によつてのみこの區別をしようとする。例へば彼は云ふ。

『流動資本なるものは極めて不等の期間を以て流通し、またはその使用者の手に復歸し得るものであるといふ事實も注意を要する所である。農夫が播種の目的を以て購買するところの小麥は、パン焼業者がパンに造る目的を以て購買するところの小麥に比すれば一つの固定資本である。農夫はこの小麥を地中に放置し、一年を經過した後でなければそれを回収し得ないのであ

1) Marx, Das Kapital, II, S. 192. (同譯本同冊15頁)

るが、パン焼業者の方はそれを粉に挽かしめ、パンとなして顧客に販売し、かくして一週間以内に同一の操作を更新し、又は他に何等かの操作を開始するため自由に利用し得べき資本を回収することになるのである。¹⁾』

これに依つて見れば、リカードは、小麦が種子として使用せられ、その回収に一年を要するが故に固定資本であり、小麦が生活資本としてその回収に一週間しか要しないが故に流動資本であるとするのであるが、しかし種子としての小麦は決して固定資本にあらず、それは原料であつて流動資本に属すべきものである。勿論、相互に關聯した連続的な、随つて一つの生産期間——換言すれば生産物を完成するに要する總生産時間——を構成するところの、反復的に進行する諸労働行程に生産機關が長期間固定されると云ふ事實は、資本家をして大なり小なりの期間に互つた資本前貸を爲すことを必要ならしむるものであるが、併しこの事實に依つてのみ資本は固定資本となるものではない。一切の資本は、生産資本として作用する限り、生産行程に固定する。即ち固定資本は勿論、流動資本も亦等しく、その素材、その機能、その價值の流通形

1) Ricardo, *ibid.*, p. 25. (同譯本46—7頁) この章句は第一版になく第二版にはじめて附加されたものである。

2) Marx, a. a. O., S. 132. (同譯本二の—283頁)

式の如何に拘はらず、生産行程に固定する。『生産行程の種類に依り、又所期の利用效果の如何に従つて、固定期間に長短の差が生ずるとしても、かゝる事實は固定資本と流動資本との區別を齎らすものではない。¹⁾』固定、流動資本の區別は、あく迄も、價值移轉の特種の様式如何に因らねばならぬ。²⁾

以上述べたる所に依り、リカードの謂ふ所の固定、流動資本の區別は、一方に第二義的の資本の區別即ち固定、流動資本の區別として、諸々の點に於て、缺點があるのみならず、他方に不變、可變資本の區別としても頗る不十分なるものであることがわかる。かくて彼れの所謂價值論の修正が起り、彼れの利潤説が生じ來り、その價值論は遂にその本來の形より離るゝに至つたものである。私は次に節を更めて彼れの所謂價值論の修正の内容に立入つて深く詮索するところあらねばならぬ。

第二節 リカード價值論修正の内容

リカードは、以上述べたるが如き固定、流動資本の區別により、資本の使用の

1) Marx, a. a. O., S. 132. (同譯本同冊284頁)

2) このマルクスがリカードの資本區別に對して爲す所の非難を非難するものについては例へば Diehl, *Erläuterungen*, Bd. I, S. 116 ff. を見よ。

諸々の場合に於ける勞賃、利潤の貨物の相對價值に及ぼす影響を説いたのであるが、既に見たる如く、彼れの固定、流動資本の區別は、不變、可變資本の區別として見らるべきものであるに拘はらず、その資本區別として極めて不十分なるものであつたがため、所謂固定資本の持続性、固定資本と流動資本との組合は、如何の貨物の相對價值に及ぼす影響は、彼れに在りては、彼れの勞働價值法則の排除を意味することとなり、勞働價值の概念と生産價格の概念、剩餘價值の概念と平均利潤の概念が相混淆せられ、彼れの價值論は、少許の程度に於いては、あるが、遂に一種の生産費價值論と妥協せざるを得ざるに至つたものである。私は本節に於てこのリカード價值論の修正若くは制限の内容を、可なり詳細に、彼れの擧げたる例證に従ひ吟味して見たいと思ふ。

彼れの謂ふ所の資本の使用が貨物の相對價值に影響を及ぼすべき場合には、左の四つの場合があることを彼れの説く所から汲み取ることができらるであらう。

(一) 二人の企業家がその生産に相等しき分量の資本を投ずるが、その孰れ

かの一人がより多くの資本部分を固定資本に投ずる場合、即ちその各々が使用する固定、流動資本の比例若くは組合はせが相等しからざる場合

(二) 二人の企業家は相等しき固定資本と流動資本とを使用するが、その固定資本の耐久力若くは持続性が相等しからざる場合

(三) 二人の企業家は相等しき分量の流動資本を使用するが、その各々の使用する流動資本の回轉期間即ちそが企業家に再び還り來る期間が相等しからざる場合、換言すれば、一方に於ける生産行程は持続するも、勞働行程が中斷せらるゝがため、その各々の流動資本の回轉に差異ある場合¹⁾

(四) 二人の企業家は相等しき分量の資本を使用し(三)の場合に於けるが如く、勞働行程が中斷せられて生産時間と勞働時間とが相違するといふやうなことがないが、其各々の商品が流通行程に這入るに至る迄、勞働行程に留まる期間が二者相等しからざる場合、換言すれば同じ勞働分量が費されたる各々の商品が市場に到達する迄に費やす時間に差異ある場合

相對價值が變動を蒙むるところのこの四つの可能なる場合あることを指

1) Ricardo, *ibid.*, p. 25. (同譯本46—7頁)(第一版になく第二版に初めて附加せられたるもの)

摘するものはマルクスを措いて他に一人もない。二つ若くは三つの場合を擧げるのが普通である。例へばデイールの如きはたゞ二つの場合を擧げることにより、『原理』第二版に於て附加せられたる猶ほ一つの場合あることすら忘れてゐる。併しリカアドの説く所を仔細に分析すれば、彼れの意識する否とに拘はらず、以上擧げたるが如き四つの場合のあることが見出されるであらう。以下私は、これら諸々の場合に於ける利潤および労賃の相對價値の變動に及ぼす影響を、彼れの擧ぐる所の例證に従ひ、吟味して見たいと思ふのであるが、彼は各場合を一々例證に當て嵌めて秩序的に説いてゐるわけではなく、且つ又労賃および利潤の相對價値に及ぼす影響を一々明確に分別して述べてゐるのでないから、彼れの擧ぐるところの例證を分析、解剖して秩序的順序的に彼れの云ふ所を把握することは、可成困難なる仕事であることを覺悟せねばならぬ。のみならずこの問題は極めて複雑なるがため、多くの批評家はたゞその大體の輪廓を紹介することにより、それを詳細に深く突き込んで分析批評するものが殆んどない、といふことも亦この仕事を困難ならしめるものである。

私は、左にこの修正の内容を検討するに就て、リカアドが第四、第五節と分類せるその分け方に従ひ、彼れの説く所に追蹤することをしない。そのわけは、それ／＼の見出しとその各々の内容とが、可成大なる程度に於て相副はぬのみならず、第四、五節と分類せるそのことも、内容から見ても、決して意義あるものではないからである。私はこれら形式的の事情を度外視して、その修正内容を統一的秩序的に見んがために、第一項に於て、利潤の相對價値に及ぼす影響を吟味し、第二項に於て、労賃の相對價値に及ぼす影響を吟味する、といふ方法に據ることにした。もちろんリカアド自身はこの二つの影響を意識的に分ち考へず、それらを總て結局労賃變動の相對價値に及ぼす影響に歸すると考へてゐたのであるが。随つて固定資本使用の相對價値に影響を及ぼすべき各場合を、一々分類して秩序的に見ることは、多少犠牲にせられざるを得ないこととなるが、この分類に依ることは、修正の意義に關聯して、前者の分類に依ることより、重要さに於て劣るのみならず、リカアドは各場合を一々詳細に例

證してゐるわけではなく、又彼れの實際に取扱ふところと、その言明するところが異なつてゐる場合もあり、旁々この分類に依ることを避けた。

第一項 利潤の相對價值に及ぼす影響

リカアドが第四節に於て勞賃の相對價值に及ぼすべき影響の例として最初に擧げてゐるところのものは、その實利潤の相對價值に及ぼすべき影響の例に過ぎない。先づそれから吟味する。彼は云ふ、――

『假りに二人が各々百名の人を、一年間、二つの機械の建造に使用し、他の一人が同數の人を、穀物の耕作に使用すとせば、その年の終りに於て、各々の機械は、穀物と同一の價值をもつであらう。なぜなれば、これらは各々同一量の勞働に依つて生産さるゝから。更にその機械の一つを所有する人が、次の年に、布を製するため、百名の人の補助によつて、綿製品の製造に彼れの機械を使用し、他方に農業者は、以前の如く穀物の耕作に、百名を使用し續くと假定せよ。第二年目中には、彼等は總て同一量の勞働を使用したであらう。しかし織物業者ならびに紡績業者の有する財及び機械全部は、一年間使用

されたる二百名の人の勞働の結果、或は寧ろ百名の人の二年間の勞働の結果であるであらう。しかるに穀物は百名の人の一年間の勞働に依つて生産さるゝであらう。その結果として若し穀物が五百磅の價值を有するものとせば、織物業者の機械および布全部は一千磅の價值を有すべき筈であり、紡績業者の機械および綿製品も亦穀物の價值の二倍を有すべき筈である。しかるにこれらのものは、穀物の價值の二倍以上を有するであらう。なぜなれば、第一年目に於ける織物業者および紡績業者の資本に對する利潤は、彼等の資本に附加せられゐるに反し、農業者のそれは、費消され且つ享樂されたから。しからば彼等の資本の耐久力に異なる段階があるがため、或は同じことではあるが、一群の貨物が市場に齎らさるゝ前に經過しなければならぬ時間があるがため、貨物は、その生産に費されたる勞働量に正確に比例せずして、――即ち二對一といふ風にはならないで、――最大の價值あるものが市場に齎らさるゝ前に經過しなければならぬより、長い時間に對して償ふために、若干それ以上の價值を有するであらう。(On account

then of the different degrees of durability of their capital, or, which is the same thing, on account of the time which must elapse before one set of commodities can be brought to market, they will be valuable, not exactly in proportion to the quantity of labour bestowed on them—they will not be as two to one, but something more, to compensate for the greater length of time which must elapse before the most valuable can be brought to market.)

『假りに各労働者の労働に對して年に五〇磅支拂はれ、即ち五、〇〇〇磅の資本が使用せられ、そして利潤は一〇パーセントであるとすれば、各機械並びに穀物の價値は、第一年目の終には、五、五〇〇磅であらう。第二年目には、製造業者及び農業者は、再び労働維持のために各々五、〇〇〇磅を使用し、かくて再び彼等の財を五、五〇〇磅に賣却するであらう。併し機械を使用してゐる人々は、農業者と均衡を保つためには、労働に使用されたる同一資本五、〇〇〇磅に對して五、五〇〇磅を取得するのみならず、彼等は、機械に放下したる五、五〇〇磅に對する利潤として、更に五五〇磅の額を取得しなければならぬ。其結果として彼等の財は六、〇五〇磅で賣れなければならぬ。然らばこゝに資本家があつて、彼等は彼等の貨物の生産に年々正に同一量

の労働を使用し乍ら、而かも彼等の生産する財は、銘々各人によつて使用される、固定資本、即ち蓄積されたる労働の分量の異なるために、價値を異にする場合がある。布と綿製品とは同一價値のものである。何故なれば、これらは同一分量の労働および同一分量の固定資本の生産物であるから。併し穀物はこれらの貨物と同一價値のものではない、何故なれば、それは、固定資本に關する限りに於て、異なる事情の下に生産されるから。』

こゝに擧げたるところの例證は、二つの例から成り立つてゐる。私はこの第一の例證を第一例と呼び、第二の例證を第二例と呼ぶであらう。この第一例に於ては、リカードは、彼れ自身の言明により、資本の持続性を取扱ふべき筈であるに拘はらず、少しもそれに觸れて居らぬ。彼は、たゞ、より長い期間の労働行程のため、より短い期間の労働行程に於けるよりは、より大なる資本が使用せらるゝ、といふことを示すに過ぎない。その故は、彼が固定資本の何れの部分をも少部分づゝ商品に這入り込むものであるとしない、随つて固定資本の固有の流通方法の現はるゝ、その要因を全く看逃してゐるがためである。

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 26—8. (同譯本27—9頁)

次に第二例に於ては、彼は彼れ自身の言明により、固定資本の占むる部分が異なるがため、各々異なる結果の生ずべきことを示すべき筈であるに拘はらず、その實彼はたゞことなれる分量の資本の差異(假令同量の資本が勞賃に投ぜらるゝにしても)の及ぼすべき影響を問題にしたに過ぎない。随つてこれらの例證は各々極めて不完全なるものであると云はざるを得ないのである。

猶ほリカアドはこれらの場合に於て極めて單純なる場合を假想してゐる。即ち彼にあつては、(一)農夫も製造業者も何等の原料を使用してゐないこと、(二)農夫は何等の資本をも勞働要具に費してゐないこと、(三)製造業者が投ずる所の固定資本の何れの部分をも消耗せられて生産物に入り込まないこと、¹⁾などが前提せられてゐると見ねばならぬ。猶ほ又リカアドは勞賃の相對價値に及ぼす影響を頻りに言へるに拘はらず、これらの例證に於ては、利潤の相對價値に及ぼす影響を問題としてゐるにすぎない。

扱て先づ第一例から分析して見るに、第一年目に於ては、製造業者は一〇〇

1) 但し第二例に於て。

人を以て機械を製作し、農夫は同じく一〇〇人を以て穀物を造る。第二年目には製造業者は綿布を製造するがために、その機械を使用し、それがために更に一〇〇人を雇備する。然るに農夫は、更に一〇〇人を以前と同じく穀物耕作に雇備する。リカアドの云ふが如く、穀物の價値を年々五、〇〇〇磅であるとし、又不拂勞働即ち餘剩價値を支拂勞働の二五パーセントであると假定する。然る時は第一年目の終りに機械は五、〇〇〇磅の價値となり、その内四、〇〇〇磅は支拂勞働の價値、一、〇〇〇磅は不拂勞働の價値である。更に吾々は第二年目の終りに、機械の全部が綿布の價値に這入り込んでしまふものとすると(リカアドが言つたやうに)綿絲の價値は、一〇、〇〇〇磅——機械の價値五、〇〇〇磅と新らしく附加されたる勞働の價値五、〇〇〇磅と——となる。然るに穀物の價値は五、〇〇〇磅であつて、四、〇〇〇磅が勞賃の價値であり、一、〇〇〇磅が不拂勞働である。これ迄は、この場合に於ては、何等價値法則と相衝突する所がない。綿布製造人は農夫と同様に二五パーセントの利潤を獲得するのである。ところが第一の商品は一〇、〇〇〇磅であり、第二の商品は五、

1) この例證の説明は大體マルクスに據る、以下同じ。Marx, "Theorien." II, I, S. 26-32.

〇〇〇磅であるのは、前者に二〇〇人の労働が含まれ、後者にはたゞ一〇〇人の労働が含まれてゐるに因るのであるが、更にこの上に綿布製造業者が第一年目に機械に對して獲得する所の一、〇〇〇磅の利潤(餘剩價值)は、第二年目になつて漸く實現せらるゝものである。蓋し今や初めて機械の價值は綿布の價值に於て實現せらるゝからである。さうすると製造業者はその商品を一〇、〇〇〇磅より高く、即ちその商品が含んでゐる價值よりは高い價值にて賣却することゝなるが、農夫は五、〇〇〇磅にて即ち穀物の價值にて賣却する。だからこの二人のものが相互に綿布と穀物とを交換するとせば、恰も農夫はその穀物を價值以下即ち二五パーセント以下にて賣却し、製造業者はその綿布を價值以上にて賣却するが如きことゝなるであらう。

さてこのことは如何にして説明すべきであるか？

製造業者がその商品を價值にて賣ると假定すれば、一〇、〇〇〇磅にて賣るのであつて、それは穀物より二倍丈け多くの労働を含んでゐるから機械に五、〇〇〇磅の蓄積労働——その内一、〇〇〇磅は不拂労働——と五、〇〇〇磅の

綿布労働——その内一、〇〇〇磅は不拂労働——、二倍丈け高いわけである。

彼は左の如く勘定するであらう。彼は、第一年目に四、〇〇〇磅を投資し労働者を搾取して五、〇〇〇磅の價值ある機械を造り、二五パーセントの利潤を獲得する。第二年目に彼は九、〇〇〇磅(五、〇〇〇磅を機械に、四、〇〇〇磅を労働に)を投資し、同じく二五パーセントの利潤を得るとすると、綿布を一一、二五〇磅即ち價值より上ること一、二五〇磅に賣却せねばならぬ。なぜなれば綿布に含まれてゐる労働は一〇、〇〇〇磅(一、〇〇〇磅の餘剩價值と九、〇〇〇磅の支拂労働)にすぎないからである。然らばこの一、二五〇磅は何處から得らるのであるか。製造業者と農夫とがその商品を相交換すると假定すると、若くは資本家の一半分が前者の地位に在り、その他の半分が後者の地位に在ると假定すると、前者はこの一、二五〇磅を何處から得るかと云ふに、それは後者から得ざるを得ないことは明らかである。しかしさうなると後者は二五パーセントの利潤を得ることができなくなることも亦明らかである。かくの如くして前者は後者を一般的利潤率の口實の下に欺瞞することになるであ

らう。然るに事實上利潤率は前者即ち製造業者に對しては二五パーセント以上であり、農夫に對しては二五パーセント以下であらう。このことを更に一層詳しく例示して見よう。

農夫は第一年目に四、〇〇〇磅、第二年目に八、〇〇〇磅を投資して、各年二五パーセントの利潤を得るとすると、第一年目に一、〇〇〇磅、第二年目に二、〇〇〇磅、合計三、〇〇〇磅の利潤を獲得する。これに反して製造業者は第一年目に四、〇〇〇磅、第二年目に九、〇〇〇磅を投資するのであるが、彼は、第一年目の四、〇〇〇磅に對しては、二五パーセントの利潤即ち一、〇〇〇磅を得るけれども、第二年目の九、〇〇〇磅に對しては、たゞ一、〇〇〇磅の利潤を得るに過ぎない。と云ふのは機械に投ぜられたる五、〇〇〇磅は何等の餘剩價值を生じないので、たゞ勞賃に投ぜられたる四、〇〇〇磅丈けがそれを生ずるに過ぎないから。随つてこの場合は一一 $\frac{1}{9}$ パーセントの利潤を得るに過ぎない。今年二年を合計して見ると、一三、〇〇〇磅の投資に對して二、〇〇〇磅、即ち一五 $\frac{5}{13}$ パーセントの利潤率となる。平均利潤率が二〇 $\frac{5}{26}$ パーセントである

とすると、製造業者は二〇 $\frac{5}{26}$ パーセントを得んがために四二 $\frac{21}{26}$ パーセント丈け價格を引き上げ、農夫はそれ丈け價格を引き下げるであらう。このことは、農夫の商品が五、〇〇〇磅以下にて賣られ、製造業者の商品は一〇、〇〇〇磅以上で賣られる、といふことを意味する。而してこは平均利潤率の作用に因るものである。

次に第二例に就て見るに、それに依れば、農夫は勞賃に五、〇〇〇磅を、製造業者は同じく勞賃に五、〇〇〇磅と、機械に五、五〇〇磅とを、投資する。若し兩者共に一〇パーセントの利潤を得るとせば、農夫はその穀物を五、五〇〇磅に、製造業者はその商品を六、〇五〇磅に賣ることになる(この場合機械の五、五〇〇磅からは、何等の部分をも生産物の價值構成に入り込まないものと假定さる)。かかる場合リカードは、さきの例證に就て述べたる如く、商品の生産價格が商品に含まれてゐる資本の價值と利潤率との和によつて決定せらるゝ限り、それは價值とは異なるものであり、さうしてこの差異は商品がかかる價格にて賣られ、それが前貸資本に對して同じ利潤率を得るよりして起るものである。

短言すれば生産価格と価値との差異は一般的利潤率と相等しい、と云ふ理論の上に立つて、この二者の利潤の差異を説明すべきに拘はらず、然はせずしてこの差異を投下労働以外に求めようとしたのである。

この例證は猶ほ諸々の點に於て弱點を有つてゐる。第一に、彼はこの例證に於て固定流動兩資本の占むる異なる割合の相對價值に及ぼす影響を明にせんとしたのであるが、さきにも一言したる如く、このことは決して取扱はれてゐない。と云ふのは例へばこの場合製造業者が更に使用するところの五、五〇〇磅を機械に投じないで、原料に投ずるに至つたにしても、全く同じ結果が生ずるであらうから。

次にリカアドは『彼等の生産する財は、銘々各人によつて使用さるゝ、固定資本、即ち蓄積されたる労働の分量の異なるため、價值を異にする場合がある』と云つてゐるが、この第二の例に於ては、彼等は決して固定資本を異なる分量に於て使用したとは云はれぬ。製造業者は五、五〇〇磅を固定資本に投ずるが、農業者は固定資本を少しも投じてゐないのである。(註)

(註) 然るにマルクスに依れば、¹⁾ 彼等は各々蓄積されたる労働、即ち實體化せる労働の相異なる分量を使用する、即ち一方は一〇、五〇〇磅を、他方は五、〇〇〇磅を使用する、と云ふは正しい。

更にリカアドは右の詞と前後して、『彼等は彼等の貨物の生産に年々正に同一分量の労働を使用し乍ら、彼等の生産する財は……價值を異にする場合がある』と云つてゐるが、彼等は同一分量の労働(直接、間接労働)を使用したのではなく、たゞ勞賃に投ぜられたる所の可變資本の同一分量、即ち生きた労働(直接労働)の同一分量を使用したものに外ならない。アモンは『布と綿製品とは、穀物よりはより高い價值を有つてゐるといふ事實を瞭にする爲には、吾人は利潤を全く必要としない』と云ふ。蓋しこの場合利潤を全く考慮の外に置くも、布若くは綿製品は穀物よりはより多くの労働を包含するが故に、固定資本の一部分が入り込むがため、前者は後者よりはより多くの價值を有つがためである。(註)

(註) アモンに依れば、『しかし機械にて生産されたる生産物の價值は、全く交換價值構成の一般的法則の基礎に立つてゐ乍ら、已により、高い價值を有つに違ひない。』

1) Marx, a. n. O., S. 27.

リカアドはこゝにて機械にて造られたる商品には、穀物に於けるよりは、多くの労働が這入つてゐることを看過してゐる。それらには同じ丈の直接労働と過去に爲されたる労働の或る割合とが這入つてゐる。だからこの理由からして已に穀物の価値と機械にて造られたる商品の価値とは同じであり得ない。後者の価値は機械に體化されてゐる資本の或る一定の部分丈け高からざるを得ない。このことは労働価値法則若くは労働分量の關係と一致する。茲には、年々その貨物の生産に丁度同じ労働分量を費す資本家は居ない。布と綿製品とは穀物よりはより高い価値を有つてゐるといふ事實を瞭にするがためには、吾々は利潤を全然必要としない。穀物はより、尠い労働にて生産されるが故にのみ、同じ価値を有たないのである。¹⁾

扱て貨幣は蓄積せられたる労働——機械その他の形で存在するもの——と商品の法則により交換せらるゝものであり、且つ餘剰価値は使用せられたる生きたる労働の一部分を支拂ふことなくして得らるゝものであるから、此場合前提に従ひ機械の何れの部分をも消耗せられて商品に入り込まないとすると、兩方共に同じ丈の利潤を得ることとなるは明らかである(利潤と餘剰価値と同じ場合)。即ち製造業者は農夫より二倍以上の資本を投ぜるに拘

1) Amon, a. n. O., S. 44—5.

はず、前者は後者と等しくその商品を五、五〇〇磅に賣らねばならぬ。さうして若し機械そのものが全部商品に這入り込むならば、彼はその商品をたゞ一、〇〇〇磅に賣り得るにすぎないであらう。かくて農夫は一〇パーセントの利潤を得るのに、製造業者は五パーセントの利潤を得るに過ぎないこととなる。この異なる利潤にてこの二人がその商品を賣れば、それは価値にて賣ることとなる。だから彼等が同じ利潤にてその商品を賣らうとすれば、製造業者が勝手に五パーセントをその商品に附加する、随つて製造業者の商品と農夫の商品とを相合してその価値以上にて賣却するか、若くは農夫の造るところの餘剰価値が約一五パーセントであるか、その孰れかでないければならぬ。斯くて二者共に一〇パーセントの平均利潤を得ることとなるのである。マルクスに依れば、この場合に於て、各商品の生産価格は常にその価値以上或は価値以下にあるにしても、商品の總額は価値にて賣却せられ、利潤の平均はそれに含まれてゐる餘剰価値の總量に依つて決定せらるゝ。要するに上記の例證に於ては、同じ分量の資本の可變、不變資本の割合は、異なる大い

さの價值を有せる商品、随つて異なる利潤を生産せざるを得ない、だからこの利潤の平均は、商品の價值と異なる生産價值を齎らざるを得ない、といふことが、明確に積極的にてゝはないにしても、その内容に於て、横はつてゐるのである。

リカアドは、第一、第二例の外に、なほ一つの例を示してゐる。それに曰く、『假りに、私が一貨物の生産に、二〇人を一年間一〇〇〇磅の出費にて使用し、その年の終りに、次の年のために再び二〇人を新たなる一〇〇〇磅の出費にて使用し、同一貨物の仕上げ又は完成に當らしめ、さうして私が二年目の終りにそれを市場に齎らすものとせば、若し利潤が一〇パーセントであるならば、私の貨物は、二三一〇磅に賣れなければならぬ。何故なれば、私は一年間一〇〇〇磅の資本を使用し、更に一年間二、一〇〇磅の資本を使用したのであるから。他の一人は正に同一量の労働を使用するが、それを總て第一年目に使用する、即ち彼は二、〇〇〇磅の出費で四〇人を使用する。そして第一年目の終りに、彼は貨物一〇パーセントの利潤を得て、即ち二二、二〇〇磅で、賣却する。』

1) Marx, n. n. O., S. 28.

然るときは、茲に、それらに正に同一量の労働が費され乍ら、一は二、三一〇磅に

——他は二、二〇〇磅に賣れるところの二つの貨物があるわけである。

『この場合は、すぐ前の場合と異なるやうにも見えるが、併し事實に於ては同一である。兩方の場合に於て、一貨物の價格がより高いのは、それが市場に齎らされ得る以前に経過しなければならぬところの時間がより長いからである。』¹⁾

この第三例はさきに例舉せる(四)の場合に當るものであつて、二人の企業家は相等しき分量の資本を使用するが、その各々の商品が市場に到達する迄労働行程に留まる期間の異なるがため、その商品の價值に變動を及ぼすといふ場合である。それは前に舉げたる第一例と、その外見に於ても、その内容に於ても、殆んど相異なるところがないのである。

以上吟味したるが如く、リカアドは、所謂固定資本使用の種々なる場合に於て利潤の相對價值に及ぼす影響を、諸々の例證を舉げて——それは無秩序的

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 30-1. (同譯本57-8頁)

に、不完全なる形にて、述べられてはゐるが――説いたのであるが、彼れは資本の區別としてたゞ固定、流動資本の區別(それ自身としても不十分なるものであるが)に固執し、可變、不變資本の觀念に到達するに至らなかつたがため、固定資本使用の相對價值に及ぼす影響は、彼れに在りては、彼れの労働價值説の一制限を意味することゝなり、利潤(及び勞賃)も亦少許の程度にてゝはあるが、獨立の價值構成要素として取扱はるゝに至つたものである。然るに彼れの價值論に對する根本的立場に鑑みつゝ、右に示したるところの彼れの例證の内容を細かに顧みるときは、假令一貨物の價值は、彼れの擧げたるが如き影響により、平均利潤率の法則のため、その生産價格より離れて上下することあるも、結局それは内的基本的に労働價值法則により決定、支配せらるゝものである、といふ主張が、既に彼れの所説の裡に、臆げ乍らも、芽生えてゐると云へると思ふ。詳しく言へば、總ゆる商品の生産價格の合計は、その價值の合計に相等しく、總利潤は總餘剩價值に相等しきものであつて、平均利潤、生産價格は、労働價值なくしては一の空想たるにとゞまるものであり、「餘剩價值が異なる生産部門

に平均せらるゝことは、この總餘剩價值の絶對的大いさを變ずるものではなく、たゞ異なる生産部門にそれを分配するに過ぎない¹⁾といふことを瞭にする迄には、リカアドは遂に到達することができなかつたにしても、彼れの労働價值論からは、當然にかゝる主張が生れ出づべき筈であつたのである。リカアドは右に擧げたる例證からは當然に左の結論に達すべきである、とマルクスはしてゐる。

(一) 同じ分量の資本は、不同の價值ある商品を生産する、随つて不同の餘剩價值若くは利潤を齎らすものである。その故は、價值は労働時間に依り決定せられ、資本の實現するところの労働時間の分量は、その絶對的大いさに依存するにあらずして、可變資本即ち勞賃に投ぜられたる資本の大いさに依存するものであるからである。

(二) 同じ大いさの資本は同じ價值を生産すると假定すれば、その資本が同じ分量の不拂労働を獲得し、そして貨幣に代へ得るところの期間は、その流通行程如何に依るものである。だからこのことは、異なる生産部門に於ける

1) Marx, n. n. O., S. 36]

同じ分量の資本が、或る一定の期間に於て、齎らすべき價值、餘剩價值、及び利潤に第二の差異を惹起することとなる。¹⁾(註)

(註) 利潤の相對價值に及ぼす變動に關するなほ一つの例證を、リカアドのマカロック宛書簡集から引き出して見る。

『……私は貨物が市場に齎らされる迄の相對的時間がその價格、若くは寧ろその相對價值に及ぼす影響を説明するのに若干の困難が伴ひはすまいかを怖れる。價值を有つてゐる貨物は皆勞働により生産せられる。蒸氣機關を製造するに用ひらるゝ勞働は、高價なる家具を製造するに用ひらるゝ勞働と同じ分量であり、且つ同じ期間行はるゝことがあるかも知れない。然る時蒸氣機關と家具とは同じ價值であらう。家具師は一年の終りに其家具を一、〇〇〇磅にて賣る。蒸氣機關も亦同様に一、〇〇〇磅の價值があるが、賣られずして其次の年資本として使用される。若し利潤が一〇パーセントであれば、蒸氣機關の所有者は、彼が使用せざるを得ない(この點に於て彼は家具師と同じ地位にある)勞働および流動資本の分量に關係なく、その年の終りに於て、彼れの機關を元の能率狀態に復せしめ且つ固定資本として用ひられたる資本一、〇〇〇磅の利潤として、その生産物に一〇〇磅を課せなければならぬ。若し彼が蒸氣機關に依つて爲される仕事から收益を收むるのは二年の後であるとすれば、彼は第一年の利潤として一〇〇磅、第二年の利潤と

1) Marx, a. n. O., S. 36.

して一一〇磅を收めねばならぬ。そしてこれは市場に齎らされたる貨物に現に蓄積される勞働の分量とは全く關係がない。今假りに私が高價なる機械を使用し、そして二年間、それから何等の收益をも得ないとすれば、二年の終りに於て、私の機械と私の貨物とを合したるものは、それらを生産するに費されたる全勞働の價值と、その期間何等の收益をも齎らさなかつた資本に對する蓄積せられたる利潤とでなければならぬ。然るに同様の結果は、私が流動資本のみを使用し、二年間貨物を市場に齎らさない場合にも生ずるであらう。二年の終りに、其貨物はそれに投ぜられたる總勞働のみならず、私の資本がかく用ひられたる期間に對する總蓄積利潤に相當する價值があるであらう。それ故に嚴密に言ふ時は、貨物に投ぜられたる勞働の相對的の分量がその相對價值を規制するのは、たゞ勞働の外これに投ぜらるゝものなく、而もその投ぜらるゝ期間の同じ場合に限る。期間が同一でない時、それらに投ぜられたる勞働の相對的の分量は、猶ほその相對價值を規制する主要な要素ではあるが、唯一の要素ではない。何故なれば貨物の價格は、勞働を償ふの外、それが市場に齎らされる迄に經過する期間に對して償はねばならぬからである。一般的規則に對する總ゆる例外はこの時の規則の下に來る。そして一つの貨物を完成するに要する時間は極めて多様であるから、假令その生産に常に同一分量の勞働を必要とする貨物を獲るの困難に克つことが出來るとするも、猶ほ一般的價值尺度として適當に何れかの貨物を選択することは困難である。極端な

る二つの場合は、(一)貨物が資本の仲介を俟たず、労働のみによりて、而も即時に生産せらるゝ場合と、(二)貨物が多量の固定資本の結果であつて、極く僅かの労働しか含まず、長い猶豫を以て初めて生産せらるゝ場合とである。この二つの場合の中間の場合が、恐らく、多くの一般貨物に最も適合するものであらう。この中間の場合の一方に位せる貨物は、労働価格の騰貴、利潤率の下落と共に、その比較的価格騰貴すべく、反対の側に位せるものは、同一の原因よりして下落するであらう。¹⁾

第二項 勞賃の相對價值に及ぼす影響

第一項に於て吟味したる所は、固定資本使用の諸々の場合に於ける利潤の相對價值に及ぼす影響に就てあるが、その外にリカードはかゝる場合に於ける勞賃の相對價值に及ぼす影響を例示しつゝ論じてゐる。しかるに第一篇第三章に於て見たる如く、勞賃(労働の價值)は直接貨物の相對價值に何等變動を齎らさない、といふのがリカードの主張であるから、こゝに云ふ所の勞賃の相對價值に及ぼす影響は、勞賃が直接に相對價值に影響を及ぼすといふ風に、生産費説の立場からのみ説明せられずして、勞賃は一先づ利潤に影響を及ぼすことにより、結局相對價值に變動を及ぼすといふ風に説明せられてゐる。

1) Letters of Ricardo to McCulloch, 13. June, 1820, p. 69-71.

即ちそれは、一方に依然として労働價值説に立脚しつゝ、他方に一種の勞賃生産費説をとるといふ二股式の立場に在るものであつて、リカード獨特の論法であると云へる。これ亦彼がその本來の労働價值説に執著せんとする態度とそれより離れんとする態度との相交错せる態度の一つの現はれと見てよいであらう。この點に關して彼れの擧ぐる所の例證左の如し。

『利潤の下落なくして、労働の價值の騰貴はあり得ない。若し穀物が農業者と労働者との間に分配さるゝのであれば、後者に與へらるゝ部分が大であればある程、前者にはより少しゝか残らないであらう。そのやうに、若し布又は綿製品が労働者と彼れの雇傭者との分配さるゝのであれば、前者に與へらるゝ部分が大であればある程、後者には少しゝか残らない。そこで假りに、勞賃の騰貴のために、利潤が一〇パーセントから九パーセントに下るとするならば、製造業者は、彼等の固定資本に對する利潤として、彼等の財の通常の價格に(即ち五・五〇〇磅に)五・五〇〇磅を附加する代りに、その額に九パーセント即ち四九五磅をしか附加しないであらう、隨つて價格は六・〇五

○磅でなしに五、九九五磅となるであらう。穀物は引き続き五、五〇〇磅で賣れるであらうから、それにより多くの固定資本が使用されたところの製造品は、穀物又はそれにより、少い分量の固定資本が這入つてゐる所の他の財に比較して下落するであらう。だから労働の(價値の)騰貴又は下落に因る財の相對價値の變動の程度は固定資本が使用されたる全資本に對して保つところの比例如何によるであらう。即ち極めて高價なる機械により、或は極めて高價なる建物の中に於て、生産さるゝ所の、即ち市場に齎され得る以前に長時間を要する所の總ての貨物は、相對價値に於て下落するであらうし、他方に於て、主として労働に依つて生産さるゝ所の、即ち迅速に市場に齎らさるゝ所の、總てのものは、相對價値に於て騰貴するであらう¹⁾。』

右の章句は第一章第四節に於て見出されるものであるが、同様の意義の章句は彼が資本の耐久力の異なる場合に於ける相對價値の變動を論ずると云ふ第五節に於ても見出される。それに曰く、

『しかし勞賃の騰貴は、速かに消費さるゝ機械に依つて生産される貨物と、遅

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 28—9. (同譯本53—5頁)

遅として消費さるゝ機械に依つて生産される貨物とに、同じ様に影響を及ぼさないであらう。一方の生産に於ては、多量の労働が生産されたる貨物に絶えず移さるゝであらうが、他方生産に於ては、極く僅かの労働しか移されないであらう。それゆゑに勞賃の總ゆる騰貴は、或は同じ事であるが利潤の總ゆる下落は、持續的性質の資本を以て生産される貨物の相對價値を低くし、より消滅的なる資本を以て生産される貨物の相對價値を比例的に高めるであらう。勞賃の下落は正しく反對の結果を有つであらう¹⁾。』

要するにリカードに従へば、『その生産に持續的資本が使用さるゝ所の貨物の相對價格は、何れの生産にしても使用される資本の持續性に比例して、勞賃と反對に變動するであらう。即ち勞賃が騰貴すれば下落し、勞賃が下落すれば騰貴するであらう。之に反して、價格を測定するところの媒介物よりも、より少い固定資本を以て、或はより、持續性の少い固定資本を以て、主として労働によつて生産さるゝものは、勞賃の騰貴と共に騰貴し、勞賃の下落と共に下落するであらう。』

1) Ricardo, *ibid.*, p. 33. (同譯本62—3頁)

2) Ricardo, *ibid.*, p. 35—6. (同譯本68—9頁)

今こゝに引用したる所の第一例を試みに分析して見るに、それに依れば、農業者は五、〇〇〇磅を投じて、一〇バアセントの利潤を得るのであるから、その商品の価値は五、五〇〇磅である。ところが労賃が騰貴したために利潤が一〇バアセントから九バアセントに下るとするも、彼は何等固定資本を使用するところがないがために、依然として従前と同じく五、五〇〇磅を得ることができらるであらう。他方製造業の資本は、機械に投ぜらるゝ五、五〇〇磅と労賃に投ぜらるゝ五、〇〇〇磅とから成り立つてゐるのであるが、右と同様なる理由に依り利潤が一〇バアセントから九バアセントに下るとすると、彼は労賃に投ぜられたる五、〇〇〇磅からは、以前と同じく一〇バアセントの利潤、即ち五、〇〇〇磅を得るが、機械に投ぜられたる五、五〇〇磅からは、彼は最早や一〇バアセントの利潤、即ち五、五〇〇磅を得る能はず、たゞ九バアセントの利潤、即ち四、九五磅を獲得し得るに過ぎない。その結果農業者の商品の価値は依然として同じであるに拘はらず、製造業者はその商品を六、〇五〇磅にてゝなしに五、九九五磅にて賣却せざるを得ざるに立ち至るのである。だから農業者の

商品の価値は製造業者のそれに比較して上る、若くは後者は前者に比較して下ることゝなるといふのがこの例證の瞭にせんとするところである。

今このリカードが労賃變動の相對価値に及ぼす影響の理論を解剖批評せんに、

(一) 彼れのこの理論は、労賃の騰貴若くは下落は、貨物の価値の騰貴若くは下落を促すものであるとの従来より踏襲せられつゝあつた理論——生産費價值説——を反駁せんとするものであつて、それは一方に於ては、依然として労働價值論に立脚しつゝ、他方に於ては、それより離れて一種の生産費説に陥ち入ると云ふ彼れ獨特の理論を成してゐる。

アダム・スミス及びそれ以後の經濟學者は、概ね、労賃の騰貴は貨物の価値の騰貴を齎らすものであるとの主張を支持して來たものであるが、リカードは、かゝる見解には何等の根據なく、労賃が騰貴せる場合には、その價格を測定するところの媒介物よりも、より少い固定資本をその生産に使用したる所の貨物の価値のみが騰貴し、より多い固定資本をその生産に使用したる所の貨物

の価格は下落するであらう、勞賃の下落せる場合は丁度これと逆の結果が生ずるであらう、¹⁾としてその特有の理論を立てたのである。さうしてリカードは、まことにマカロックの言へる如く、²⁾勞賃の變動は同じ耐久力ある資本により生産せられたる貨物の價值には何等影響を及ぼすことがない、とした最初の人であると共に、その貨物の生産に使用せらるゝ資本が同じ耐久力を有せざる時には、勞賃は以上述べたるが如き影響を貨物の價值に及ぼすものであることを主張した最初の人なのである。

このリカード特有の理論は、『利潤の下落がなければ、勞働の價值の騰貴はあり得ない。若し穀物が農業者と勞働者との間に分配さるゝのであれば、後者に與へらるゝ部分が大きければある程、前者にはより、少しゝか残らないであらう……』との勞働價值説から出發せられてゐる。(註)即ちリカードに在りては生産せられたる價值は、利潤と勞賃とに分たれ、一方が多ければ他方が尠ないのである。だから勞賃が騰貴すればそれは必然的に利潤の下落を惹起さざるを得ないのであるが、彼に従へば、固定資本の耐久力の異なる場合、若く

1) Ricardo, *ibid.*, p. 39.

2) McCulloch, *Principles of Political Economy*, 2nd ed., p. 341.

は固定、流動兩資本の組合はせの異なる場合に於ては、利潤は價值に變動を及ぼし、價值構成の獨立の一要素であるとせられるのであるから、より耐久力の多い固定資本によつて生産せられる貨物、若くは固定資本の占むる割合の多い生産部門に於て生産せられる貨物の價值は、然らざる生産部門に於て生産せられたる貨物の價值に相對的に、下落する、といふことになるのである。この場合相比較される相手の貨物はその絶對若くは眞實價值に於ては騰貴することなきも、それは右の貨物の價值に相對的に騰貴することゝなるのであつて、彼れの所謂價值の相對價值たるの現はれに外ならない。さうして彼は勞賃の騰貴は利潤の下落を伴ふも、それら二者は全價值のたゞ分たれたる二つの部分に過ぎないのであるから、それは何等價值變動を惹起するところがない、との結論に到達しなかつたのである。要するにリカードが多くのもつと反對に、資本の有機的構成の同じ場合に於て、勞賃の騰貴は利潤を下落せしむるも、何等價值に變動を及ぼすことなしとせるに拘はらず、資本の有機的構成の異なる場合に於ては、勞賃の騰貴は利潤を下落せしめ、その結果その價

値の下落を惹起する、としたのは、彼が價值と生産價格とを混同し、前者の一般的平均利潤率の法則により後者に轉化せらるゝことを明確に理解するに至らなかつたことに因るのである。

(註) 『労働の價値の騰貴は利潤の下落なくして不可能である』から、利潤の騰貴は労働の價値の下落なくして不可能である、との立場にリカアドは立つてゐるが、前者の命題はもとゞ、餘剩價値に關するもので異論はないが、後者の命題は正しいとは言はれぬ。そのわけは、利潤は餘剩價値の全投下資本に對する關係に等しいのであるから、それは、不變資本の價値が下落するときには、労働の價値は依然として同じでも、騰貴し得るものであるからである。

(二) 勞賃の相對價値に及ぼす影響は、利潤の相對價値に及ぼす影響、更には一般的平均利潤率を前提してゐる。

既に見たる如く、リカアドに依れば勞賃の相對價値に影響を及ぼすのは、生産費價値説の如く、勞賃の騰落が直接に價値の騰落を惹起す、といふ形式に依るのではなく、勞賃の變動は先づ利潤に影響を及ぼし、然る後利潤の變動が價値に傳はることに依つて、間接に、相對價値に影響を及ぼす、といふ形式に依る。

のであつて、その結果は、生産費説と反對に、勞賃の騰貴若くは下落は、相對價値の下落若くは騰貴を齎らすことになるのである。だから勞賃の相對價値に及ぼす影響は、彼にありては、結局利潤の相對價値に及ぼす影響に歸する。随つてこの場合、彼は平均利潤率の法則を前提してゐるのである。彼が固定資本の耐久力の異なる時、若くは固定、流動資本の組合はせの異なる時、貨物の相對價値の不同を惹起する原因として、『貨物の生産に必要な労働の分量の大小と云ふこと以外に、他の一原因——労働の價値の騰落——を引き入れる』と云ひ、又『本節に於ては、労働の分量に何等の變動なくとも、單にその價値の騰貴が、それらの生産に固定資本が使用さるゝ所の財の交換價値の下落を惹起するであらうと云ふことが説明されてゐる。そして固定資本の分量が多くなればなる程、價値の下落は大となるであらう』と云つてゐるのは、相對價値變動の原因を成すものは、彼にありては、結局利潤であることに顧みて、聊か當を得ざる詞であると云はねばならぬ。たゞリカアドは労働價値説を唱へるに拘はらず、利潤の存在を當然であるとしてゐるから、それが變動を相對價値

に及ぼすことは、左迄彼れの本來の立場を傷つけることを意味しないが、勞賃の相對價値に影響を及ぼすことは、彼がその然らざることを(右に假定せざる場合)屢々高調してゐる丈に、特にその本來の勞働價値説を修正するものと考へられたるがためであらう。

要する所リカードが勞賃の相對價値に及ぼす影響を論ずる場合には、彼は、彼れの意識せると否とに論なく、一般的平均利潤率の法則と勞働價値法則とを、その間の關係を明確にすることなく、並び前提してゐるのである。

以上述べたる如く、リカードは固定資本の耐久力の異なる場合、固定資本流動資本の組合はせの異なる場合、およびその他の場合に於て、勞賃の、隨つて又利潤の貨物の、相對價値に及ぼす影響を認めることにより、その本來の勞働價値説へ一種の修正を施したのであるが、しかしこの相對價値に及ぼす影響は、費されたる勞働分量の相對價値に及ぼす影響に比し、極めて僅少なるものである、とリカードは云ふ。例へば彼はこの點に就て左の如く言つてゐる。

『しかし乍ら、讀者は貨物の價値の變動のこの種の原因はその結果に於て比較的輕微であることを、注意しなければならぬ。利潤に於て一パーセントの下落を惹起するやうな勞賃の騰貴を以てしても、私が假定したる事情の下に於て生産せられたる財は、相對價値に於てたゞ一パーセント變動するのみである。即ちこれらのものは、利潤のかくの如き大なる下落があるに拘はらず、たゞ六、〇五〇磅から五、九九五磅に下落するに過ぎない。勞賃の騰貴がこれらの財の相對價値に及ぼすべき最大の結果も、六、七パーセントを出ることにはできないであらう。その故は、利潤は恐らく、如何なる事情の下に於ても、一般的に又永久的に、その量より一層下落することはできないであらうから。』¹⁾

然るに、リカードに依れば、貨物の價値變動の他の大なる原因たる費されたる勞働の分量の増加又は減少に至つては、斯くの如きことはない。例へば、若し穀物の生産に一〇〇人の代りに八〇人しか必要としなるとなると、穀物の價値は二〇パーセント方下り、五、五〇〇磅から四、四〇〇磅に下落するに至るであらう。『永續的利潤率の變更は、その大いさの如何に拘はらず、多年の間に

1) Ricardo, *ibid.*, p. 29. (同譯本56—7頁)

於てなければ作用しない所の原因である』に反し、貨物を生産するに必要な労働の分量に於ける變更は、日々起るところのものである。即ち機械道具、建物及び原料の産出に於けるあらゆる進歩は、労働を節約し、貨物の生産を益々容易ならしめ、その結果、その価値を減少せしむるものである。よつて彼は云ふ『然らば、貨物の価値の原因を測定するに際し、労働の(価値の)下落又は騰貴に依つて生ぜしめられたる結果を、全然考慮外に置くのは、間違つてゐるであらうが、それに甚だ重きを置くのも等しく正しくないであらう。仍つて本書の以下の部分に於ては、私は時としてこの變動の原因にも説き及ぶであらうが、貨物の相對價值に於て起る總ての大變動は、貨物を生産するに時々必要な労働の多少に依つて發生するものと看做すであらう』と。

かくて彼は修正の後と雖も、恰もこの相對價值に及ぼす變動を顧みざるが如く、その本來の労働價值説に立脚しつゝ、その分配論を説いたのであつて、後に詳しく論ずるが如く、彼は、この修正に依り、その労働價值説を抛棄し、生産費價值説をとるに至つたものであるとする解釋には、このリカアートの詞をたゞ

表面的に解することからも、遽かに同ずるわけには行かぬのである。

リカアトは斯様に所謂修正に認むる重要な程度を輕んじ、それは本則に對する例外を爲すものたるにすぎないとしたのであるが、これに對して當時その然らざることを言ひ、リカアトの例外が寧ろ本則であるとして、彼れのこの態度に反對したものはタランス、マルサスである。タランスは一八一八年一月號の、"The Edinburgh Magazine and Literary Miscellany" (Constable, Edinburgh) に於て、『交換價值に關するリカアト氏の學説を論難す』なる一文を發表し、そこにてアダム・スミスが労働價值法則を原始社會に限つたことは彼れの細心に出づるもので、リカアトがそれを文明社會にも行はれるとしたのは過つてゐると云ひ、リカアトの態度を非難したのである。タランスに依れば、リカアトもこの原則が耐久力の異なる資本が使用される場合には、支持し得られないことを云つてゐるが、それはたゞ本則の例外を成すと云へるにすぎない。しかるに、タランスに在りては、それは例外でなくして本則であつて、資本が粗生原料と勞賃の異なる割合から成つてゐるとき、一業に於ける勞賃率が偶々他

1) "Strictures on Mr. Ricardo's Doctrines respecting Exchangeable Value."

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 29—30. (同譯本56—7頁)(傍點——森)

2) Ricardo, *ibid.*, p. 30. (同譯本57頁) 乃ほ Ricardo's Letters to Malthus, p. 176. 參照

の業に於けるよりも高きとき、資本の耐久力の程度が異なるとき、耐久力は等しきも、労賃に對する支出が異なるときは、生産物の價值はそれに投ぜられたる労働の分量に比例しない¹⁾のである。このタランスの非難に對しては、直ちにマカロックが同誌の十一月號にリカアドに代つて答ふところがあつた²⁾。マルサスも亦このリカアドの立場をタランスと同様なる見地から非難したものである。『なる程リカアド氏は彼れ自らこの原則に大なる例外を認め、がしかし若し吾々が彼れの例外——即ち使用される固定資本の分量が異なり、又その資本が異なる耐久の程度にあるとき、および使用される流通資本の回轉期間が異なるとき——の下に來るところの貨物の種類を吟味するならば、吾々は、かゝる貨物の種類は、おびたゞしい數であつて、寧ろ原則が例外であり、例外が原則であることを見出すであらう』とマルサスは云つてゐる。

このタランスやマルサスやの非難が如何にリカアドの價值論の本質を理解することから縁遠いものであるかは、こゝに詳しく述べることをしない。彼等にはたゞ現象形態あるのみにて、それが依つて條件づけらるゝところの

内的關係は彼等の意識の外にある。リカアドはこの現象形態と本體との矛盾を意識し、それを矛盾として十分に説明することが出来ずして、若干後者を離れて前者と妥協することにより、それを説明せんとしたのであるが、すでに見たる如く、彼れの所謂修正に對する所の重要は所謂本則の例外たるにすぎぬものであつて、彼はその本來の労働價值説——内的關係にあく迄も固執したのである。こゝに彼れのタランス、マルサスなどの所謂俗流經濟學者と根本的に分別せらるゝ差異が横はる。

結 語

以上、私は、第一二節に互りて、リカアドが謂ふところの固定資本使用の種々なる場合に於ける、労賃の、否な寧ろ利潤の、貨物の相對價值に及ぼす影響を、即ち所謂リカアド價值論の修正を、可なり詳しく、解剖吟味したつもりである。

リカアドの價值論の他の部分に對すると同じく、この所謂彼れの價值論の修正に對しても、諸々の異なる批評態度があることには變りがない。とこ

- 1) Letters of Ricardo to McCulloch, p. 16 に據る。
- 2) "Mr. Ricardo's Theory of Exchangeable Value Vindicated from the Objections of R."
- 3) Malthus, Difinitions in Political Economy, 1827, p. 27. すでにマルサスは Principles of Political Economy, 1820, p. 104. に於て同様の非難をした。

ろで彼がこの所謂修正に意味附けるところの本體如何の問題は、結局彼れの利潤の本質に對する態度如何の問題に歸著するのであるが、この點に關する彼れの態度は、後に詳しく述ぶるが如く、極めて曖昧であるがため、その眞意を正確に把握することは殆んど不可能なるがやうである。たゞ大體にこの點に對する諸々の批評態度を分別すれば、左の二つの態度が見出されるであらう。

(一) リカアドはこの修正により、價值構成要素として費消労働の外に、利潤(勞賃)をも明らかに認むるに至つたものである、即ち利潤を全然労働價值から切り離したものであつて、この價值論の修正はいかにも修正であるに相違ない、そしてこのことは誠に當然であるとするもの。解釋者の多くは、若くは彼れの價值説に全然反對するものは、この解釋をとる。(註)

(二) 彼が利潤を、相對價值變動の獨立の一要素として認めんとしたること、はなる程事實であるが、彼れの労働價值論の本質および所謂修正の内容は、利潤を労働價值より説明すべく、已に大體に於て可なり十分なる程度に於て、構

成せられてゐた、たゞ彼は一步を進んで利潤をかくの如く餘剩價值として意識的に説明する迄に至らなかつたに過ぎない、とするもの。労働價值説に理解あるものは、概ねこの解釋をとる。

この孰れの解釋をとるべきかは、各々の批評家自身の價值論一般に對する態度如何にも懸るであらうが、私一個としては、リカアド價值論は労働價值論それ自らの立場に立つことにより正當に解釋せらるべしとの考へより、この後者の批評態度をとるべきではなからうかと思ふ。私は以上試みたところの修正内容の吟味に於て、この態度に據つて來たものである。

(註) このリカアドの所謂價值論の修正に對する左のアモンの解釋は、彼れのリカアド價值論一般に對する解釋の一つの現はれであつて、一種獨特のものである。

『かゝる直接労働および過去労働の評價に於ける差異は、前者は後者に依つて代位せらるゝことができない時のみ、たゞ當然に起り得るものである。それは一つの主張に従へば確かにさうである。直接労働はいかにも過去労働により代はられ得るが、過去労働は直接労働により代はられ得ない。この理由により、直接労働は過去労働より、多くの價值があり得ないが、過去労働は直接労働より、

多くの價值があり得る。さうしてそれは、それが相對的に稀少なる場合に、より多くの價值があるべきであり、又必然的により多くの價值があるのである。それはこの問題の困難を除き、それを解釋する所以である。要するに吾々はこゝにて再び、相互にそれ自身分量的に比較され得ないが、たゞ稀少性即ち彼等の需要に關して彼等が現はれる度合に關聯してのみ比較され得るところの二つの異なる種類の勞働を取扱つてゐるのである¹⁾。

既に見たるが如く、リカードは、資本の區別として、たゞ固定、流動資本の區別に終始し、不變、可變資本の區別をとるに至らなかつたのであるが、この彼れの態度は、彼が猶ほ資本制生産方法の外的現象に囚はれ、その内的機構を瞭にするを得ずして、遂にその勞働價值論に所謂修正を加へざるを得ざるに至りし最も重なる理由を成すものである。即ち彼は、異なる生産部門に於て、可變不變兩資本が各々その總資本の如何なる割合を占むるかに依つてのみ、餘剩價值、随つて又結局に於て利潤率は決定せらるゝものであることを説かず、ただ「資本の形式の差異、その資本がこの異なる形式をとるところの諸々の割合及び資本の流通行程から起るところの形式の差異、換言すれば、固定、流動資

1) Amon, a. a. O., S. 47.

本、固定資本の大小、及び資本の異なる流通速度若くは回轉¹⁾を取扱ふに過ぎなかつたがために、利潤の平均に依つて惹起される相對價值(この場合生産價格)の勞働價值よりの乖離は、彼に在りては、その勞働價值説への一制限を意味したのである。

その結果、勞働價值法則は、固定資本が使用せらるゝ諸々の場合と雖も依然として資本制生産方法の運行を規制する内的法則であり、利潤は餘剩價值の總前貸資本に對する關係たるに過ぎずして、結局に於て勞働價值、餘剩價值に依つて決定せらるゝものであり、それは前貸資本と合せられて、價值より離れたる生産價格を構成し、資本主義的生産關係の外的現象として、表面に浮び出るものであることを、彼は理解せなかつた。短言すれば、彼は價值の生産價格化、餘剩價值の一般的平均利潤率化を明確に把握し、餘剩價值理論および利潤理論を正當に發展せしむるに至らなかつたのである。彼にありては、一般的平均利潤率は已に在るものとして前提せられて居り、即ち「密輸入せられ」て居り、價值は生産價格と同視せられてゐる。随つて彼が所謂價值論の修正を説

1) Marx, Theorien, II, I, S. 14.

く場合、彼れが謂ふ所の價值、相對價值は、その實勞働價值より離れたる生産價格に外ならぬ。第一章第四節に於ける彼れの詞「而も彼等が生産する所の貨物は、銘々各人によつて使用せられる固定資本、即ち蓄積されたる勞働の分量の異なるがため、價值を異にする場合がある」に於ける價值の外、彼が同節及び次節に於て屢々謂ふ所の相對價值は、皆生産價格の意に外ならぬ。(註)マルクスはこのリカアドの態度を批評して次の如く言つてゐる。「商品の價值の單なる價值から、如何にしてその餘剩價值、利潤、更には一般利潤さへもが出て來るかといふことについては、リカアドは朦朧としてゐる。彼が上記の例證に於て、事實上示すところの唯一の事柄は、商品の價格は、それが一般的利潤率によつて決定せらるゝ限り、商品の價值とは全く異なるものであるといふことである。さうして彼がこの差別に到達するのは、彼が利潤率を法則として前提するによる。世人は彼れの餘りに抽象的なることを非難するが、その實その反對の非難、即ち抽象力の缺乏、言ひ換へれば、商品の價值に於て、彼が、競争から出て來り、それに對立するところの事實たる利潤をば、忘却することがで

きなかつた、といふ非難が却つて正しいであらう。」

リカアドはかく價值と生産價格との概念を混同し、その結果若干生産費説と妥協するに至つたにしても、彼が一方に於て、依然として本來の形に於ける勞働價值説を根柢に於て支持し、他方に於て、平均利潤、生産價格を前提するからには、價值の生産價格化、餘剩價值の利潤化の理論の基礎は、彼れの無意識の裡に、彼れの修正理論に於て見出されるのであつて、彼れのこの修正理論は、事實上、マルクスが資本論第三卷に於て述べたるところの餘剩價值の利潤化、價值の生産價格化を取扱へるものに外ならない。リカアドが一般平均利潤の法則の現象形態と勞働價值法則の本質的關係との矛盾の事實に當面し、それが解明に終生苦しみ、遂にそれを十分成し遂げることができなかつたにしても、何等かゝる矛盾の現象を見出すことなくして打ち過ぎた多くの學者と比較して、リカアドの學説が如何に優れたる經濟學であつたかを吾々は忘れてはならない。

猶ほリカアド價值論の本體如何、そが缺點、ならびに長所如何についての批

1) Marx, n. n. O., S. 37.

評は後程結論に於て若干詳細に取扱ふところあるであらう。

三二六

(註) リカアドが謂ふところの價值が生産價格であることは彼れ自身の明に言明するところである。

『マルサス氏は、一物の出費と價值とは同一であるべき筈である、といふのが、私の學說の一部であると考へて居らるゝやうである。若しも氏が出費を意味して、利潤を含める『生産出費』なりとするならば、その考へは正しい。上の條に於ては、これは彼れの意味せざる所である。だから彼は明らかに私を理解してゐない。』

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 39—40, note. (同譯本77頁註)

第二章 自然價格と市場價格

前章に於て述べたる如く、リカアドは固定資本使用の種々なる場合に於て、貨物の相對價值が利潤および勞賃に依り變動を蒙むべきことを説いたが、その變動は、彼に依れば、極めて僅少なるものであつて、總じて相對價值は勞働價值であるとの立場は、その後と雖も依然として彼れの支持したるところである。さうして彼は、この勞働價值法則は地代の發生に依りても決して變改せらるゝことなきを説きたる後、更に貨物の市場價格は、假令需要供給の變動により、その自然價值より一時的に離るゝことあるも、資本の高き利潤を追うて一の生産部門より他の生産部門に移り行く運動あるがために、長き期間に互りてそれより離るゝこと能はず、やがては結局その自然價格に歸著すべきことを論じ、貨物の價值決定の標準は、決して或るものゝ云ふが如く需要供給の關係にあらずして、依然としてその自然價格即ち勞働價值(寧ろ生産價格)であることを瞭にせんと努めたのである。これ即ち私がこゝに吟味せんとす

三二七

る所のものであつて、それは『原理』第四章『自然價格および市場價格に就て』並びにその追補たる同第三十章『需要および供給の物價に及ぼす影響に就て』に於て論ぜられてゐる。この需要供給の運動に本づく外觀から獨立して觀察せんとするリカードの態度は、價值價格現象を合則的に、即ち概念に一致したる姿容に於て、觀察せんとする彼れの根本的態度から來る必然の結果であつて、洵に當然であると云はねばならぬ。

この點に就てのリカードの説く所は、スミスの同様なる點に就て説く所と其の内容に於て、若干異なるものがあるが、大體に於てスミスの立場を踏襲したるものであつて、スミスよりさして出てゐるとは云はれぬ。それは、後に詳しく述べる如く、自由競争、資本移動、および平均利潤の貨物の價值價格に及ぼす影響のホンの一部分を不十分に取扱へるものに過ぎない。

なほこゝに謂はるゝところの自然價格は、後にも云ふ如く、勞働價值であると云はんよりは、寧ろその轉化したる(彼にありては修正せられたる)生産價格であるから、多くの學者がこの自然價格と市場價格に就てのリカードの説

を、彼れの價值論を批評するに當り、その冒頭に持ち來り、自然價格を勞働價值の出發點となすことは穩當ではない。矢張りリカードの爲した順序に従ひ、彼れの所謂勞働價值論の修正(その實價值の生産價格化)を検討したる後に於て、この問題を取扱ふのが自然であらう。

以下私は先づ初めに(一)に於てリカードの自然價格と市場價格に就ての所説の概要を簡単に紹介し、然る後(二)に於てこのリカードの説ける所に對する批評を試みたる上、更に(三)に於て特にリカードが需要供給の價值價格決定に對して附せる意義、並びに彼れのこの立場に對する一種の解釋を吟味して見たいと思ふ。

一

リカードは『原理』第四章『自然價格および市場價格に就て』の冒頭に述べて云ふ。

『勞働を貨物の價值の根柢となし、さうしてそれらの生産に必要な勞働の比較的分量を、相互交換に當つて與へらるゝであらうところの財の夫々

の分量を決定する規則となすとは云へ、吾々は、貨物の實際の價格即ち市場價格が、この價格即ち彼等の第一次的且つ自然的價格より、偶然的且つ一時的の偏倚をなすことのあるのを否定するものである、と考へられては困る。『通常の場合に於ては、貨物にして人類の欲求および願望が要求するその程度の分量に於て、正確に或る期間内續けて供給されるものは、一としてない。だから價格の偶然的且つ一時的偏倚を蒙らないところのものは、一としてないわけである。』

『資本が、偶々需要されてゐる各種の貨物の生産の爲めに、必要なる分量に於て、そして丁度その分量に於て、正確に割り當てらるゝのは、かゝる偏倚の結果に過ぎない。價格の騰貴又は下落と共に、利潤はその一般の水準の上に高められ或はその下に落される。かくて資本は、偏倚の發生したるところの特定の職業に入り込むべく獎勵せられ、或はそれより引き退くべく警告さるゝのである。』

かくの如くにして總ての利潤率をして均等ならしむる傾向が生ずるので

1) Ricardo, *ibid.*, p. 65. (同譯本128—9頁)

あるが、それは、リカードに依れば、より不利なる事業を棄て、より有利なる事業に向はんとする總ての資本使用者側に於ける斷えざる願望に因るものである。而してこの資本の移轉が如何にして行はるゝかを見ることは、甚だ困難であるが、恐らくは、それは製造業者が彼れの職業を絶對的に變更することによつては、なくして、たゞその職業に彼が投じてゐる資本の分量を減ずることによつて、實現せらるゝであらう、とリカードは云ふ。彼に依れば社會には浮動資本が常に存在して居つて、企業家は概ね多かれ少かれそれを使用するものであるから、例へば絹布に對する需要が増加して、綿布に對するそれが減少する時は、織物屋は、彼れの資本を持つて絹織業に移ることをしないで、彼れの職人の若干を解雇し、銀行家および金持からの貸金に對する彼れの需要を休止する。しかるに絹布製造業者の場合にはこれと反對である。即ち彼はより多くの職人を雇傭せんとし、斯くて金銭借用に對する彼れの動機が増加されて、より多くを借ることとなる。斯くの如くにして資本は、一製造業者が彼れの常職を休止するの必要なしに、一つの職業から他のそれに移轉するこ

とができるのである。

斯様に資本が不利なる生産部門から有利なるそれに移動せらるゝことにより、總ゆる産業には、自ら一定の平均的な利潤が齎らされるに至るものであるが、しかし職業の性質上、一方のものは他方のものよりも、安全、清潔、容易、その他の點に於て勝ることがあり得るわけであるから、それらを考慮して、一方のものは他方のものに比べてより、尠い利潤にて甘んじなければならぬ。その結果甲の職業には二五パーセントの利潤、乙の職業には三〇パーセントの利潤、更に丙の職業には三〇パーセントの利潤が存在する、といふやうな事實が、永續的に持續することがあり得るとリカアドは云ふのである。これは平均利潤の一つの例外若くは障礙を成すものである。

以上述べたる後、リカアドは一般的なる例證を擧げて、この論を了る。それに依るに、假りに、總ての貨物がその自然價格にあり、その結果總ての職業に於ける資本の利潤が、正確に同利率に在るか、或は當事者の評價に於て彼が保持し又は放棄するところの或る眞實の、或は想像さるゝ利益に等しい量だけ異

なるに過ぎないとして見よう。扱て流行の變化が絹布に對する需要を増加し、そして毛織物に對するそれを減少した、と假定するならば、彼等の自然價格は、即ちその生産に必要な労働分量は、依然變化しないであらうが、併し絹布の市場價格は騰貴し、そして毛織物のそれは下落するであらう。その結果として絹布製造業者の利潤は一般的平均利潤以上に昇り、毛織物製造業者の利潤は、反對に、それ以下に降ることとなるであらう。然る時は資本および労働（勞賃も利潤と同じ影響を受けるものであるから）は、毛織物の製造からより有利なる絹布製造に移轉せられ、絹布に對する増加されたる需要は滿さるゝこととなる。かくの如くにしてこれら二つの貨物の市場價格は再びその自然價格に一致し、一般的平均利潤率は回復せらるゝに至る。要するにリカアドによれば、貨物の市場價格をして、或る時期の間引續きその自然價格のずつと上に又はそのずつと下に在らしむることを妨ぐるものは、彼れの資金をより不利なる職業よりより有利なるそれに移轉せんとする各資本家の有する願望これである。この競争こそ、貨物の生産に必要な労働に對する勞賃を支

拂つた後に、並びに使用さるゝ資本をその本來の能率状態に置くに要する他の總ての費用を支拂つた後に、残るところの價值即ち餘剰が、各職業に於て、使用されたる資本の價值に比例されると云ふやうに、貨物の交換價值を決定するところのものである。』

以上私はリカアドの説く所に追蹤して、その大要を紹介した。彼は茲に於て如何なることを瞭にせんとしたかは、(一)に於て細かに吟味せんとするのであるが要するに彼は、貨物の價值決定は、偶然的・一時的なる需要供給の作用により變動せらるゝものではなく、即ち個々の主觀的なる評價意識の作用により變動せらるゝものではなく、その自然價格・勞働價值若くは生産價格に依據するものであること、即ち價值は社會的・客觀的に規制せらるゝところの一の社會的實在であること、を瞭にせんとするに在つたのである。而してこのことを説くがためには、彼は、資本主義生産方法に特有に存在するところの資本、勞働の自由移出入、自由競争、隨つて起るところの平均利潤の存在を前提してゐたことは申す迄もない。

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 68-9. (同譯本134-5頁)

リカアドが需要供給法則の貨物の價值に對して附する意義については(三)に於て特に詳細に吟味することゝし、左に私は先づ資本の移動、競争により、貨物の市場價格が結局その自然價格に落つくといふリカアドの所説を、勞働價值論の本質に關聯せしめて、深く檢覈して見たいと思ふ。かくの如くにして吾々は、リカアドが資本家的生産方法の外部的・具體的現象形態とその内部的・基本的關係とを甄別し、その二者を正當に關係づけることにより、前者の本質——市場價格と自然價格との關係——を如何なる程度に於て、理解してゐたかを知ることができらるであらう。私の本章に於て主として瞭にせんとするところは實にこゝに在る。

二

以上に於て見たる如く、リカアドは、平均利潤率の法則の存在、資本の自由競争のため、貨物の市場價格は結局その自然價格に落ち行くべき機構の存在することを瞭にせんとしたのであるが、それは、私の見るところに依れば、競争の貨物の價值および價格に及ぼす影響の一つを取扱へるものである。

惟ふに平均利潤の法則の存在のために、資本家(企業家)の間に惹起される競争の貨物の價值および價格に及ぼす影響には凡そ二つあるであらう。

その(一)は同じ生産部門のうちに於ける競争の貨物の價值、價格に及ぼす影響である。かゝる場合に於ける競争は、その生産部門内に於ける貨物の價值を、社會的平均的に必要な勞働分量、即ち社會的平均的生產條件の下に生産せられたる貨物の價值によつて決定し、市場價值即ち價值を成立せしむるものである。この場合にはこの平均的勞働の分量より離れたる、即ちそれより、¹⁾より、²⁾少い勞働分量を生産に費すところの貨物——平均的生產條件より、³⁾より、⁴⁾好條件の下に生産せられたる貨物——は、それ自身の價值と平均價值即ち市場價值との差額だけの餘剩利潤を獲得し得るものであつて、その農業生産部門に於けるものが地代を成すのである。換言すればかゝる場合の競争は、その生産部門内の貨物が一樣に平均價值、市場價值にて賣られることにより、諸々の利潤率を生ぜしむるものである。一言にして云へば、其生産部門に於て異なる利潤率があるにより、即ち利潤率が平均せられざるにより、市場價值が

生ずるわけである。

その(二)は、異なる生産部門の間に於ける競争の貨物の價值、價格に及ぼす影響これである。かゝる場合に於ける競争は、一般平均利潤率の法則により、各生産部門に於て價值より離れたる生産價格を生ぜしむるものである。この場合に於ける競争は貨物の生産價格と價值とを一致せしめようとはしない。寧ろその反對である。随つてかゝる場合に於ては價值と生産價格とが持続的に乖離することが可能である。

かくの如く競争の貨物の價值、價格に及ぼす影響には、二つの場合があるのであつて、要する所(一)の場合に於ては、不等なる利潤率を有せる相等しき價值若くは價格¹⁾が存在し、(二)の場合に於ては、相等しき利潤率および生産價格を有せる不等なる價值が存在することゝなるのである。

リカードは同一生産部門の内に於て貨物の市場價值が成立つことにより、餘剩利潤が発生するてふ(一)の競争に就てはこゝに何等説くところがない。彼が茲に於て問題としたのは、(二)の異なる生産部門間に於ける競争の及ぼ

1) この場合に於ては價值と價格との差別は無用である。

すべき影響に就てゝあるが、しかし彼はこの場合を悉く説いて餘すところがないと云ふのではない。たゞ彼はその半面のみを問題としたに過ぎないのである。

惟ふにこの(二)の場合に於て、資本の競争が平均利潤率のために貨物の價值、價格に及ぼすべき影響は更に二つに分たれることができるであらう。

その(一)は、資本が不利なる生産部門から有利なる生産部門に移動することにより、平均利潤率が成立し、かくて貨物の價值が生産價格に轉化せらるゝ影響これであり、

その(二)は、同様なる理由により、貨物の現實の市場價格が、需要供給の關係により、一時的にその生産價格(自然價格)より逸脱することあるも、結局それに一致せんとするところの影響、即ち生産價格が市場價格の歸向中心たるところの機構、即ちこれである。

リカードが説いたのは——間々他の場合と混同しつゝ——主としてこの(二)の場合に就てゝあることは、さきに紹介したるところの彼れの詞によつて

知ることができる。

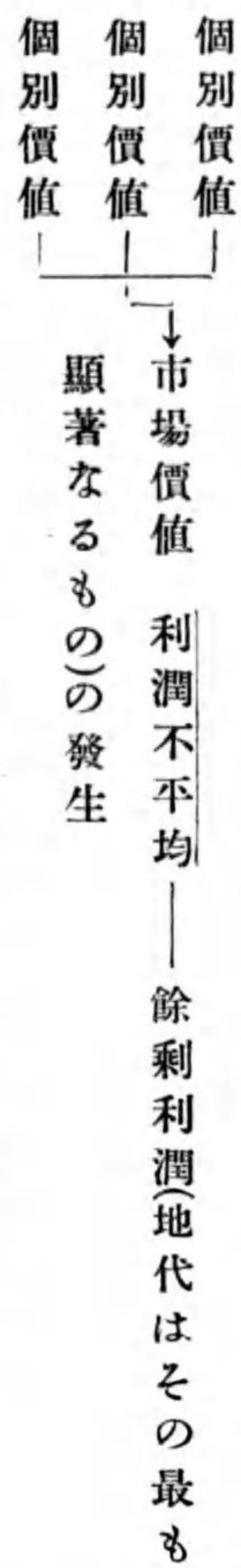
斯様にリカードは資本の移動により惹起される市場價格と生産價格(彼れの所謂自然價格)との關係のみを問題としたのであるが、即ちたゞ價值價格の外部的運動のみを問題としたのであるが、この運動はその内的運動に基礎づけられるものであるから、それが本體を瞭にせんがためには、どうしてもその内的運動にまで遡らざるを得ない。しかるにリカードはこのことを辨へずして、この外的内的兩現象の關係を理解せず、たゞ外的現象のみをすでに與へられたるものとして説いたに過ぎない。彼れのこの點に就ての研究の不十分なる所以である。

リカードに在りては、異なる生産部門間に於て價格の平均的水準、即ち自然價格(その實生産價格)が前提せられ、随つて又平均利潤が前提せられてゐる。しかし彼はこの平均的價格および平均利潤が如何にして惹起されるかに就ては、何等顧みるところがない。ところがこの平均價格並びに平均利潤は、社會資本が競争により各々異なる生産部門に分配せらるゝことに依り、價值

並びに餘剰價値の轉化したるものであるから、彼れの問題としたるところの真相を瞭にせんがためには、先づ第一にこの轉化の運動を理解するところあらねばならぬ。即ちマルクスが言へるが如く、『一度び異なる部門間に於て市場價値若くは平均的市場價値が同一の平均利潤を齎らすところの生産價格に還元せらるゝ、といふことを前提したる上にて、特殊なる部門に於て市場價格が生産價格から斷えず離れる、即ちそれを上下することにより、社會資本の新しい移動および新しい分配が惹起されるわけである。』¹⁾

以上述べたる所の骨子を圖解して見ると左の如くなる。

(一) 特殊生産部門内に於ける競争の價値、價格に及ぼす影響



(二) 異なる生産部門間に於ける競争の價値、價格に及ぼす影響



市場價格↕生産價格(自然價格)

要するにリカアドは、こゝにてたゞ市場價格と生産價格との關係を、それらが因つて來るところの道行——個別價値↓市場價値↓生産價格——を瞭にすることなしに、説いたに過ぎぬのであつて、このことは、既に第一章に於て詳しく吟味したる如く、彼が價値の概念と生産價格の概念とを混淆し、資本主義的生産方法の内部的機構を未だ十分に瞭にすることができなかつたことに起因するのである。

以上はリカアドのこゝに瞭にせんとするところの本體如何を基本的に吟味批評したのであるが、今左にそのうちに見出される二三の特殊なる點に就て若干吟味して置きたいと思ふ。

(一) リカアドのこゝに説く所の競争による資本の移動に就ては、大體に於て既にアダム・スミスの『諸國民の富』に於て説けるところであつて、リカアド自身も同章に於て『諸國民の富』第七章に於て、この問題に關する總ての事柄が最

1) Smith, Wealth of Nations, Cannan's ed., Vol. I, pp. 57-65.

1) Marx, Theorien, II. 1, S. 61.

も巧みに論ぜられてゐる」と云ひ、又他の所にて「如何なる學者も、生産せられたる財が、その價格によつては、それを生産し、そしてそれを市場に齎らすための全出費——その中には普通の利潤を含む——を償ふに足らないやうなかゝる事業から資本が移動するの傾向あることを、博士スミスよりもより十分に且つより立派に説明したものはない」とも云つてゐる。しかしこの問題に就てリカードがスミスに勝る點がないではない。それは彼が資本が一生産部門から他の生産部門に移動するその移動の内容をより詳細に研究したことである。即ちリカードが資本の移動は恐らく製造業者が彼れの職業を絶對的に變更することに依つては、なく、たゞその職業に彼れが投じてゐる資本の分量を減ずることに依つて實現せらるゝであらうとして、資本移動の過程を信用の作用に求めたことである。彼れの謂ふところに依るに、「總ての富める國に於ては、所謂金持階級^{マネードラフツ}を形造つてゐる多くの人々がゐる。これらの人は何れの職業にも従事しないで、彼等の貨幣の利子で食つてゐる。その貨幣は手形割引に使用せられ、或は社會のより勤勉なる部分に對する貸出とし

て使用せられる。銀行家も亦同様の目的物に大資本を使用する。斯くの如くに用ひらるゝ資本は多量の流通資本を形造り而してそはより大なる或はより小なる割合を以て一國の總ての相異なる職業によつて使用される。如何に富むと雖も、自己の事業を彼自身の資金の許すであらう範圍内にのみ局限する所の製造業者は恐らく一人もあるまい。彼は常に彼れの貨物に對する需要の動くに従つて之を増加し或は減少する所のこの社會の浮動資本 (floating capital) の或る部分を有つてゐる。絹織物に對する需要が増加し、そして綿布に對するそれが減少する時は、織物屋は、彼れの資本と共に絹物業に移ることをしないで、彼は彼れの職人の若干を解雇し、銀行家および金持からの資金に對する彼れの需要を休止する。他方に絹布製造業者の場合にこれと反對である。彼れはより多くの職人を雇傭せんことを願ひ、斯くて金銭借用に對する彼れの動機が増加される。彼はより多くを借りる。かくて資本は、一製造業者が彼れが常職を休止するの必要なしに、一つの職業から他の職業に移轉せられる。吾々が大都會の市場に注意し、そして如何に規則正しくこ

れらが餘りに豊富なる供給から起る過多とか、或は供給が需要に釣合はないことから起る減法に高い價格とかいふ結果を屢々生ずることなしに、趣味の變遷又は人口數の變化から起る所の需要變動の總ての事情の下に於て、内外の貨物をその要求さるゝ分量に於て供給され居るを觀察する時に、吾々は資本を各職業にその要求さるゝ正確なる分量に於て割當てる所の原理は、一般に想像されて居るよりもつと活動してゐることを、認めざるを得ないのである。¹⁾この點に於てリカードがミスに優るのは、リカードの時代に於ては、より信用經濟が発達してゐたがためであらう。

(二) リカードがこゝに所謂自然價格の意義は必ずしも一定して居らぬ。それは或る場所にては勞働價值の意に解せられてゐるかと思ふと、他の場所にては生産價格の意に解せられてゐる。例へば第四章の冒頭に於ける詞——『勞働を貨物の價值の根柢となし、そしてそれらの生産に必要な勞働の比較的分量を、相互交換に當つて與へらるゝであらう所の財の、夫々の分量を決定する定規となすとは言へ、吾々は、貨物の實際の價格即ち市場價格が、この價

1) Ricardo *ibid.*, pp. 66—7. (同譯本130—2頁)

格即ち彼等の第一次的且つ自然的價格より、偶然的且つ一時的の偏倚をなすことのあるのを否定するものである、と考へられては困る¹⁾に於ては、自然價格は勞働價值に解せられてゐる。ところが左のリカードの詞——『假りに總ての貨物がその自然價格にあり、さうしてその結果として總ての職業に於ける資本の利潤が、正確に同利潤にあるか、或は當事者の評價に於て彼等が保持し又は投棄する所の或る眞實の或は想像さるゝ利益に等しい量だけ異なるに過ぎないとして見よう』に於ける自然價格は、明らかに生産價格を意義してゐるものと解すべきであるが、しかし彼はそれに續く文章にて『彼等の自然價格即ちその生産に必要な勞働の分量は云々』と云つて居り、全くこの二つの概念を混淆してゐるのである。

しかし詰る所一般的に見て、彼はこの章下に於ては、自然價格を生産價格の意に解せるものであると云つてよいであらう。たゞリカードは勞働價值の生産價格に轉化することを意識的に理解することなく、利潤、勞賃は僅かの程度にては、あるが獨立の價值構成要素であるとしたのであるから、即ち價值

1) Ricardo, *ibid.*, p. 65. (同譯本128頁)

と生産價格とを同じ範疇に屬するものとしたのであるから、かくの如くこの二者が相交りて説かれてゐるのは、彼れの態度からしては、もとよりその所なのである。彼はこゝに於て交換價值||自然價格||労働價值||生産價格を同視するの誤謬に陥つてゐる。その結果リカードは市場價格が假令一時的にその自然價值より離るゝことあるも、結局それに落つき、長き期間に互りてそれより離るゝことができないと云つて、市場價格が若くは生産價格がその眞實價值から持続的に離るゝことを感知しなかつたのである。(註)

(註) ウィテイカーも彼れの解釋の立場からしてこのリカードの所謂自然價格に二義ありとしてゐる。即ち彼れに依れば、『この自然價值は、一方に於て哲學的意義を有し、他方に於て經驗的意義を有してゐる。そはよくして詞の不確なる一對である。その經驗的意義に於てはそれは單に正常的價值であつて、それは、競争の下に於て、市場價格振動の中心を成すところのその價值に對する洵に適當なる名稱である。その「哲學的」意義は、スミスが二三度暗示したやうに、外界の自然から貨物を獲るところの人類の費用である。』

猶ほこゝに一言して置きたいのは、さきにも述べたる如く、リカードに依れ

1) Whitaker, *ibid.*, p. 50.

ば、貨物の交換價值、價值は純相對的のものであつて、たゞ相交換される二つの貨物の相對的比例的關係たるに過ぎないものとすれば、こゝに自然價格が彼れの所謂交換價值、他物購買力¹⁾であるとするのはをかしい。かゝる意義に於ける交換價值としては、寧ろ偶然的、一時的なる市場價格のみ存在すべく、一般的固有的内容なる自然價格假令それが労働價值にもせよ、生産價格にもせよは存在するに由がないからである。このリカードの態度は、彼が屢々自分が問題とするのは相對價值に就てであること口にし乍ら、その實彼れの價值論は眞價值、絶對價值に基礎を置いてゐるものであることの證據の一つを成してゐる。

三

以上に於て見たる如く、リカードに依れば、終局に於て貨物の交換價值を決定するのは、生産出費(生産價格)であつて、たゞ一時的にその市場價格に影響を及ぼすに過ぎないところの需要と供給との比例關係ではない。このことは彼れの價值論の構成から見て當に自然の歸結である。ところがこのリカード

1) Ricardo, *ibid.*, p. 69. (同譯本135—6頁)

ドの態度に對しては、彼れ以後多くの批評若くは最員の引き倒しとも云ふべき解釋がある。私は、この點に於て、この點に關するリカアドの主張をより詳細に吟味すると同時に、併せてこの點に對する一種の批評解釋の當否を檢して見たいと思ふ。

リカアドはこの點に就て『原理』第三十章『需要および供給の物價に及ぼす影響に就て』に於て可成り詳しく説くことに依り、經濟學に於て殆んど公理の如くなつてゐると彼が信じた所の需要供給關係の價値を決定するてふことを極力反駁してゐるのである。

先づリカアドの説く所に依るに、例へば帽子の生産費が減少せられたと假定するならば、かゝる場合、その價格は、假令それに對する需要が二倍三倍され或は四倍されようとも、終局に於て、その新らしい自然價格に迄下落せざるを得ないであらう。又例へば労働者の生活資料を成してゐる所の食物および衣服などの自然價格が減少せられたと假定するならば、かゝる場合、勞賃は、如

何に労働に對する需要が増加すると、結局その自然價格に迄下落せざるを得ないであらう。然るに貨物の價格は専ら供給の需要に對する比例若くは需要の供給に對する比例に依つて定まる、との見解は、殆んど經濟學に於ける一つの公理の如くなつて來て居つて、斯學に於ける多くの誤謬の根源になつてゐる、としてリカアドは、ブカナン、セイ、ローダアデエルなどのかゝる見解を駁するのである。

而してリカアドに依れば、この彼れの立場は、貨幣の價値の變動如何に關はらず、眞理であり、そしてこれらの人々が唱へる所の需要供給關係が貨物の價値を決定するといふことは、獨占貨物に就てのみ事實である、そして又實に總ての他の貨物の市場價格に就ても、限定されたる期間に於ては事實である、と彼は云ふ。即ち『一個人によつて或は一會社によつて獨占さるゝところの貨物はローダアデエル卿が説明したる所の、その法則に應じて變動する。それらの貨物は賣却者がその分量を増加するに比例して下落し、そしてそれらを購買せんとする購買者の熱望の度に比例して騰貴する。それらの物の價格

は、それらの物の自然価値とは何等の必然的連絡を有たないのである。¹⁾併し乍ら既に繰り返へし述べたる如く、リカアドに在りては、『競争の目的物である所のそしてその分量が或る適宜の程度に於て増加され得る所の諸貨物の価格は、終局に於て、需要と供給との状態によつて定まらないで、それらの生産の出費の増加又は減少によつて定まるものである。』¹⁾

なほリカアドはその友人に宛てたる書信の中にも需要供給關係の終局の價值規制者にあらざることを頻りに言つてゐるのであつて、例へば一八一八年一月三日附マルサス宛の一書簡に於て、彼は『だから兎に角需要供給が唯一の價值規制者ではない。キング卿や貴下が需要供給によつて何を意味せしめらるゝかを知り度いものである。如何に需要が大であつても、それは決して永久的に貨物の価格をその生産費——それに生産者の利潤が含まれる——以上に上げることはできない。であるから永久的價格の變動の原因を生産費に求めることは當然であるやうである。』²⁾と云ひ、又一八二〇年一月二四日附の同氏宛の他の書信に於て、『私は穀物の價格、又は他の總ゆる物の價

1) Ricardo, *ibid.*, p. 376. (同譯本341頁)

2) Letters of Ricardo to Malthus, p. 143.

格に及ぼす需要の影響を疑ふものではない。しかし供給は需要のすぐ後を追ひかけ、間もなく自分自らの力にて價格を左右するに至るものである。さうして供給が價格を左右する場合、それは生産費によりて決定される』¹⁾とも云つてゐる。(註)

(註) 需要供給關係は價值を終局的に決定するものではないとするリカアドの詞をなほもう一つ彼れの書簡中から引用して見よう。

一八二〇年一〇月一〇日附マルサス宛——『セイ氏が貨物はその効用に比例して價值を有するものであると主張するとき、彼は價值とは何を意味するかについて正しい見解を全く有つてゐない。若しも買手だけが貨物の價值を規制するのであるならば、このことは眞實であらう。かくしてすべての人々は、物に對して、彼等がそれに附する評價に比例するところの價格を喜んで支拂ふであらう、といふことを吾々は全く期待することができ。しかし乍ら事實上、價格を規定するに當り、買手の關係することは最も少ないやうに思はれる。價格の規制は全然買手の競争によつて行はれるものである。以前に買手が實際に於て、金に對するよりも鐵に對して、より多くを支拂はうと欲するも、彼等は價格を規制することは出來ないであらう。といふのは供給が生産費によつて規制せらるゝであらうから。であるから金は今日それが鐵に對する比例にあるであらうことは止むを得ない、たと

1) *ibid.*, p. 179.

ひ金は、恐らくは、人類全體に對しては、鐵よりより効用のない金屬であらうとも。……貴下は需要供給が價值を規定することを云はるゝが、私はこの書簡の始めに述べたる理由により、それは何ごとをも意味しないと思ふ。價值を規制するものは供給であつて、供給は比較的生産費に依つて支配される。』

右に紹介したるところのリカアドの需要供給の貨物の價值、價格に及ぼす影響についての所説は、彼れ自身の立場から考へて、猶ほ不十分なるものがあるにしても、兎に角一般的から見て、この點についての彼れの態度は彼れの價值論の性質から來る當然の歸結であると云はねばならない。

斯様にこのリカアドの態度を、彼れの價值論の根本的立場に顧みて解釋するものには、彼が使用價值および交換價值に對してとるところの態度についての場合と同じく、彼れの價值論の立場を全然否定するもの、即ち主觀學派とそれを一般的に肯定するもの、即ち客觀學派との二つあるわけであるが、この解釋の外になほ一つの解釋がある。それは所謂折衷學派のとりどころであつて、それに依れば、リカアドはこゝに於て價值、價格の決定的要素として供給側の原因を見たと共に、需要側の原因をも看逃さなかつたと云ふのである。

1) *ibid.*, pp. 173-4, 176.

所謂マイシヤルの解釋これである(デイチュールの相似たる折衷説は既に見たところである)。私はこのマイシヤルの解釋を左に若干吟味し、それが如何にリカアドの立場の眞實なる解釋として堪へ得るものであるかを吟味して見たい。

マイシヤルのこの態度は既に第一篇に於て私の若干觸れて置いたところである。彼は價值決定要素を缺の雙齒に譬へ缺は雙方の齒があつて甫めて切ることができると同様に、物には效用と費用とがあつて甫めてその價值が決定せらるゝものである、と云ふ立場からしてこのリカアドの立場を解釋せんとする。彼がその『經濟原論』附録Iに於て云へる所に依れば、リカアドは、貨物の交換價值は決して單りそれが生産に費されたる生産費のみに依つて決定せらるゝものである、と云ふのではなく、それが決定は亦『人類の欲求と願望』とに係るものである、と云ふ。ジェヂェンスがリカアドの批評は、このリカアドが需要、效用の一面をも見たことを全然顧みなかつたものであつて、『彼はリカアドとミルの兩者を苛酷に批判し、彼等が實際主張した所の説を、より狭く、よ

り非科學的に解釋したかに思はれる』とマーシャルは云ふのである。

今少しくマーシャルの言ふ所に従はんに、彼はジエチンスの詞——『吾々は、需要供給の普通の法則がその必然的結果であるところのその満足すべき交換理論に到達するが爲には、吾々の所有する貨物の量に依存する效用變化の自然法則を周到に追究すれば足りる。労働は往々價值を決定するものであるとせられるが併しそれは供給の増加若くは制限に依り貨物の效用程度が變化せしめられる、といふ間接の方法に依つてさうであるに過ぎない』——を引用したる後に言つて曰く——

『すぐ後に於て見るであらうが、これら二つの命題のうちの後者は、散漫且つ不正確ではあるが、既に殆んど同じ形態に於て、リカアドおよびミルに依り述べられたるところのものである。しかし彼等は前者の命題を承認しなかつたであらう。蓋し彼等は一面效用變化の自然法則は極めて明白であつて、詳説を要せぬとなし、他面生産費が生産者の販賣の爲めに提供する分量に何等の結果を及ぼし得ないならば、交換價值にも何等の結果を及ぼし得ないこと

1) Marshall, *ibid.*, p. 817.

を認めただからである。且つ又彼等の學説は、供給について眞なることは、必要なる變更を加へて、需要についても眞であり、又一貨物の利用が市場に於ける買手の買取量に何等の影響を及ぼし得ないならば、その交換價值にも何等の影響を及ぼし得ないであらう、と云ふ意を藏してゐるからである。』

かくてマーシャルはジエチンスの中心命題——
『生産費は供給を決定する。』

供給は最終效用程度(*final degree of utility*)を決定する。最終效用程度は價值を決定する。』

を轉倒して左の如くすれば、彼れの因果連鎖よりも寧ろ眞に近き連鎖を作り得ると云ふ。

『效用は供給さるべき分量を決定する。

供給さるべき分量は生産費を決定する。

生産費は價值を決定する、蓋し生産費は生産者がその仕事を繼續し得るに必要なる供給價格を決定するから。』

1) Marshall, *ibid.*, p. 817.

2) Marshall *ibid.*, p. 819.

リカードは、假令價值決定要素として生産費を特に重視したとは云へ、需要供給の影響をも考慮に入れたのであるから、恐らくはこの連鎖を承認したであらう、とマーシャルは云ふのである。

かくリカードの價值論に於て、主観客觀の折衷的態度が見出され得る、となすところのマーシャルの解釋は、リカード價值論の根本的立場を餘りに無視するものではなからうか。かゝる折衷的態度を自分自身とるところの可否は別問題であるが、この態度をリカードに押しつけることの到底許容し難いことは殆んど論議を必要としない、と私には思はれる。リカードが現今の社會に於ける價值論としてとつたところのものは、勞働價值説にあらずして、生産費説であるとするマーシャルの解釋は、たとひリカードの價值論の本質をよく傳へるものでないにしても、リカードがその價值論を純粹なる形に於て終始一貫支持したものでなかつたことに顧みて、直ちに何等の考慮なく排すべし、といふところのものではない。がしかしこの需要、效用を價值決定要素として全然否認する態度は、リカードの徹頭徹尾とるところのものであつて、

彼れの價值論の根本的な特徴を成してゐるのであるから、マーシャルのこの點に就ての解釋は寧ろリカードの價值論を曲解するものであるとも云へるであらう。リカードに在りては、需要は價格變動の一時的偶然的なる原因たるに過ぎずして、需要供給相一致したる場合、それは何等價值決定の説明たり得ないのである。我が小泉教授は、『予は Jevons 等の新學説は、以て Ricardo の學説の不備缺陷を補ふ資料たらしむべく、Ricardo の學説の優に新學説と相融合せしむべく、その一を取るも必しも全然他を棄つることを要せずと信ずる點に於て、大體上 A. Marshall および Heinrich Dietzel の所見と同じうするものなり。Dielh はこの二家の見解を難じ、Ricardo の客觀主義學説と Jevons 等の主観主義學説との全然相容れ難きものなることを力説せりと雖も、その論據は予の認めて薄弱となすところなり』と云ひて、このマーシャルの解釋に同じて居らるゝやうである。

リカード價值論のこの點に對するこの種の解釋と相似たる解釋は、マルクスの價值論、價格論に於ても見受けらるゝ所であつて、マルクス價值論の一解

1) 小泉教授『續リカードの價值學説論』三田學會雜誌第十六卷第九號42頁

釋を成してゐる。それは、マルクスの『資本論』第三卷に於て、次の彼れの章句――「一の商品がその市場價值で賣却せらるゝがためには、即ちその中に含まれる社會的に必要な勞働の分量に比例して賣却せらるゝがためには、この種の商品の總量に費され居る所の社會的勞働の全量がその商品に對する社會的欲望の分量に即ち購買力を有する社會的欲望の分量に、適應しなければならぬ」その他これに類似せる章句が見出されるよりして、マルクスに所謂商品の價值は、それが生産に費されたる社會的に必要な勞働分量と、それに對する社會的欲望、社會的使用價值、若くは社會的需要との二つの要素により決定せらるゝものであつて、マルクスの價值論も亦一種の主觀客觀折衷説であるとするのである。しかしこゝに社會的欲望は價值實現の條件であつて、決して價值決定の要素ではない。リカアドに於ける場合と同じく、この種の解釋は到底許容すべくもないのである。²⁾

右述べたるマーシャルの解釋は、リカアドの價值論に於て假令不十分乍らもマーシャル自身とるところの立場が見出されるといふ觀點からの解釋で

あるが、かゝる觀點以外からしてリカアドの需要供給關係の價格に及ぼすべき影響に就ての見解を批評若くは非難するものは甚だ多い。主觀的價值論の立場からこの點に對して爲される所の諸々の非難および需要供給價值説の立場からこの點に對して爲される諸々の批評若くは非難は即ちこれである。しかし詰る所これらの批評は、その實、非難であつて解釋ではなく、結局各批評家自身とるところの立場如何の問題に歸著するものであるから、茲には一々紹介吟味することをせぬであらう。

たゞ右に吟味したるところの需要供給と價格との關係に就てのリカアドの態度は、彼れの立場からしては、洵に當然であるにしても、それは猶ほ不十分であつて、一層の分析發展を必要とするものであることは争はれない。マルクスは『資本論』第三卷に於て大體に於てこの點に就てリカアドと同様なる立場に立つて、この需要供給法則と價值、價格との關係をより詳細に解剖説明してゐるのである。

1) Marx, Das Kapital, III, 1, S. 172. (高島氏譯本三の三342頁)

2) この種のマルクス價值論解釋は數多くあると同時にその反對論も亦數多い。我國に於ても次の反對論が數へられる。堀學士『マルクスの勞働價值論の根本命題に就て』經濟論叢第十一卷第三號87-99頁 河上博士『社會問題研究第四十六册11-19頁 榑田民藏氏『マルクスの價值概念に關する一考察』大原社會問題研究所雜誌第三卷第一號49-51頁。

第三篇

前 言

以上私は第一篇に於て、リカード價值論の根本的内容、即ち價值決定の基本的原理——即ち社會的生産の内的關係を、第二篇に於て、彼れの價值論の所謂修正、その實、競争により惹起される價值、剩餘價值の生産價格、平均利潤化、および生産價格(自然價格)と市場價格との關係、——即ち價值の外的現象形態を研究したのであつて、これを以て彼れの價值論の骨子の研究は既に大體に於て完了されたわけである。ところが緒論第三章に於て精しく述べておいたやうに、彼れの經濟學の目指すところは、分配理論であり、そしてそれを瞭にせんがために、彼は、その勞働價值論から出發したのであるから、その分配理論たる地代論、利潤論、および勞賃論に於て、彼れの價值論がそれら分配論の基本的基礎として取扱はれてゐるであらうことは容易に想像し得らるゝところであるが、果して如何なる意義と程度とに於て、この二者は相關係づけられてゐる

であらうか？ このことを見定めることは、彼れの價值論の研究に極めて緊切なる關係を有つてをり、且つ又それが研究の目的に適應する所以である。尤も彼れの分配論の基本的規定は彼れの無意識の裡に、彼れの價值論に於て既に與へられてゐる、若くは與へられたるものとせられてゐる。がそれが詳細はそこに於ては當然に彼れの觸れなかつたところである。

斯様な理由により、私は本篇に於て、彼れの價值論と彼れの地代論、利潤論および勞賃論との關係を取扱はんとするのであるから、それらの分配論の全般に亘りて仔細に詮索検討することを爲さず、主としてたゞこれら二者の關係のみを瞭にせんと努めることにより、リカードがこの點について如何なる理解を有つてゐたか、この點についての彼れの功績および缺陷如何、結局彼れの分配論の本質如何を吟味するにとゞめるであらう。從來のリカード分配論の解釋批評に於て、それと彼れの價值論とを關係づけるといふ觀點から、特に彼れの分配論の本質を突き込んで解剖研究することは、左迄十分に行はれてゐると思はれないにつけて、この問題の研究はかなり重要なものなるか

のやうに信ぜられるのである。私は先づ第一に彼れの價值論と地代論との關係から見るであらう。

第一章 リカアアの價值論と地代論

所謂リカアアの地代論(Ricardian Theory of Rent)と稱せらるゝところの内容は、決してリカアア自身が創めて唱へたものではなくして、既に彼に先んじて(アンダアスン)又は殆んど彼と同時に(マルサス、ウエスト)相似たる地代論を提唱したものがあつたことは一般に知らるゝところの事實である。しかし最も完成したる形に於て地代理論を構成したのはリカアアであるのであるが、殊に彼が初めてその地代理論を、彼れの價值論と何等抵觸することなしに、否寧ろそれを價值論の基礎の上におき、それから説明するに至つたことは、彼れの著しい貢獻の一つに數へられねばならぬ。

ところが地代論は、リカアアに在りては、彼れの全體系の出發點若くは價值論の基礎を爲してゐるといふものがある。併しかゝる解釋はリカアアの眞意を傳へるものではない。成程彼に於て社會の進歩(資本、人口の増加)に伴うて惹起される社會的生産物の割合の變動を決定する要因として、地代論、土地

收穫遞減の法則が特に擧げられてゐることは事實である。一言にして言へば、分配の動的變動の動因として地代論が大なる役目を演じてゐることは事實である。だが彼れの地代論の本質は、彼れの利潤論、勞賃論と同じく、彼れの價值論によつて甫めて説明せられてゐるので、價值論を外にして彼れの地代論は存在しない。なほ且つ彼れの思想的發展に於ても地代論は決して彼れの最初の學問的關心事であつたとは云はれないのである。

リカアア地代論が問題としたところは、所謂差額地代についてである。だからリカアアの地代論と價值論との關係を云爲するは、主としてこの差額地代と彼れの價值論との關係に限らねばならない。併し勞働價值論をその本來の形に於て支持發展するからには、當然に右の差額地代論の外に、絶對地代の理論が出て來なければならぬ。私は本章に於て、先づ(一)に於て、彼れの差額地代は如何に彼れの價值論に依據しつゝ、説明せられてゐるかを見、(二)に於て勞働價值論から當然に推論せらるべき絶對地代の理論をリカアアは何故に缺いたであらうか、について若干の考察をして見たいと思ふ。たゞこゝに

は彼れの價值論と地代論との關係を吟味することにより、彼れの地代論の本質を闡明せんとするのみ。彼れの地代論一般についての詳細の議論はそれ自ら一の大きな仕事を成す。こゝに關するところではない。

一

さてリカードに依れば、資本蓄積せられたる後に於ける貨物の交換價值は若干の制限の下に於てあるにしても、依然としてそれが生産に費されたる労働の分量に依りて決定せらるゝものであるが、更に土地が占有せられ、地代が支拂はるゝに至りたる後に於ても、貨物の生産に費されたる労働分量は、なほ貨物交換の決定要素たり得るか否か、といふのがリカード地代論の瞭にせんと目指すところであつて、彼は、たゞ差額地代のみを取扱ふに過ぎないのであるから、その實この問題の一部分のみに答へたるに過ぎぬのであるが、それに對して肯定の答解を與へるのである。

リカードの地代理論は、經驗的には、極めて簡單なる現象の説明の要求から出て來たものである。利潤は一般的に總ゆる生産部門を通じて平均に歸せ

んとするの傾向あるに拘はらず、特に農業生産部門に於て利潤に持續的に、差等あるの事實は、人をして容易に、恐らくはそれは土地の肥沃度の差異に本づくものではあるまいか、と云ふことを想像せしむるであらう。リカード地代論はこの現象をその價值論に依つて説明せんとするのである。

リカードの地代理論は平均利潤率の法則の存在と資本の自由競争とを前提とし、自然的に土地の地味および位置には差等があり、さうして一般的に可耕地は無限であるにしても、その有限なる時絶對地代發生す、地味の豊饒なる又は位置の便利なる土地に制限があり、且つ又土地耕作はこれら上等の土地から然らざる下等の土地へ進むところの事實、ならびに土地收穫遞減の法則に依據してゐる。さうしてリカードに依れば、地代の發生する場合に三つの場合——土地の肥瘠に差等ある場合、位置の便否に差等ある場合、および同じ土地に資本、労働を重ねて投ずる場合——があるのであるが、何れの場合に於ても、『地代は土地の生産物の一部分であつて、それは土壤の本源的にして不可壞的なる力の使用に對して、地主に支拂はるゝ所のものである』¹⁾とせられる。

1) Ricardo, *ibid.*, p. 44. (同譯本86頁)

リカードはその地代理論を説明せんがために、種々なる場合に於ける種々なる例證を示してゐるのであるが、私が見る所に依れば、それらは悉く企業家の全収益の立場から見たものであつて、彼以後地代理論を説明する場合通常例示さるゝ所のものはこれである。即ち第一、二、三等地に於て、一〇〇、九〇、八〇クヲオタアの穀物が漸次生産せらるゝ場合に於て、第一等地に二〇クヲオタア、第二等地に一〇クヲオタアの穀物の地代を生じ、第三等地には何等の地代をも生じない、といふたぐひの例證はこれであつて、これはその最も代表的なるものである(肥沃度異なる場合)。

ところが右の企業家の全収益上の立場から見た地代發生の一般的説明からして、或る確定せる分量の穀物の價值若くは價格決定から見たる地代成立の説明——それが地代の本質の説明である——が起り來らねばならぬ。この貨物の價值、價格の決定と地代成立との關係は、リカードに於て、實質上取扱はれてゐるが、十分であるとは云へぬ。先づこの點に關する彼れの詞を左に擧げて見よう。

『すべての貨物——それが製造品であらうと、鑛産物であらうと、土地の生産物であらうとを問はず——の交換價值は、常に極めて好都合なる、そして生産の特殊利便を有つてゐる人々が享受するが如き事情の下に於て、それらのものを生産するに足るであらう所の、より、少い労働の分量によつて左右せらるるのではなくして、かゝる利便を有せざる人々が、即ち最も不利なる事情——所要量の生産物を得るがために生産を行ふことを必要とする最も不利なる事情——の下で、それらのものを引き續き生産する人々が、其生産に必らず費すところのより、多くの労働の分量によつて左右せらるゝものである。』(註一)

この命題は價值決定、地代成立の根本的命題であるが、その一般工業再生産物の價值決定に關する限りに於ては、既に第一篇第四章第二節に於てかなり詳しく、又第二篇第二章に於て若干吟味した所である。こゝでは地代理論の基礎的命題として専ら取扱ふであらう。

さてリカードに依れば、右の章句が示す如く、一定種類の貨物の交換價值は、一様に、その貨物の生産部門に於ける最も都合悪るき生産條件の下に於て生

1) Ricardo, *ibid.*, p. 50. (同譯本99頁)

産せられたる貨物の價值——即ち最大労働分量——に依りて決定せらるゝものであるから、それよりより好都合なる生産條件の下に於て生産せられたる貨物——その貨物にはより尠い労働分量しか費されぬ、随つてその價值は小である——はそれに均霑して、前者と同じ價值を獲得し、その價值にて賣られるのである。言葉を換へて言へば、後者の貨物の(個別)價值は以前と同じであるに拘はらず、前者の貨物の價值が、それにより多くの労働が費されたる結果、上昇したるが故にのみ、後者の價值もそれに伴うて他力にて上昇することとなるのである。この二者の貨物の價值の差額、即ち餘利利潤が農業生産部門に於て地代を成す。(註二)随つて後者は地代を含まないわけである。それ故に『なぜ粗生産物が相對價值に於て騰貴するか理由は、獲得されたる最終の部分の生産により多くの労働が投ぜらるゝからであつて、地代が地主に支拂はるゝからではない。穀物の價值は、地代を支拂はない所のその等級の土地の上で、或は地代を支拂はない所のその部分の資本を以て、その生産に費されたる労働の分量に依つて左右される。地代が支拂はるゝが故に穀物が

高いのではなくして、穀物が高いが故に、地代が支拂はれるのである』といふことが言はれ得ることとなる。さうしてリカードに従へば、マルサスと異なり、地代は土地の豊饒にして生産的なることから發生するものではなく、その反對に、土地が鄙吝にしてその生産力が衰へることからして發生するものであり、随つて又地代は富の徴候ではあるが決して富の原因ではないのである。要するにリカードにありては、地代は價值決定により生ずるのであるから、それは穀物の價值、價格騰貴の結果であつて、その原因ではない。彼は『この原理を明らかに理解することは、經濟學にとり最も重要なことである、と私は信ずる』と云つて居り、さうしてアダム・スミスが貨物の交換價值を決定するところの労働價值法則が、土地の占有、随つて起る地代の支拂に依つて變改されると考へるのは正當ではない、と云ふのである。

(註一) こゝに『需要さるゝ生産物の分量』(the quantity of produce required) は、マルクスに依れば、間違つてゐる。といふのはそれは或る確定せられたる大きさではないからである。それはよろしく『或る一定の價格限界のうちに於て需要さるゝ所の或

1) Ricardo, *ibid.*, pp. 51—2. (同譯本102—3頁)(傍點——森)

2) Ricardo, *ibid.*, p. 55, note.

る一定の生産物の分量』(eine bestimmte Menge von Produkten, die innerhalb bestimmter Preisgrenzen erforderlich ist.)とあるべきである。價格がこの限界を超えて騰貴するならば、需要に應じてこの所要分量は減少するであらう。¹⁾

(注二) 工業生産部門に於ける剰余利潤と農業生産部門に於ける差額地代とは、本質上何等異なることがない。たゞ左の點に於て異なる。

(一) 前者即ち剰余利潤は資本家の手に入るに反し、後者即ち地代は、地主の手に入る。

(二) 前者は何等固定的なるものではなく、常に一の資本家から他の資本家に流れ移り行き、さうして或は現はれ或は消え去るものである。これに反し、後者は土地の差異(肥沃度、地位)なる持続的なる自然的基礎を有してをり、一の固定的なるものである。

(三) 前者に在りては、生産費の下落により剰余利潤を生むのは、常に最後に来る最も生産的なる資本なのであるが、後者にありては、剰余利潤を生むのは、屢々最も良好なる耕地の絶對的なる豊饒にあらずして、その相對的なる豊饒である。²⁾

以上によつて明らかなるが如く、このリカアドの差額地代説は、彼れの労働價值法則に立脚せるものであつて、それは彼によつて經濟學上に於ける動か

1) Marx, Theorien, II, 1, S. 54.

2) Cf. Marx, Theorien, II, 1, S. 261, 2, S. 11.

すべからざる一つの定説となるに至り、後世の經濟學者の諸々の反對説——それらは殆んど何れも彼を正當に解してゐない——あるに拘はらず、現今依然としてその生命を保持してゐる有様である。勿論現今とらるゝところの地代論の或るものは、それが必らずしもリカアドの如く労働價值説に立脚せず、他の諸々の價值論に立脚せる結果、その本質上に於て、必らずしも同じであるとは云へないが、リカアドは差額地代とその價值法則との關係の説明に於ては、大體上、正當であると云つてよい。

しかし乍ら彼は、完全に、十分に、この差額地代成立と價值決定との關係を説明し得たりといふことは出来ぬ(一般的にリカアドの差額地代の説明の諸點に於て不十分なる所があることは云ふを俟たぬ、がこれらは茲に問題とする所でない)。彼の價值論に立脚しつゝ、差額地代を發展せしむる場合に當然瞭にすべかりし二三の重要なる點が残されてゐる。さうしてそれを指摘し、この差額地代理論を、絶對地代理論と共に、労働價值法則に依據せしめつゝ、展開成形したのは云ふ迄もなくマルクスである。私はこの差額地代と價值論と

の關係の説明に就てのリカアドの足らざる所を次に若干考察して見たい。

リカアドは、この場合貨物の交換價值が最大の勞働分量によりて決せらるゝと云ひ、差額地代成立の基礎を勞働價值決定の上に置いてゐるのである。それは洵に當然なのであるが、この差額地代成立の出發點たる所の平均的(市場)價值は、この場合異なる生産部門間に於ける競争の結果、それより轉化するところの、さうして平均利潤と費用價格との合成たるところの、生産價格によつて販賣されることを前提してゐるといふことに就ては、彼は明白なる理解がなかつた。このことは彼が一般的に價值と生産價格との二つの概念を混淆するところの態度の一つの現はれである。しかし假令この二つの概念を混淆しても、差額地代理論を導く場合には、さして障礙にもならぬが、絶對地代理論はたゞこの二つの概念を意識的に分別することによつてのみ甫めて導き出されるのであるから、この二つの概念を混同するものに絶對地代理論の存在する筈がない。リカアドが絶對地代の理論を發展せしめ得ざりし所以である。かく見て來るとこの價值概念と、生産價格概念とを混同するこ

とは、單り彼れの價值論の本質そのもの、缺陷であるばかりでなく、その地代理論の發展にも尠からぬ影響を及ぼしたことになるわけである。

○更にリカアドの差額地代理論は、その成立に關する限り、即ち價格決定に關聯する限り、資本の自由競争と平均利潤率の法則とを前提とし、同一生産部門に於ける同一種類の貨物は、最も都合良き生産條件の下に於て生産せられたる部分の貨物の價值——最小勞働分量——に依つて決定せらるゝものではなく、最も都合悪き生産條件の下に於て生産せられたる部分の貨物の價值——最大勞働分量——に依つて決定せらるゝ、といふ前提に依據してゐる。

彼はこの點に關してより、詳しく説くところがないが、この點に就てはかなり突き込んで分析解剖を必要とするものがあると思はれる。

第二篇第二章に於て述べたる如く、自由競争の貨物の價值、價格に及ぼす影響には、(一)同一生産部門内に於けるもの——この場合には同じ價值若くは價格と異なる利潤率とがある——と、(二)異なる生産部門の間に於けるもの——この場合には異なる價值と同じ利潤率とがある——との二つがある

わけであるが、地代の成立するのは、後者の場合——生産価格、平均利潤率の存在——を前提とせる所の前者の場合に於てである。リカード地代論は、この同じ価値、価格と異なる利潤の存在と、異なる価値と同じ利潤の存在との二つの事實に立脚してゐるのであるが、彼自身はこのことを明白に感知するところがなかつたのである。

斯様に地代發生するのは、同一生産部門内に於て価値、即ち平均(市場)価値が決定せらるゝがためであるが、この點に就てリカードが説く所は、既に見たる如く、極めて簡單である。彼れの謂ふ所の価値決定により地代が成立する場合は、一般的に市場価値が決定せらるゝ場合の一つに該當するものゝやうである。彼は、一般的に市場価値決定といふ全局的の觀點から、地代成立を説く所がなかつたのである。既に述べたる如く、市場価値決定せらるゝ場合には、總貨物の大部分を占むる貨物部分が如何なる生産條件の下に於て生産せらるゝかに依り、三つの場合の存在が可能であると思はれる。即ち同一種類の生産部門内に於て、上中下の三つの異なる生産條件があると假定する場合、

(一) その部門の貨物の總分量の大部分が中位の生産條件の下に於て生産せらるゝ場合に於ては、その部門の貨物(B)の(平均市場)価値は、一樣にかゝる貨物の価値——平均労働分量——によつて決定せらるべく、(二) 其大部分が上位の生産條件の下に於て生産せらるゝ場合に於ては、その部門の貨物の市場価値は、一樣にかゝる貨物(A)の価値——最小労働分量——によつて決定せらるべく、(三) 更にその大部分が下位の生産條件の下に於て生産せらるゝ場合に於ては、その部門の貨物の市場価値は、一樣にかゝる貨物(C)の価値——最大労働分量——によつて決定せらるべきである。かゝる假定の下に於て、第二の場合には、市場価値決定者はAであるから、何れの貨物にも餘剰利潤即ち地代發生するの餘地がないが、第一の場合に於ては、価値決定者はBであるから、Aのみが地代を獲得し、第三の場合に於ては、価値決定者はCであるから、A、Bがともに地代を獲得することゝなる。

リカードはこの一定種類の貨物の總量の大部分が如何なる生産條件の下に於て生産せらるゝかにより、社會的的平均的生產條件は種々と具體的に異なる

るものであり、随つて又その市場価値はそれに應じて種々異なりて決定せらるゝものであり、さうして地代はその特種なる場合に於て成立するものなることを、明に意識するところがなかつたのである。

要するにリカアドに在りては、差額地代成立と市場価値決定との關係については、なほ不十分なるものがあるにしても、事實上、兎に角この二者は關係づけられてゐるのであつて、このことは彼れの價值論が地代發生によりても決して排除せらるゝものでないことを瞭にせるに於て、又彼れの地代論が單に諸々の常識的地代議論の叙述より離れ、確固たる科學的基礎の上に立脚せるに於て、まことにリカアド經濟學の偉大なる貢獻と云はねばならぬ。しかるにさきにも一言したるが如く、リカアド地代論はたゞ差額地代にのみ終始し、その勞働價值説より當然に誘導し來るべき絶対地代の理論を缺いてゐるのであるが、この缺陷の來るところは果して何處に求むべきであるか？ 私は次にこの點について若干の詮索をして見たいと思ふ。

二

既に述べたる如く、リカアドは價值と生産價格、剩餘價值と平均利潤とを同視したのであつて、彼に在りては前者の後者への轉化および個々のなる場合に於ける兩者の不一致の問題はあり得ない。さうして彼がこのことは可變不變資本の區別を瞭らかに意識せず、所謂資本の有機的組成について何等明確なる理解を有たなかつたからである。絶対地代はこれらの概念分別の上に立つてゐるのであるから、これらについて正しい理解を缺くところのリカアドに絶対地代の理論のありよう筈はないのである。

ところがマルクスに依れば、既に屢々見たる如く、價值と生産價格とは截然區別される。前者はそれ自ら勞働價值であり、後者は平均利潤と費用價格との合成である。さて全一體として見たる諸商品の生産價格はその總價值によつて決定されるものであり、随つて種類の異なる諸商品の生産價格の運動は、他の總ての運動が不變であると假定する限り、専らその價值の運動によつて規制せらるゝものであるが、しかし一商品の生産價格は決してその價值と一致するものではない。一商品の生産價格は或はその價值以下となり、或